

丁丑雜記

八

昭和十二年九月下旬起筆

特別
14
1919
489



丁丑雜記八

昭和十二年九月廿二日起筆

日勤の前の暮らるる池畔の秋が華を散らし今の
 味き氣も、草が池中にあり、池におかぬいかゞ紅
 が惟をちりしもの、秋の味くといつて秋が来れど感せ
 しめ、秋の秋の代表の植物が、あつた如く、秋を
 魁つて下る秋の字が、あつた。秋を愛する、こと、たゞ
 からい、昔、秋の、心、が、何、と、い、ふ、こと、も、あ、る、秋、歌
 も、ぬ、是、日、の、歌、人、の、心、を、い、ふ、心、也、庭、見、も、
 展、望、も、い、ふ、心、を、命、じ、玉、秋、の、秋、庭、見、を、
 美、名、の、呼、ん、だ、あ、る、私、の、池、畔、あ、る、秋、の、七、八、年、前、ま



吳歷筆 山水圖

七八日花壇の樹蔭にあつたまゝの 両兄菜のきりりよ
と、今の衣に移して元今日先入必りとするのてかゝる
ろくはあつた。白合の秋の内の庭とすまゝに
萩がたよといふ思ひあつた。河内道邊が牛込の庭
の庭に各地の萩を移植し、そのを、存するのあり部
分を、買取り、附し、花壇、全部の萩を、替へ、まゝに
存分の、花壇に、移し、したが、いひ、紅白さきまぐし、行
七、こもく、萩時、既、賣り、價も、あつた、久しく、花
み、花壇、に、かゝる、い、や、ま、し、今、い、又、次、か、あ、つ、た、
の、津、田、ち、柳、多、現、代、畫、家、の、良、寛、の、娘、の、の、と、
せん、の、似、似、の、字、を、書、く、此、の、良、寛、の、の、水、鏡、を、あ、き、
中央、の、繪、を、載、せ、て、あ、つ、た、一、次、を、行、は、れ、
藤、本、素、人、の、

藤本素人

説く、あ、つ、た、取、つ、た、ま、ま、い、ふ、説、の、ま、ま、い、ふ、い、ふ、お、せ、い、ろ、く、感
せ、し、め、此、一、節、の、良、寛、の、先、の、狭、川、先、生、の、懐、慕、を、稱、せ、
ん、と、し、て、地、花、の、の、の、を、認、ん、だ、徳、成、寺、の、丘、の、墓、を、見、
ゆ、と、あ、つ、た、日、の、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、年、長、き、い、は、れ、
と、洗、つ、て、あ、つ、た、山、邊、の、見、ゆ、と、あ、つ、た、聲、を、あ、つ、た、の、と、
踏、踏、し、て、あ、つ、た、に、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、良、寛、を、
ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、
か、え、ど、ま、ま、い、ふ、い、は、れ、狭、川、先、生、の、娘、の、良、寛、の、先、
生、の、教、を、受、け、れ、あ、つ、た、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、
か、つ、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、唯、れ、縁、あ、つ、た、良、寛、の、遠、く、か、つ、ま、ま、い、
れ、と、ま、ま、い、ふ、祝、の、ま、ま、い、ふ、前、の、庭、に、ま、ま、い、ふ、ま、ま、い、ふ、
と、尼、ま、ま、い、ふ、あ、つ、た、ま、ま、い、ふ、い、は、れ、の、ん、と、目、分、つ、た、こ、ん、が、ら、ま、ま、い、ふ、

切り合ひたるは、たゞも、と一とある、と一と、奥味あり
ロリーメンズが、あつて、事、美、の、さう、通、り、か、あ、め、ら、い、ま、の
か、ん、説、と、し、て、や、脚、色、ハ、効、く、あ、つ、て、こ、と、思、ひ、し、め、れ、
〇世の中の人の心、つぎ、つぎ、と、あ、ら、う、さ、る、人、性、ハ、概、
シ、美、良、ハ、あ、る、。赤、面、の、羞、恥、の、外、部、ハ、現、い、う、。形、相、ハ、
道、義、ハ、心、き、と、又、う、こ、と、が、出、来、る、。此、ハ、羞、恥、の、情、ハ、女、子
ハ、尤、も、烈、しく、鮮、明、に、現、い、ん、。殊、々、美、ハ、い、年、少、者、ハ、尤、
シ、ハ、羞、恥、の、情、ハ、極、く、あ、つ、た、。一寸、身、体、ハ、觸、る、と、恥、と、未、
く、さ、る、。觸、る、と、し、て、さ、あ、く、觸、ら、れ、こ、と、い、く、レ、ソ、グ、ツ、タ、か、ら、
此、ハ、羞、恥、ハ、そ、こ、進、化、が、變、め、る、。昔、の、武、士、ハ、殺、等、ハ、
か、兵、操、を、守、る、。此、ハ、生、理、的、作、用、が、死、者、の、働、き、と、さ、ら、う、の、
あ、る、。殺、等、ハ、此、ハ、羞、恥、の、情、ハ、下、股、の、肉、ハ、男、子、の

藤原

造、り、及、び、女、性、の、強、弱、の、力、を、現、い、す、よ、う、な、ら、う、。こ、の、情、動、を、
女、性、と、名、づ、け、て、或、る、生、理、学、者、の、測、定、ハ、極、く、と、全、身、
筋、力、を、百、パーセント、と、し、て、男、子、ハ、八、四、パーセント、と、
の、ん、女、子、ハ、九、四、二、パーセント、と、股、を、縮、め、る、力、ハ、男、子、
ハ、十、倍、強、い、と、云、ん、な、ら、う、。い、くら、男、性、の、強、弱、ハ、由、つ、て、
兵、隊、を、能、く、守、ん、と、し、ま、す、。こ、の、情、動、ハ、武、士、
ハ、あ、つ、た、。羞、恥、を、日、脱、し、た、ら、う、。此、力、が、ま、る、。羞、恥、
ハ、道、徳、の、源、と、し、て、あ、る、こ、と、が、女、子、ハ、由、つ、て、七、殺、等、に、現、
は、い、う、。

〇吾々の戦報は連戦連捷、いまだ敗報は指しつかぬ、
とく、快い快いも、緊張は解けぬ、後著城下の血を
さらすの日更々大敵の現はるゝを、保し得るに、か

ある。吾等は今度の事変に就て最初より必勝を期し、勝
敗の関心がさうな。思想へは日本も強くなりたれば、彼等
七勝日の故であるが、戦術を考へべき進歩をさしける
相もまいが、利権の利國に對抗し得るものがある。吾
等も比手強敵とさうな。争ひをさす。實にある。吾
等の婚り四つて日清戦の時を追憶して、吾等も得る。既三勝
史の事實とさうな。今日吾等の感じも甚だ勝騰ともある
が、對治の戦もさうな。収局はさうな。見込七つ、さうな
此、こんが吾等の感じである。恐らく多数の國民の吾等
と感を用ひる。何とさうな。東亞才一の老大國
である。腐つても、精である。開戦の方り、大元帥が大義を
廣島へ進め、こんが、由つて、さうな。大視せんらる。が

標原製

かゝる。吾等が廣島へ開戦した。ことと當然である。其故
である。支那の物資と高き軍と、七元貸して、殊に海軍
の定遠(鎮遠)の如き、復、東の軍艦があつた。實支那の
中、四つ、さうな。自負り、四つ、あつた。世界も日本も、只の、大回、い、あ
さうな。餘程、買冠つて、さうな。本、海軍、丁、世、思、さうな。面、さ
何程の、大人、物、の、こと、と、又、へ、ル、の、七、元、貸、買冠、さうな。あ、つ、た、
二角、支、那、と、戦、つ、て、果、して、勝、ち、得、る、と、吾、等、が、さうな。初、五、勝、つ、た、
疑問、あ、つ、た、が、い、ご、戦、つ、て、見、ると、あ、ま、の、弱、い、と、さうな。あ、う、さ、う
な。皇軍、に、破、れ、る、勢、が、い、今、の、如、く、運、就、連、勝、あ、つ、た、吾、等
の、さ、時、痛、切、な、感、が、あ、つ、た。支、那、の、大、家、も、さうな。あ、つ、た、
ある、が、さうな。吾、等、の、感、が、あ、つ、た。實、力、を、以、
つ、て、南、へ、進、出、す、が、強、弱、を、分、つ、た、と、さうな。あ、つ、た、
つ、て、南、へ、進、出、す、が、強、弱、を、分、つ、た、と、さうな。あ、つ、た、

軽侮を言はせしめる我邦と力を南してどしどし敗退して漸次
倒して、大家をいひアテるるに、よむるの^{（後年のこと）}露國の如き
世界に恐んとしめる大國七大家に心を受けてみるに、
日本を以て取組するに、よむるの^{（後年のこと）}露國の如き
人、あまの弱いよむるの^{（後年のこと）}露國の如き、
と大家とすすも、か看取威嚇があることをあめく感^{（後年のこと）}
の中、大家氣取も、人、大家を以て許すよむる、
こゝに、よむるの^{（後年のこと）}露國の如き、
我へ、悔すべしと後、つれが、吾等の志、
の恨事へ、我が鮮血を流して得る、
流、
等●遠征の情、
三回の子
三回の子

(又)

時激矣、あつたりの、
田原、
昌の、
ひ、
〇二三日、
未、
仰、
あ、
ハ、
初、
あ、
お、

神速軍運ぶのことも此後あるが故なり、吾ん幸いする
よは後にも不幸しあるべきは彼人の操縦括るし、中
又戦ひいれり敗る、今次の口口支の變に日本に幸する
そのいまも此の勢況は故に為す力不可も
今朝の戦報より、皆南京を籠むいり吾軍
軍中今次民間も敵に全日本非ありと
伏見を呼ぶ、急進全日本非を武百台
九月廿三日記
○戦争の地帯の事い又悲慘の事いである、係し此の
常の事悲慘の事が起る頻りに起ることを吾等の
悲しむるを得る、吾等の初時の口口自今の一代一四や
二四ハ戦争が起るかも知るいよ、吾等心せしるること

あるが、まゝ今も空想のやのきば起つたの、あまの
の感をもり、我等が初時と異なり外國戦の善作の
戦ひもつた、及得るの清人がカンベの久が軽氣脱い困
を脱したことも、今も記憶である、忽ち目前又戦をも
又さこともつた、まゝ成底の戦ひも、吾等の仰里七
吾等の逃難先七戦地ともつた、銃撃をも成る、さへれ、
吾等が郷國內の初時、今津の吾が仰里七
ぬ、吾等の家もたし、あれ、今津の将校が出征するの、
目的もつた、吾等の家もたし、あれ、今津の将校が出征するの、
山々幕軍が最後の戦をやつたこと、伏見島羽の官軍

と幕軍が戦つたこと北伐のあつたころを先づ長州征伐
がある。外回甲の馬洲砲撃のあつた。戊辰の乱後、西
館の五枝部の難山あつた。漸やく維新政府が運つた後
七内乱の能本に作賀森の志のきりて起つ。終つ西南軍
争が起つた。吾等の文に東京の英米なども人びわれか
毎日の日の敵報も読む熱中してはらた。其の徴兵令
が公布せんか、吾等も兵役に就くのかと熱心に述べた。
とがあつたが、どうも吾等が吾等も兵役に免れぬ。再米
全く徴兵令の外を終始してゐる。前後臺灣討伐のこと
あり、支那と韓台として是回が戦開が起つた。東京
支那事件が各回の公使館を侵し、七聯合軍と對抗してし
かた、遂に日清戦争が起つた。外回を討つて日本

横原製

空前の大戦だ。大元帥陛下の大勲を度うと進めらる。本年
回海軍も是れは用ゐられた。吾等の戦地も赴かるとはは、後
と気がたつた。戦つて大日本軍に赴いて海軍の使人だ。北戦
争の吉和勝敗の見南七の。兵糧支那を要む。戦つた。戦つた。
人のなき。弱く百戦百勝。終つて段の降を納めた。終つた。
造る。三回の干渉があつた。秘切をめぐると。吾等も此
時を後悔した。こといふ。それが、臥薪嘗膽の我兵力を強め
て、十年を経て日露の大戦を演る。吾等も人びわれか、
る。吾等も手ごたへ、全く回運も晴して、戦開のあつ
た。いん七窮極日本の戦捷も帰した。戦果も得つた。所、無
つた。回方の講和を拒むことが出来た。うらた。吾等も世界
の大回と二回を征し、得た。吾等の隆りとして世界を揚る。

爆撃の尤も燃えが戦陣の進行に促進する。横空を量り
二隻十倍する。よがち絶つる軍兵、勢うく心々巨額より
しめる。吾等の戦陣、飽きれば戦陣に止まぬ、いかに世界
の平和の何人の日に来るのひをたすか。戦陣、最も業ある
割ひ、最も最も流るる割ひある。吾等の死から割ひ、思物を生ん
たまはるの如き思ひがある。不思議な我々の国に限り、戦戦
の割を守りしことをかたし。この何人かの仕合がある。戦陣、八表
面陽氣の、^{（注）}裏面、陰陽の、^{（注）}ありあり。日本の我生命線
の為、最も戦ひ、遂に世界の二覇権も握らん。七あるが其
の犠牲の甚大なることを考へると、如何に運最速勝いも
吾等の眼を掩りたるを得る。吾等の白状する、芝居を観
て泣く徒があることも。

九月廿五の記

○近刊の中央公論（九月號）と露國のニエライチ二廿の日
誌の（日露開戦から革命勃発迄の合が譯せん、要り
に注釋を附せんことを。この一巻の價値あり、よびあるが同
時に流るる、^{（注）}譯の難い、よびある。又毎日記する所、
敗軍の死する、^{（注）}ありあり。四内、^{（注）}戦場、^{（注）}の事、^{（注）}ありあり。如何に
露軍の、^{（注）}日と心を痛めたことか、露軍の、^{（注）}正憲政体、
困難を濟す所、^{（注）}を先んず、^{（注）}狐疑、^{（注）}深くして、^{（注）}断、^{（注）}之、^{（注）}去、^{（注）}く、
革命の、^{（注）}その、^{（注）}自から、^{（注）}招く所、^{（注）}と云へ、日本に、^{（注）}か、^{（注）}入、^{（注）}て、^{（注）}其、^{（注）}漢、
斬らん、^{（注）}至極、^{（注）}憐れ、^{（注）}る、^{（注）}る。日露の戦争、^{（注）}運、^{（注）}敗、^{（注）}し、^{（注）}果て、^{（注）}は、^{（注）}希
位を失つて、^{（注）}家族、^{（注）}と共に、^{（注）}銃殺、^{（注）}せらる、^{（注）}。吾等、^{（注）}湖南、^{（注）}す、^{（注）}喪、
を、^{（注）}い、^{（注）}と、^{（注）}する、^{（注）}取、^{（注）}つ、^{（注）}て、^{（注）}其、^{（注）}の、^{（注）}悲、^{（注）}劇、^{（注）}一、^{（注）}擲、^{（注）}の、^{（注）}涙、^{（注）}を、^{（注）}流、^{（注）}す、^{（注）}能、^{（注）}は、^{（注）}た、
ら、^{（注）}ず。

○支那の軍隊：督軍と云ふものは北平に在りて兵が痛付
んとして心用捨らるゝ銃殺するところ、督軍も特別に所
以多しと次日の戦報中「天すんも揮洒あり、皇軍が如
何ん猛烈なるも」○前面にさう兵の自衛するも其の動か
まのふい、皇軍七只の志のゆるぎなき、感してさして陣地攻
略、後浦へさるるも、彼等が動かさざる道理、銃銃を
以つて嚴重に縛られ、退き得ることもなかりし、この戦後等
ハ西杖を差べし、休んでおれと云ふ、督軍の為す所の也、
ハ苛酷であらうか、一端を思ふに、皇軍に於ては、部將
が先鋒にさす、進んで部下に倣ひ、部將の多く命
を失はざる、是れが故なり、部將の死して部下の勇は百倍
す、彼我の勇怯の差、天壤を隔るる事あり、軽卒と

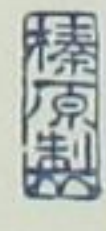
標準

危殆の前、西に置いた、督軍が危きを見て、先づ走つて見
ると、皇軍の身も、士卒の精神も、死なば軍勢の凶
を免ると一般に、如何に強固なるも、千倍に敵よりきよきと
ま、い得可けんや。
○九月廿五日、夜二時限り流し、田ヲウも禁止する、ことする
つたがソラン、即ち約り、逃る、出が、初日の計、素とす、
二六千、四、約し得れと、皇軍も、百、日、の、計、約、の、六
萬、田、一、年、の、節、約、の、廿、一、萬、九、千、田、と、する、深、更、の、田、ヲ、ウ、は、往
く、深、溝、の、様、を、さ、す、不、善、業、を、知、り、初、日、に、風、化、を、正、す、と、
七、効、と、す、と、せ、り、
○今次の戦事、以て決死の要戦と銘すべきものが、殊に、
る、い、ち、多、く、い、が、保、定、の、役、に、敵、を、截、ち、た、汽、車、を、爆、破

夫も命を言われ飛行機が、低空飛行を行つた為、高
射砲二機関を破ると、到底脱去しを得ずして覺悟を極め
結果、汽車は、爆弾を載せし飛行機、飛行士も
と墜落し、汽車の爆破、成りしか、是と共に、この身
体も、激激と、如斯く、勇敢無比の一例、敵の身
命を、此の墜落し、思つてゐる、何んぞ、爆
八と、極と、共、天上より、降り来たりの、敵の心腹を
實に、此の、みろく、敵の、果敢の、こと、倭機を
果敢に、此の、此の、果敢に、五人、今、三、勇士と
ど、よ、よ、の、此の、飛行機、
爆弾、
一、飛行機の墜下、敵の、新戦術、
標記

吾等の戦の兵士の命を、
二、快惜と、
九月廿八日記

○九月廿八日、近刊書を通つて、石高砲臺を見出した。若者
ハ、誰か、と、思ふ、
頼山陽も、著、
ある、
の、
弊りの、
程りの、
の、
據、

記す所の説話初期の工業と関係するものは多い。前巻の
「狂石塊」として互いに後々しめあふ。石塊の石の破片
も技師から見えよと棄て難い歴史的のよめがある。互ひに
女の来歴を後所馬琴の所著の序と改訂のやうな
趣がある。この二冊の外國の挿話を描き合ふ米國が
ロッキーンに於て陸太平洋鐵道をロッキーンが挿話を
完成をせむれば、鐵道と社長の賞金五千圓を不切手
に引いた。ロッキーンは女の切手といふも七金に換へる
女の切手も挿話を未だと改訂の手紙とある。自分の
記念物だから、此のやうに保存せらるゝと云ふ。聖と
ハル不切手を指さし示したとある。
工部省の工業家と改訂の序に書かんとあるが、


是れらの説話日本への煉地を考へることす。切手は、
外國から輸入したと云ふが、その考へるは、學生の考へる
狂人のP
O、Cと組織した。POは、焼芋の事、Cは、一回の挿入、全二
也の抽籤の挿入を定めた。焼芋は、馳せも風呂敷一
杯芋も終つて一回又うフリ喰つて大い元々四家と改
訂した。この説話空冷の事、他日述ぶ所は、空冷の起つた端
は此のPOCから見ると、得る事、此の空冷は日本
の工業の原動力である。

外國の海産のトンチンが著る。出果る。日本は、大規模
のトンチン工業の出来ることを海士の待望として、大正
の初年、東京市本町山陽丸物有識者(藤原の
のつと)東京市本町の廣井教授、杉原が海産の調査を

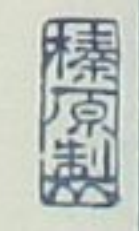
かりのてに門の尾ト子んを誦をすれ候。其の何んも決
し^{（おん）}日^{（ひ）}を^{（い）}い^{（く）}ら^{（う）}、とうとあんが無人以後ひるけんは
決^{（ま）}ま^{（り）}ひあ^{（ら）}う。自^{（み）}分^{（り）}遺^{（い）}言^{（い）}し^{（と）}あ^{（ら）}く、権^{（けん）}柄^{（へ）}の中^{（ち）}に^{（ま）}聖
遠^{（えん）}鏡^{（きやう）}と入^{（い）}ん^{（と）}を^{（ま）}ま^{（り）}と^{（く）}ん、冥^{（めい）}土^{（と）}か^{（ら）}え^{（ら）}ひ^{（あ）}ら^{（う）}と^{（し）}と^{（し）}唐^{（たう）}人
并^{（へい）}教^{（きやう）}授^{（じゆ）}ま^{（り）}あ^{（ら）}れ^{（ば）}、其^{（そ）}後^{（ご）}ト^{（ン）}子^{（ン）}と^{（決）}定^{（てい）}し^{（と）}あ^{（ら）}ふ^{（に）}後^{（ご）}分
と^{（ま）}ま^{（り）}ひ^{（あ）}ら^{（う）}日^{（ひ）}を^{（い）}い^{（く）}ら^{（う）}も^{（あ）}ら^{（な）}い^{（は）}、も^{（と）}遺^{（い）}言^{（い）}の^{（お）}取^{（と）}消^{（し）}れ^{（ば）}僕
ハ^{（内）}服^{（ふく）}で^{（え）}ら^{（う）}と^{（ら）}の^{（は）}か^{（ら）}、例^{（れい）}東^{（とう）}大^{（たい）}宿^{（しゆく）}樂^{（らく）}ひ^{（起）}上^{（じやう）}か^{（ら）}延^{（えん）}び^{（ま）}れ
の^{（は）}日^{（ひ）}を^{（い）}い^{（く）}ら^{（う）}遺^{（い）}言^{（い）}れ^{（ば）}と^{（ら）}ふ^{（は）}と^{（あ）}ら^{（う）}が^{（お）}お^{（し）}ら^{（う）}こ
と^{（し）}ら
親^{（しん）}慈^{（じ）}の^{（は）}疏^{（しよ）}に^{（お）}親^{（しん）}も^{（い）}ろ^{（く）}の^{（遠）}流^{（りゆう）}が^{（靴）}を^{（指）}か^{（ら）}日^{（ひ）}を^{（自）}自^{（じ）}
あ^{（の）}時^{（とき）}染^{（せん）}と^{（落）}ち^{（る）}こ^{（と）}が^{（あ）}ら^{（う）}と^{（ま）}あ^{（ら）}ふ^{（に）}其^{（そ）}實^{（じつ）}驗^{（げん）}を^{（後）}に^{（し）}て^{（の）}
の^{（は）}日^{（ひ）}を^{（い）}い^{（く）}ら^{（う）}廿^{（じ）}三^{（さん）}年^{（ねん）}、其^{（そ）}都^{（と）}の^{（は）}時^{（とき）}で^{（ご）}と^{（唯）}此^{（こゝ）}一^{（に）}人^{（に）}

能^{（の）}を^{（例）}に^{（大）}津^{（つ）}か^{（ら）}あ^{（の）}時^{（とき）}路^{（ろ）}本^{（ほん）}を^{（行）}色^{（しき）}に^{（れ）}こ^{（と）}が^{（あ）}ら^{（う）}か
北^{（きた）}の^{（疏）}み^{（れ）}も^{（い）}い^{（く）}ら^{（う）}物^{（もの）}々^{（々）}と^{（自）}味^{（み）}も^{（あ）}ら^{（う）}く^{（ら）}。雪^{（ゆき）}と^{（氷）}を^{（こ）}の^{（は）}を^{（こ）}深^{（ふか）}い^{（履）}
の^{（留）}留^{（りゅう）}は^{（よ）}あ^{（ら）}ぬ^{（の）}遺^{（い）}言^{（い）}れ^{（ば）}と^{（ま）}あ^{（ら）}ふ^{（に）}揮^{（ひ）}筆^{（ひつ）}も^{（自）}分^{（り）}の^{（郷）}土^{（と）}に^{（お）}
任^{（に）}驗^{（げん）}の^{（は）}あ^{（ら）}う^{（と）}ら^{（う）}も^{（あ）}ら^{（う）}く^{（ら）}後^{（ご）}に^{（れ）}。

豊^{（とよ）}公^{（こう）}の^{（聚）}樂^{（らく）}日^{（にち）}第^{（だい）}二^{（に）}徳^{（とく）}の^{（氏）}の^{（破）}徳^{（とく）}に^{（か）}其^{（そ）}の^{（遺）}撰^{（せん）}の
若^{（わ）}干^{（かん）}あ^{（ら）}う^{（と）}ら^{（う）}。西^{（さい）}本^{（ほん）}龍^{（りゆう）}寺^{（じ）}も^{（あ）}ら^{（う）}る^{（に）}元^{（げん）}聖^{（せい）}園^{（えん）}日^{（にち）}寺^{（じ）}の
寺^{（じ）}院^{（えん）}大^{（だい）}徳^{（とく）}寺^{（じ）}の^{（唐）}門^{（どうもん）}并^{（へい）}に^{（西）}本^{（ほん）}龍^{（りゆう）}寺^{（じ）}の^{（唐）}門^{（どうもん）}が
生^{（せい）}時^{（とき）}の^{（都）}久^{（きう）}夫^{（ふ）}須^{（す）}麻^{（ま）}神^{（しん）}社^{（しゃ）}即^{（すなは）}ち^{（竹）}生^{（せい）}時^{（とき）}の^{（神）}の^{（神）}の^{（神）}

殿七伏見城の遺構が秀吉の居た宮であったと云つて
ある。

桃山時代の建築は外四圍の模倣は多く獨自のものがある
就中城郭の日本獨自の二風が殊々天皇閣の複製を
する結構の後世の四建梁家を考へたものがある。堀
内城をどの最もその模倣をとりて考へてみる。
室所時代の建築の模倣をとりて奈良寺金閣を考
へ、本什の心をもつた、この建利義陽の模倣のあり
て流れたもの、すんで金箔を塗つたふし、この金閣の
名があらう、義陽の慈眼寺銀閣を比り、この名義
が、是等の為銀閣を塗らう、この名、銀閣の稱
がある。



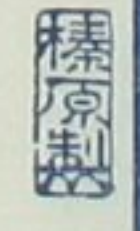
宇治の風凰堂の屋上も金箔をの風凰があらう、この名、北の
やの平面圖をえうと、西の果と流う、本殿の後ろ、尾の如
き、廊があらう、全く鳥の形を考へてあらう、この風凰の
名があらう、譯と云つた。

寺の建築は程々の夏窓がある、天台真言の二宗が
入つて、ここから、寺の建築の模倣も一度、北、徳前
諸宗の多く都を建て、建築法も均齊を主として、すんで、
即ち、義とあらう、比、天台と真言の密教の、ある、か、
明を、遊、け、も、神、秘、的、の、山、を、相、し、て、寺、を、流、け、
地形の、あり、ま、つ、も、均、齊、と、深、の、建、築、の、結、束、の、
切、り、の、内、陣、の、落、下、の、護、摩、を、林、の、ま、り、の、神
鏡、的、の、味、と、流、下、の、ま、り、の、自、知、建、築、の、ま、り、

元よりありに

我古帝城の走らざる磐石名を新蘇末を分けたるあり、
堂の色を取つたよと見えど、この圓は支那の古銅器
でも古皮の琥珀色にあり、支那の黄瓦の時代から用ひ
初められたるものなり。

大友良の柁詞と書冊とあり、その良の考は、南時
寺社と始り、書冊の宅を冊方と塗つたから、此の柁
字も七生んれと思ふ所の所、向ある所の説は、只に
大友良の土の色にこそあり、その良の考は、柁詞の
神竜元年十一月大友官の柁詞、柁詞の考は、柁詞
からしく破折し、あり、可成瓦葺り、大友良の考は、
あり、大友良の考は、大友良の考は、大友良の考は、



のよ由ると大陸風と見え、磐石名も、今も、
法隆寺の柁詞、遠蘇末の南都、元々、大友良の考は、
柁詞の考は、大友良の考は、大友良の考は、

母界と一書大い、後蘇末の我仁徳天皇の柁詞、
由圓に三重の柁を造り、封土三段と築のん、前方後
圓墳のあり、前後の径二百六十九間、後圓の径百三
十間、前方の幅百十八間、高さ前方後圓に、百十尺
尺、敷地無慮十四畝、柁の支那始り、大友良の考は、
大友良の考は、大友良の考は、大友良の考は、

大友良の考は、大友良の考は、大友良の考は、
大友良の考は、大友良の考は、大友良の考は、
大友良の考は、大友良の考は、大友良の考は、

さへ、各々の戦場の過去に、成り居る或る歴史に於いて、
繪画よりも、意味を以て、讀み入るべき、目前の戦場が又
今も、考へるべき、更なる歴史の迅速に知らるべきこと、●
ことの既往と今のこととある。或る時代、戦場を、非敵地
受へ、戦場に入ることが出来る。戦場、或る意味に於て
秘め、或る意味に於て、戦場の模倣、或る形式で、大略、戦場
に止まつた、或る意味に、勿論、今の如く、或る戦場の模倣が
當日知らるべきことと、神意の如く、或る戦場の模倣が
今も、同じであるべきこと、昔の昔、戦場の模倣が
今も、(その戦場の模倣、昔の昔の昔、生きた戦場の模倣が、
この、今の戦場、或る戦場の、デテ、いふ、多くの戦場の附
合、今、今の戦場、或る戦場の、デテ、いふ、多くの戦場の

標記

の、昔の昔、戦場を、交へ、或る戦場の模倣が、
今も、(その戦場の模倣、昔の昔の昔、生きた戦場の模倣が、
この、今の戦場、或る戦場の、デテ、いふ、多くの戦場の附
合、今、今の戦場、或る戦場の、デテ、いふ、多くの戦場の

道あから、路上飲を漬くまの早ヤコリヤンを嚙み外にまへ。素火ツキ
もまた敵の目標とさるゝ火を焚くことか禁物にしてか遣ふこと
由義とせんる酒の焼酎とさるゝ酒めを飲んて酒を運す
か下痢を起すも不甚だるゝ。彼等に行中清流の川に出遇
はんとせよと実を言ふも無程。酒めに出遇へば彼等のみ
と腹を必すも不何実すも愉快とす。初め愉快のみを飲む
喫酒をの徳比とさるゝ。惟も二三本ボツケのトも持つてあるも
九い或十人の親友が \odot 分喫するの儀を廻りの句ひを喚び酒を
すもあまるとさるゝ酒けさの酒めを。彼等の夜者も
若を枕すも一睡を合へり。夜中やとるゝ敵の死体の上は
比ことを登るも漸や大合事も到着とせん出でて入
かまの敵兵の軍兵銃音があつたりし。如皇銃を取る打撃

標印

すも酒の格闘とさるゝすも此敵のデニーへの四式の銃銃を
九いのこととさるゝ。特各の苦戦も合す此等の然るも是れ
不敵や投擲や地雷火を言ふも酒の苦戦と思ふるも未だ
懐心と解んすも支那軍の此等の山嶺の山嶺も
漸く難儀かあつたりし。と征服も是れも定むるも時、漸く
実を言ふ向い、防衛の言ふも思ふ。則ち可成るもさるゝ
銃後が運の難物と決りし。も、敵の毎酒と手高か届かぬ
出征者も殺しての其の事平高である。

戦場の、敵が飲酒は飛行機が幾千の機を飛ば
くと敵軍と甲隊の躍して投りては人知もあつた。未だ
向ふ方の特別に供給する方法を考へる必要が
あり

敵前河川決死のむら、供食類を食し、連中
が保室城の座を合謀つた一帯、ソリソリを織成
び、海とて兵士の敵軍を海までおちろせ
のを敵から奪ん、銃丸を浴びても、河川を渡り、
十人程の兵を失つたとある。又ソリソリの深淵を頂
察し、流るる流るる兵士の敵の目を遮る、為り、
丸種と多く、満身を泥を冷や、野戦でもあつた、
拾ひ、河川を渡り、又、幸あつて、泥濘を拾ひ、と信
つてゐる。

杜家宅のソリソリを海の時、兵士は銃を載せて一
部隊から十名裸体とす、兵士は、兵士の敵隊の考め
二十名のお中、二死、一、前岸を渡り、と裸体の考

標記

突進して敵の督隊を織成し、とある。

戦況のあつた兵士の泥と汗、苦んば、一意沐浴をせ、
二十、十、七洗面せ、思ふ、又、敵隊、或は、兵士、
身、再び、あつた、何と、土、兵士、おち、来、る、へ、き、や、と、
自、糧、の、不、要、か、兵、士、の、風、呂、の、錯、雑、を、お、つ、て、来、て、笑
れ、と、兵、士、と、あ、つ、た。

支那征討記 天塚村の版
新皇の天の詔を奉りて
いふ事あるはわづらひし國東軍
海軍軍艦をひらりて風を吹か
舞ひ方強たむ海軍の敵
後子の村をとりて奉りて
さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
徳三兵衛村を奪はれし事

(月三年八廿治明)本璃瑠淨の頃役清日



(月二年七卅同)附番座京東の頃役露日

○新皇漸やく動き燈火乾くあへき好時節ふ来れ、讀書人
ハ此の息氣候も吾等のしーソンにたまふ。河に北の氣節
次熱既三去つて秋上行七流ばず、青月蟻うささの茶茶蠅の敵か
せとく、煽風器國扇を操縦する日面倒七止み、未だ暖爐を消
るる及んば、身体ハ清潔感、夏時の情氣ハ一掃して臨方
とらん。尚に讀書の好曲こーソンは此時である。天澤ふしん書を
讀む、高の歌讀みし唯れ耳に入つての蟲のすねく音の
家ものむくしん、唯れ流れて月や夜、此の月北の蟲こんが讀書
子の奴信仲も、業感も活起し、此の信仲もである。○書と
讀むも、獨坐するのむくしん、此のこーソンは吾等の種々の感興を
世の、洗ひんや念心の虫を洗ひ、心置き、趣味する、最後の好
曲の時と云ふハ此のこーソンである。讀書の若者と對話するこ

きよかある。亦對境斯くある。唯れ徒々人の説く
のを聴くのみで、讀書の意を得る。おりのから批判は無くも
る。批判に相當の能力を要するが故に、後書子の此能力
と有せざるとも、何等か得る所か無んか。後書は時間流して
終る。後書に依つて得る所の法も直接其書の言の所
因つても得るのべからず、又説く所のところから聯想して間接
の種々の専考慮を得るのも讀書の收穫がある。小説の如き
娯樂の書は、或る人の心同様に往つての事、思ひあり、其書の
收穫を得ることある。故に書物の何等か益を得ることも
目的として讀むる及ばない。何れも讀むが外に其書の收穫
がある。讀書の爲め著者を對坐の人とせんが、その情味も
あつて、若ある、雙河や出来、亦著者に説く事ありあつても出

来るところの、若者が口舌を交さぬといふが、吾れ自ら著者の
位に於ては、之の自體を考へんが、その著者の各條をも説くとも
さういふ。眼を紙背に透つて、その著者の心も、若者の心も
中々付度して誤らぬこと、この心澄んが、著者の心も、
けんが、勿れの際の書物を讀んが、うらうらと、雲烟に
深衣人定ま、讀書の時こそ著者と對坐と云へ得る
のである。
秋期といつて法々の好期だが、こころの秋期も、人を緊張せしめる
下、果ては、人を感動せしめる人を感動せしめる
め、こころの、さし日支の、今、蘭、回、
時、將士、若者、朝夕の、やう、
き、終日張り切つて、死後、
二番

一に効果もあつたといふが、美らなまゝ交々として得たといふ此の
 后から拾多に散らし少くは四角と投じたと云ふことである。
 ○古来征戦の幾人か遺つて時人の記述にこそ戦場を立つた
 の甘美を解さるゝもの、武人の心懐である。日と衝突、敵呼も
 出征者を送つた、**○**其の征進を祝ひ出征者の光榮を極
 める、**○**鬼ともうて無言の凱旋す
 ことと考へると、誰か一掴み涙を流すを、湯人や骨肉の
 言ふまゝ、國民の皆さるの情、**○**別々として、**○**實業
 者の意味も送つた、**○**悲痛の送別、**○**
 彼等出征者の軍服を着せると、早く青葉を氣持換へ
 て生還を期せよ、決意の生還と、**○**えんを愛國心の熱
 意である。彼等の出身に、**○**骨肉と云ふ、**○**赤い血

標原製

一太平が續く、人間が利己的になる。この利己心を打破するには、戦争は最もよい導きである。平常は、個人の生活に
 没々としてをるものに、一度動員の命令が下る、自分一個の利害得失を考へてをる餘地がないのである。泣いてをらう
 が悲んでをらうが、萬歳聲裡にすべての繋縛を打切つて決然としてお國の御用に身を投出さねばならぬのである。戦死者
 の英靈は靖國神社に神として祭祀せらるるやうになつてをる。軍人が萬歳聲裡に家を出るまゝ、既に神籍に入るのである
 利己的生活をしてをるものが凡夫であり、自利利他圓滿の生活をするものは神佛である。戦時に働いてをる軍人は既に利
 己的生活を解脱せしめられて神佛の生活に入らしめられてをるのである。この意味において戦争は人間を淨化せしめるも
 のである。戦争は人間淨化の重大な神業である。私共は戦の爲に戦を好むものではないが、戦ひは人間を淨化する神佛の
 なさしめたまふところであるを信じてをる。

一戦争は澤山の人の命を奪ひます。この点痛心の至りである。しかし、よく思へば、戦ひのために捨てる命は國の命とし
 て永遠に生きるのである。天皇陛下萬歳三唱へて戦場に屍をさらすものは神佛の國に生れるのである。日本も支那も今日
 の重大事變によつて個人主義から神佛の國へ進轉をすることである。**相馬流の個人主義**

見て来たソ連邦

謎の國を語る徳永博士

今夏モスクワで開催された第十七回國際地質學會に日本政府代表として二十三名と共に参加した學問博士徳永博士は三月月振りに無事元氣に去る九月廿日夕刻歸京した、久しぶりにゆつくりと淀橋百人町の自邸に落ち着いた博士を訪問し會議の模様やソウイニットの國內事情やら國らずも瀟灑中勃發した支那事變に對する國民の對日感情やらを一一とめて聞いて聞かされた。

日本を出発して後トヘチエフスキ
一事件が起り國內騒然とし日本代
表の入りも拒絶されとかの報道
もあつたが私は日本政府代表とし
て出席するの何の故障もなくモ
スコに到着出来た。出席人員は
外國人四百五十人、ソ國人五百人
合計千人余で日本人はその内僅に
十三人で、獨伊兩國からは政府の
命令で一人の代表も出席してゐな
かつた。

ソウイニットの國內事情やらを
一一とめて聞いて聞かされた。

一番驚かされてゐるのは軍人でそ
の次は學者就中地質學者である
地質學者は二十年前は二、三百
人しか居なかつたが、今では約
二万人も居るとの事だ、(日本は
約五百人)日本もこれからは
大いに必要になると思はれる。
話は前後するが、ソウイニットの
内では外國人は元來モスコ、
レニングラード以外では汽車か
ら下車出来ないのだが、今回は
あちこちで下して下した、スタ
ーリンスクでは大製鐵所、クズ

鐵無量だつた
現在……ソウイニットは重工
業から輕工業の調査を始め有望な
所を見つけて工業地帯を建設して
ゐる、それ等は今日まだ彼等の言
つてゐる様な成績は上げてゐない
だらうが何分設備は立派だし
から充分な成績を上げたと思は
れる。

……代表……が一番大事にされ
西班牙なんか僅か一名位の代表
が抱だられて絶えず何かの演
説に引っぱり出されてゐたのは
面白かつた
この事と獨、伊兩國の代表が一人
も出席してゐないのと思ひ、考
へさせられた、彼等の私達日本人
に對する態度はこちらから驚かす

會議

見物旅行がありソウイニットの
山、地質を見て廻つた、長い旅行
は四十日も掛かつて行はれた、日
本代表中私共三人はシベリヤ地方
を四十日に往り見學し他の日本代
表は石油地方へ向つた

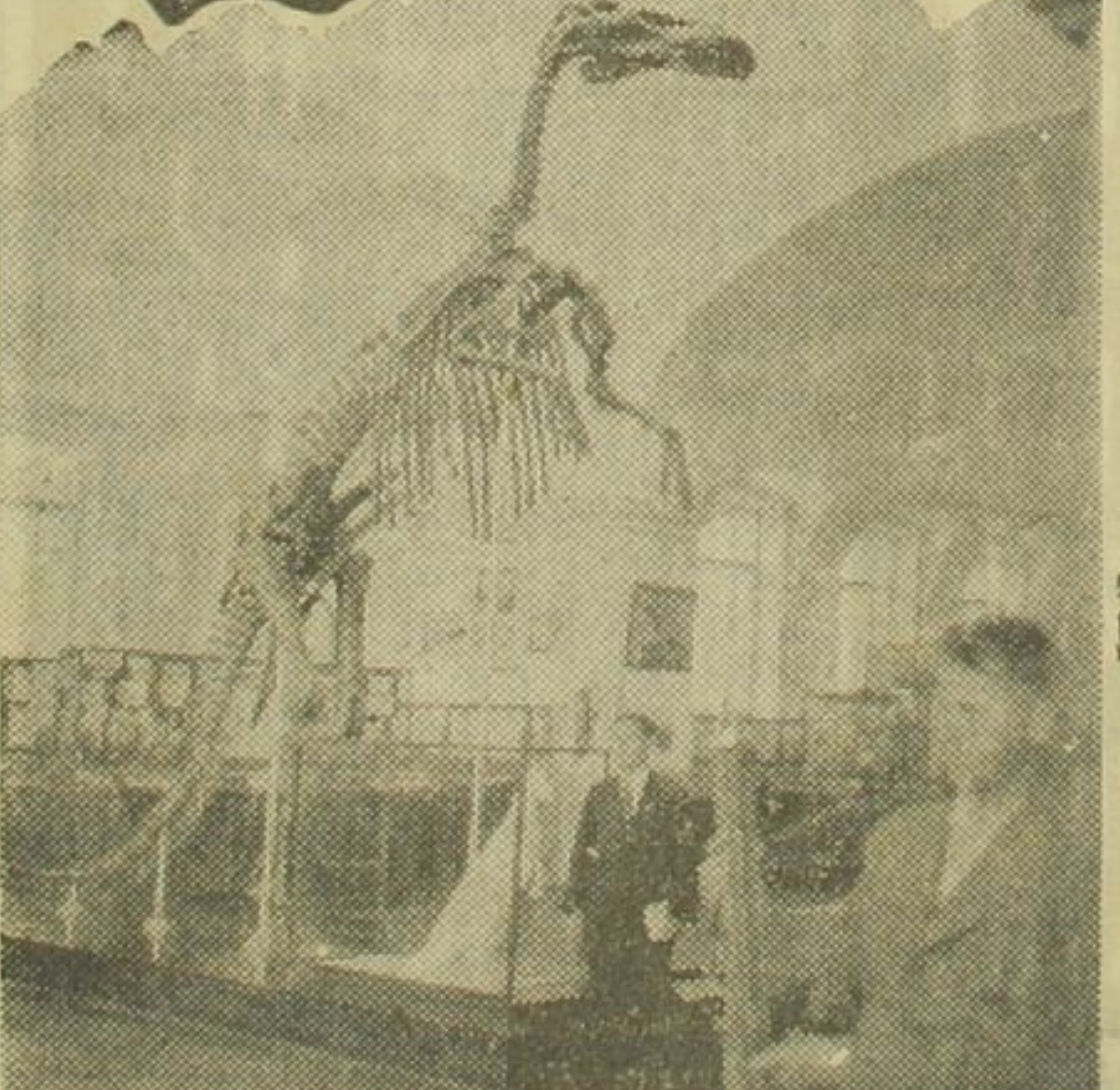
シベリヤ旅行中は特別列車を初
めから終りまで専用した、その
列車は途中駅でなくとも何處で
も自由に停車し數百軒先から自
動車で迎へに来て山中へ運んで
くれた、夜は大抵車中に泊り、
其の間に走り翌日必要な所を見
學すると云ふ仕掛だつた、ニニ
セー河を特別に一行(四十人)の
爲大きな汽船で遊航した様な事
もあつた

……今度……の會場はソウイニ
トでは五、六年前から計劃して
たもので會議やその報告書の作成
(來年中掛かるとの事) 第五百



地方であつてヨーロッパ・ロシア
よりもシベリヤの方が資源が多い
事が初めて知つた
……現在……ソウイニットで一

ソウイニットで一



界一の鉄坑を見學した、ウラル
山上の一方はアジア、一方はヨ
ーロッパと書いた大記念碑の前
に立つて兩洲をまたいだ時は感

れば答へるが向ふから進んで説明
すると云ふ事はないと云ふ體な
ものであつた【寫眞上はウラルの歐
亞洲の碑、下レニングラード博
物館】

の遠く望む、對峙する大國は、力りを争ひ、死んばあま
り弱いこと、吾ん之を支那、亦、露國、徴す、後、
は、吾國、敗ん、英、國、も、世界、の、恐、る、大、敵、也、

標京製

ふかきも亦元より倒しあはるるが、今方の戦州の近世の
一戦を試みる七一兵あるも、吾は日本にこそかおらん
と臨むるも、吾は吾の四の世界を成すの力をかんん云
ハル本國の世界の平和を以て英國と其國との自由を望
む。歴史的の下に立つ英の虎の威嚇起ると云い、印を
其地へ命を英の軍に輕くせん。其地へ命を起せん
英國に對する場は、吾は吾の力に在る。英も又
之を刺する。然るに、吾は今の下り候も、彼人海軍
を以つて世界を治るとも、吾も其の思ふに、日本
も勝算あり、何を國人の日本に、吾も英に候る所也
ことと云ふ。英は我國の真友に、英は其の防衛
せん。其時、吾は吾の力に在る。其地へ命を起せん

英和

やく慈愛を改めれば、獨逸が熱誠を以て、吾は吾の
ハ同の心といふ。大相のあり。但し英と我の心と、吾は
不敗成らざる。吾の力に在る。英は吾の防衛せん
吾相に、吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん
せざる可也。此の治癒を、吾は吾の力に在る。吾は吾の
洋の平和を、吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん
日清(日清)の戦、吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん
のみ
○。フコハカントは人心を感化し、吾は吾の力に在る。吾は吾の
死を是とす。吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん
吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん。吾は吾の防衛せん
吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん。吾は吾の防衛せん
吾は吾の力に在る。吾は吾の防衛せん。吾は吾の防衛せん

十月七日記

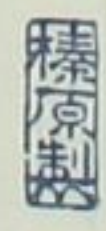
のいづくソソビ先手を打てはえんが有力で、并のり側をば
えんが直のえんが七功が無い故にプロのバグは機敏を要す
ソソのつき方ナク大勝の性で空防の寫真を作りし人と然く
ことよきある。日本の毎日を進行する新々をえんが其等のこと
此の報道が在り外國を傳へるといひあることと不審な情くちんけ
れども、えんが井底蛙的の思惑をいふ書き直さんと流布するから
事實が顛倒する。前項に於ては徳系侍士の流を扱つても、露國
に赴いた後今なる言まをすべしは彼地より一切本國の情を
えんがことか出来しは、彼への回の情をいふは彼を非んがふのこと
のみが書かせるならぬ全く瀆罪にともあはる、報道真相を
傳へようといふは、故流の働が是である、此働が一程の戦ひ
ある、電信電話を通じても敵國へ一歩前進し先んつる

藤原製

故流をばえんがいふは、友誼的の外國形多の取扱を求めらるれ
ての立場をとりしる。えんが金をと費するは心とあることとある
えんが軍兵の一部をえんがあつたりしる、砲台スパイをえんが
えんがもあつたり。今なる言まをすべしは、此れは、日露出陣將士
の留守宅に死して、怪郵書が飛んでは種々の取扱をするよめ
ある、えんがの怪郵書が飛んでは種々の取扱をするよめ
手に入らぬは、えんがの出来しは、えんがの宣傳術の如く、偏いたる
れと其等を感心しり、日本武力を勝つても、或は此の借財詐欺
戦術の取を取らぬと、限らぬ、節親の米國が漸やく起つて
條約も及ぶと、わづらわづらわづら、此の借財詐欺
條を違へ、輿論を動かして結果するもの。日本は、えんがの
此戰術を殺戮する、日本の支那領土を奪ひんとすといふ説か

八種供米米田氏が美に乘てんし量り日本を致致するの興隆
 を形つくらぬも不思儀の事い。大佐領の對内策を起し
 ても得ぬものも本勢の正を待たざるものある。勿論冷静
 の識者いかにもあつたが、其の少數の以て大勢を割ることは
 出来ぬ。此處大衆の興隆や美を生ずる動向の真相を知る
 の目的の爲の事ある。此の大事も悉き起すことあるか
 ら、日本へ正しき故を以りて宣佈を怠るべき事なく、日本の中々
 んに正しき大宣佈も勝を取らぬ功を二算に算くの憾を
 かきす。吾等が近事、就し特々此處を深めよ。(十月分記)
 ○篠田鏡造(左の如き)も不舞いに入
 りきた。花井梅は一時淡柳のうらみ
 出獄後の花井阿梅

出獄後の花井阿梅
 篠田鏡造
 △嫉妬と思はれるなら面白い
 國酔會(福江)の或夜。上野公園梅川樓の女
 將は、高村光雲、田中智學、市島春城三翁と



筆者等の前で、花井阿梅の出獄後、或高貴客
 が花園の番をさせ、生涯を茶と花で過させん
 と、「お手厚いお思召がありましたのに、ソレ
 を嫌つて、汁粉屋で當ても、忽ちボロを出し
 てしまひました」と、不憫がった。
 全く阿梅は末期を美しくしそくなつた。同
 人の實話に(割註は筆者)

ドウもお汁粉屋をやつて見ましたが、ウ
 マク利かりません(淺草千束町へ)、西洋料
 理店はヒドインですよ。利らない位なら
 よいんですが、二千圓ばかり損になりま
 した(神田連巻、ソレから仕方がないから、
 今度は神樂阪に小間物屋を出したんです
 が、これも思はしいことがありません。
 (牛込岩戸) モー一度出て見ようかと思つて
 みます(藝妓の、どんな變つた風が吹いて
 来ないとも限りませんから……。
 しかし藝はないんですから、踊の師匠、
 何でもやろうと思つてゐます。まだ獄屋
 へ行かぬ前に、世話してやつた男がある
 んですが……此頃はお金持の後家さん
 か何かと一緒にゐるさうで、私に
 轉がりこまれたら、どうかしてくれなき
 やアならない義理になつてゐるんですが
 私は参りませんのは、今行くと思はれますから
 く、金でも無心に來たと思はれますから

……嫉妬で來たと思はれるなら面白い
 ですが……。(十一月分記)
 この最後の阿梅の言葉の「嫉妬で來たと思
 はれるなら面白いんですが」は、味のあるこ
 とで、柳橋藝妓の根性が、地に残つてゐると
 見た人もあつた。

△千束町の汁粉屋母子は夜逃
 淺草千束町の汁粉屋時代は出獄の峰吉殺し
 の藝妓花井阿梅を観る、物見高い彌次馬連中
 が押懸け、押すな〜の大繁昌。阿梅はこれ
 に好い心持となつて、西洋料理開業の爲め、
 神田今小路須原芳次郎母子に、賃貸契約で
 千束町汁粉店を預け、家賃取立の積り。ここ
 ろが阿梅の姿が見えないと、客脚はゲツソリ
 減り、成立たず持切れない、須原母子は道具
 造作を賣拂ひ、夜逃げを極めた。
 阿梅は其間に、西洋料理、小間物屋みんな
 好い目が出ない。濱町二丁目―醉月の近所
 で、料理屋開店、一ト山當てんと、衣類持物
 悉く質屋の土蔵に忍ばせ、少し不足を千束町
 から出させやうと、脚を汁粉屋へ運ぶと、空
 店で夜逃と聞き、途方に暮れた。これから彼
 の女の末路に、田舎廻りの女役者といつた、
 悲惨の色彩が塗られた。「牢死した方がよつ
 ほど宜かつた」と謂はれる現實であつた。

或夜、おれのことか
 女、おれのことか
 か日本橋の女、おれ
 と思ふか、おれ、おれ
 と飲んだ時、花井
 梅が氣を奪ふと出た
 とおれが呼んで見よ
 うおれが呼んで見よ
 うおれが呼んで見よ
 公が梅を覚えておれ
 こんかおれが呼んで

あつたが、今もハ驚ろく、柳橋を渡り、意氣なまゝ、古着の
買つて来た、と思ひ、縁起の備前の着物をきき、おれ、田舎
者、若くは、いれや、と、持て、甚だ不快に感、此、席上、自
分の、誤つて、此、妓の、裾の、まじり、酒を、こぼし、此、の、振、り、い、如、
物、と、氣、の、毒、の、念、が、起、り、若、干、の、金、を、即、座、と、路、つ、此、こ、
を、思、ひ、出、す。

○此の器、か、一、頃、若、原、三、最、也、の、冬、は、小、松、大、夫、と、呼、ぶ、人
が、あ、つ、た、其、人、の、相、向、の、名、問、も、あ、つ、た、官、途、三、就、七、相、向、の、地、位、を、
一、此、と、違、く、い、ひ、其、の、任、意、を、詢、ひ、て、見、る、の、り、此、が、自
分の、愛、し、む、女、と、思、ふ、事、年、増、が、あ、つ、た、此、の、妓、が、小、松、大
夫、の、名、花、中、の、一、人、と、あ、つ、た、事、が、あ、つ、た、自、合、の、遊、小、松
と、ま、人、の、遊、は、舞、は、れ、晩、年、風、海、は、長、を、構、へ、お

藤原製

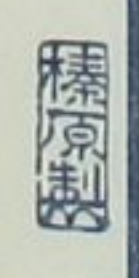
此の時、其の家の前を通り、此の、と、あ、つ、た、此、人、の、所、花、に、像
の、書、画、の、類、が、時、々、見、え、ら、れ、自、合、の、手、に、落、ち、た、よ、も、三
四、つ、た、が、起、出、の、あ、つ、た、事、を、い、ふ、事、も、是、が、此、の、
時、に、あ、つ、た、小、松、の、よ、う、な、行、ふ、と、自、合、七、信、用、し、た、位、に
あ、つ、た、今、此、の、時、の、よ、も、忘、れ、た、が、此、時、に、あ、つ、た、事、を、
お、井、の、石、の、和、歌、と、も、共、に、其、結、び、あ、つ、た、小、松、の、相、向、
が、あ、つ、た、事、を、い、ふ、事、も、小、松、を、後、に、い、ふ、事、も、い、ふ、事、も、
石、の、や、う、に、早、く、い、ふ、事、も、其、の、情、願、の、如、き、事、も、い、ふ、事、も、
文化」と、名、を、記、す、所、を、要、略、す、と

小松、清、治、り、化、お、小、松、の、人、の、政、治、の、後、業、と、あ、つ、た、出、て
早、く、洋、子、と、志、し、岩、倉、大、使、と、泡、つ、て、西、洋、各、國、を
巡、り、均、額、後、異、帝、の、出、世、と、し、七、神、奈、何、地、判、と、す

これこそあり、世賢意取故に人の花折に傲遊し一々
千金を擲つて遊ぶ事、昔方の名妓四五人を養ひ侍す
この豪客をや、晩年病に極み死すと演劇の事さ
関係に成りしこと、此の法也年若月の官途
全否の極りと外務省七茅出候と出せ給ふ、欧米
中の作と初めしる此人の在り如左

初為天涯無若秋、鴻毛迹後更添愁、一稿
勢多帰郷夢、短月如空柳眉秋。

〇此の故人を想懐し、中江篤成(兆氏)の事を想ひ出す、兆氏は佛
蘭西に向き出休の人であるが、文章が上手である、自
分の長い時、此人の文章と好み、後人を漢文系の勁板
の文は尤も得る、いろいろの譯書が一時文部省から出版さ



兆が時良譯でも、自今の此者時代に三伴人任倫河本と云は
いふが出たことかある。自今のお説の途や、車上は親後しこと
こそ想ひ出す、晩年胃腸の病を罹り、病中病後、一年有
半、と云ふ迄も、情を命を出す、病は後まんと本の由に
候する。自今が故人と合ふれたら、大隈侯の書ある程であった。
酒の肴物も、〇酒の羽織は全く、由來侯の吹せは候に在ら
しとあり、是が兆氏にあり候。兆氏の酒豪を以つて、是れ
里が、大隈侯の書も、殺れ、吹聴し、極み、近頃、酒を痛
しむる、と云ふも、志が、一休村の病に候、譯し、一程、
節酒法を案出、免節酒法、献酬をやると、酒を飲
み過すから、自今、大まか、吞エツ、ツッ、ツ、ツ、
之ん、〇腰が、是れ、誰かが酒を飲、自今、飲

ハコに在りトコツカを指しと辭返し、金と雲の候の時かある
とグロート一氣を飲み乾すふ、自分の口を今、北支の酒法地と
云ふてゐる。こゝに想ひ出さる。

モーター 礼服に巻ゲートル姿

館中田の十八 空の親爺北支を慰問

戦線でもローマ字禮讚



士博館中田

（乗込んで来たわけである）

【北平にて七日石橋本社特派員發】軍用列車の片隅でも夜營のアン
ペラの上でも暇さへあればタイプライターを膝の上に出出してカタ／＼とローマ
字の通信文を打つてゐる老紳士の姿が北支戰線の話題を囁してゐる、面白き特有の
あこひげ、元氣な語聲はいはずと知れた航空界の元老田中節壽博士だ、老博士は
今年八十二歳、わが軍が北支に南支に物凄い活躍を續けてゐるとき、矢も楯
もたまたまなくなつて、陸軍院軍務課の副課長の大役を引受け、危険な北支の戰線

（東京）

士博

東京を
出立し
たのが
九月の
六日、
天津に
到着するや否や案内役の陸軍省新
聞記者田中佐にせがんで飛行機に
搭乗、血闘し中部戰線の最新態を
一氣に飛んで保定に乗り込み同地
より更に

天津

空の旗を掲げた上
五日北平に到着し今度は張家口か
ら蒙古戰線方面の戦況に乗り込ま
うといふ驚くべき元氣さだ、敵の
高射砲なら屁とも思はぬ空の勇士
達も米壽に近い「空の親爺」の戦況
には一同ダマツとなつたのも無理
はない、軍用列車に博士を助れ
るとモーターのズボンの上から
巻ゲートルといふ物凄い装束だが
疲勞の色は少しも見えぬ、口では
相變らず元氣だ
帝國飛行協會副會長たる肩書に
對しても北支の空は一通飛行機
で飛びたいと考へてゐるが上陸
早々それが實現して天津、保定
間を輪送機とはいへ飛行機で飛
び過つたのは愉快だった、ナニ
南京虫には閉口したうつて？

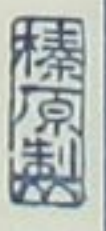
戦線ぢやないよ、わが輩はまた
南京 虫に食はれるやう
なそんな驚愕な旅行はせぬ、定
河で愛たところの驛のプラット
ホーム、物好きな南京虫もコン
クリートの上へは出て来ぬから
ね、今更いふまでもないが今後
は空軍時代だ、空軍の弱い支那
が如何に強めであるかは今度の
北支の戦況で見てもわかる、時
に戦間といふ英語を知つてゐる
かね、どうだ知るまい、一字の
英語ではわが日本語の戦間とい
ふ言葉に當て嵌るやつはない
と思ふね、それにつけても北支
に日本語を普及するのが必要
だ、これもローマ字でなければ
いかん、ローマ字は國語なん
だからね
博士の論議はついにローマ字普
及の我田が水までに飛んでなかに響かない

と云ふ所は、殊に困人の文を、今年も不満足
の所もあるが、或回か補正して、今年の
難物、こんじあつた。往年坂の山寺、
東帝の平田家、開道の碑文を撰

○新井御川治水碑の揮毫
をやつと二三日前半日努力カ
ラツた。四十八字、十六行
の大碑、字数六百数十字
用紙の大きハ一丈餘を撰
経、困り多三截して漸やく
揮毫を了り、楷
ハ自分の尤も不得意

い揮毫も及ばず没しんか自分揮毫を囑かん、二三百字
計りあつたかといふことがあつたが、今度のらうも客
ひあつた。吾師の校する自分の筆、成る金五二三外
もあつたが、昔以上の二碑、尤も大なるものあり、十
月十一日記

○小島鳥丸の山岳趣味の人として久しく耳きしてゐるが、終
つて今度も校するを得ず、漸やく趣味の人か、墨道に没する
北折、初めは面合つた、混雜の際、二岳を統するこ
と出来きつたが、此頃此人の山岳趣味、偃松の句い
ふ、似てゐるの、後んじつに、自分のいふ人のこと
も言及してゐるの、もの、趣味を完つた、日本山岳志
と若い、此吾師の校する、既に其漸や若し矣



○未だ人の喜ぶ山と云ふが、余の隨筆の二愛、後者にして
三つの、額をいふと、頼んじつに、其際自分の志、高き
る、七字の、せし、此、鹿山、虎と云ふ、ことを、つ
山、鹿の、額を、錫の、書、高の、校、子、か、咄、談、ある、所、か、ら、
鶏、大、回、か、回、一、床、の、一、幅、を、高、せ、し、其、人、ひ、き
ん、か、描、空、か、出、来、ま、い、此、描、空、か、け、七、二、十、六、頁、も、あ、り、七
あ、り、鳥、丸、の、又、喜、ぶ、山、の、此、は、其、中、の、白、眉、の、者、表、と、い、は
れ、松、の、描、空、し、い、流、石、に、偃、松、を、額、し、み、漢、の、古、の、か、ら、け
ん、か、描、空、か、出、来、ま、い、此、描、空、か、け、七、二、十、六、頁、も、あ、り、七
あ、り、

○未だ人の喜ぶ山と云ふが、余の隨筆の二愛、後者にして
三つの、額をいふと、頼んじつに、其際自分の志、高き
る、七字の、せし、此、鹿山、虎と云ふ、ことを、つ
山、鹿の、額を、錫の、書、高の、校、子、か、咄、談、ある、所、か、ら、
鶏、大、回、か、回、一、床、の、一、幅、を、高、せ、し、其、人、ひ、き

古くは海産に未だからいりて、流しは、薩摩の人
 屋姓の辰公曰く、物いつれ、心、先代にまゝな
 此とかい、此姓と物つれと云ふの事あり、此家
 作る秘法あり、昔は時代子と知む、此の
 びりけん、堅牢を得る、此と云ふ、此の
 倚り、膠を研究し、年を往く、乾燥
 フレクシブル、エラスティック、所、其の特
 見本と、此膠、此の印、膠を、
 此の工合、自分の、此の、
 用ひ、其の、此の、
 此の、此の、
 此の、此の、

藤田



しか、此後より文法の出より句代も、神代の「量」といふのを
 兼も居り其の原本に「十」貯らんれ、か、書意の暢
 ちやぶ教り、單字句も、其意のよむ、類似のよ
 か、何れも、其の香氣、其の優劣、其の、此人の、吾れ
 の人、其の、一途、研究、没頭、し、ま、い、五、十、を、纏、く、る、人、と、又、交
 け、此、名、を、私、と、する。

十月十一日記

のよ、十月十日、野澤、如、洋、の、為、り、追、濱、合、を、催、し、同、人、の、地
 の、高、松、の、作品、を、齎、し、し、追、濱、の、表、を、表、し、也。斯、人、の
 石、の、落、意、致、び、頭、の、古、文、人、の、風、が、あ、り、た、い、つ、ち、あ、る、合、洗、ふ、こ
 と、く、い、而、も、画、料、を、求、め、り、佳、か、く、米、鏡、を、あ、り、ま、す、也、食
 書、生、の、注、を、急、を、許、す、も、あ、り、心、を、案、案、を、排、つ、て
 其、れ、酒、を、好、ん、と、し、酒、を、所、を、所、上、に、心、を、位、の

酒の注

自ら、酒、を、好、ん、と、し、酒、を、所、を、所、上、に、心、を、位、の、
 や、く、陣、地、を、築、き、得、た、が、無、謀、の、も、勝、果、あ、り、と、し、
 戦、も、挑、ん、だ、と、も、し、今、の、時、白、も、あ、り、彼、等、の、戦、場、の、宿、植、
 あ、つ、て、か、こ、と、也、我、れ、桃、歌、の、為、り、止、む、を、得、り、相、手、も、あ、り、也、
 此、の、頃、白、も、酒、の、注、の、ち、を、い、ら、す、り、英、米、等、が、
 日、本、を、逐、つ、た、の、時、は、沙、汰、の、限、り、と、あ、る、彼、等、の、抗、日、を、
 徒、ら、と、唱、い、る、者、を、教、へ、り、一、方、日、本、を、戦、場、と、す、る、

軍事は量も測断なく行つてぬれことが金と穀山可なり
と云ふれ併し折角の任を二三見ん廢壇と云ふ事の如く
を考へて戦勝の人を在りて核城と云ふ事のことか
つれ

○昨夜(土)の如洋進博合りことと再記す。安座上余
七促さんと一坊の遠作演説を多しきと彼人の風格と席
上を演説し、就て凡と石の如く演説せり。

如洋畫伯の死は眞に惜しまるゝ。

如洋畫伯は、八宗兼學の綜合的大天才であつた。彼れは單に南畫家でなく又北畫家でもなく、四條、土佐、文人畫等古來傳統の筆意を凡て兼ね備へ、更に洋畫の味さへ加へて、一種獨特の一派を形成したのである。

如洋畫伯は、獅子獨往伴侶を求めざるが如く、將た天馬空を行くが如く、師に頼らず、黨に加はらず、獨力を以て畫壇を横行闊歩したのである。其の壯年期に於て、日清戰爭より日露戰爭に至る迄の十年間、京都の獨立畫家として畫壇に覇を稱へたのであるが、日露戰終期、支那に遊んで、大陸の雄大なる風光に接し、又、彼地の優秀なる古名畫を観るに及んで豁然大悟し、現世の俗名を競ふ事の陋なるを思ひ、畫人は到底知己を後世に求むるの他なきを覺悟し、夫れ以來、一切畫會の出品を斷念し、専心畫道に精進して、刻苦精勵遂に其の蘊奥を究めたのである。

如洋畫伯にして、明治四十年の我が文展第一回の審査員推薦に應諾し、世俗と歩調を一にする事を勤めたならば、帝室技藝員筆頭として畫壇の王座を占むる事も容易であつたらう。

珠玉の如く極め、筆を元々疾風の如く百畫、忍ち成る。
尤も馬を畫すも、長丈、席画に長きまを至つて、思ふく
室前を、しん、予北人の森茂を喜心、時、欲と其より、九、愉
快と考へ、此、情、あ、し、白、玉、橋、中、の、人、と、ま、り、北、人、勇、を、表、す
に、千、馬、合、を、開、き、其、の、得、に、所、の、潤、筆、も、想、て、西、洋、の
を、遊、歴、す、北、段、す、け、ば、主、都、帝、大、回、方、筋、を、あ、げ、し、予、が
友、人、島、天、二、郎、と、回、行、せ、あ、つ、た、と、云、ふ。如、洋、が、粗、末、家、に、
交、際、の、儀、礼、は、日、に、着、る、も、島、が、往、々、注、意、を、加、へ、
を、五、月、輝、し、一、行、を、離、れ、自、由、に、政、浪、し、北、と、云、ふ、彼、人
の、先、事、の、涙、死、の、時、僅、こ、ま、三、十、金、の、米、資、あ、る、の、み、
況、に、貧、者、生、の、来、つ、と、急、を、告、ぐ、る、あ、り、彼、人、の、憐、れ、に、有、り
み、け、の、金、を、共、に、病、者、あ、之、人、と、見、て、急、に、病、草、ま、す、

遊に没す、此、事、の、後、人、の、追、憶、す、る、こ、と、は、夜、涙、に、及、ぶ
と、云、ふ、彼、人、の、飄、逸、の、時、行、甚、は、多、し、今、一、々、録、せ、し、ま、す、
十月十一日記

口、今、次、の、支、母、事、変、の、難、問、に、就、て、感、ず、る、こ、と、は、快、と、あ、る、が、皇
軍、が、百、戦、百、勝、び、一、心、も、敗、れ、取、ら、な、い、と、云、ふ、の、は、皇、軍、が、殆、ど
い、か、ら、と、ま、く、い、は、さ、し、た、い、の、こ、と、に、あ、る、が、皇、會、が、あ、る、時、と、十、三、
卷、の、い、ま、ん、上、の、大、軍、も、且、推、し、ま、さ、し、ま、す、
と、い、は、し、た、い、は、し、た、い、の、例、に、あ、る、が、高、は、皇、軍、の、常、に、攻、勢、を、取、り、攻、勢
の、守、勢、を、取、つ、て、あ、る、と、い、う、特、徴、に、此、全、体、攻、勢、を、取、つ、た、
敵、軍、の、三、倍、の、兵、を、二、倍、と、い、ふ、が、通、則、に、あ、る、の、れ、い、つ、て、
皇、軍、の、常、に、兵、七、攻、勢、を、取、つ、て、敵、軍、の、三、倍、の、兵、を、二、倍、と、い、ふ、
實、の、支、分、の、地、に、い、は、し、た、い、守、る、者、の、出、来、し、め、は、決、者、に、堅

固く出来たるものありて感せしむる程にありしが或は守るを
主として陣地の楹作が却つて彼等の攻勢を鈍くす所以
か七廻り廻り守るを主としてせんが爲りて堅固の要寨を七
箇所に築き置る。若し支那の陣地が如きことを望んで
せんば、彼れがくたぬいともききしむる。是は將士の勇
気と守るの堅固と頼んが守るを主とするから、却つて不
意に思ひ入る攻勢の時、是は逆襲を教へしむること
ありしかば、思ひ切つたとき、此れをやるべきことあり。支那
の陣地と云ふものは、此の戦争を始めて知れれば、其の念
の入りたるが、懸崖に於て地居るもの、是が家もまた、

標原製

しとあり、煙を厭ふこと作らるるは、トウキケの如
き設備があり、攻め合はせしむるが、タリクが、是れは陣
地を擁護し、是れは、其の堅固を、行言する、この日
子、金を賣り、此れを、容れ、是れを、決し
一割、夕、成り、得る、是れを、是れを、是れを、是れを、

自公以上の如き古を卓上せし陳べん。序々弘前出身の如洋
の二人が在り左の如き一話と云ふなり。

弘前に三上仙年と云ふ画家あり。如洋もちと斗期々
此の畫家を評す。此の畫家上野の某展の
に佛の畫を觀た。其の畫に深き見とみも倅之長心
向ふ。漸く其の漸ゆくことと云ふの七場を出て人とす。と
既に所傳の時間と云ふ。四方の三條が所傳と云ふ。此の
ちりし。其の所傳を以て神武天皇神像の彫刻の
の御中。此の二夜と云ふ。望月御人、語つて上野
の心とて、難波のまゝの如きと云ふ。此と云ふが、此の
まゝ如洋の風格に似たり。所傳あり。此のおもしろく
此の評語を聴いた。

口秋山陽の故に狂詩を心にこころふに...
予、左の天保元年の京都の地震の狂詩の書物ありて、
これ書物なりと云ふ、

別録

是日にも京都地震、委教院子、定めし湯のふいひありて、
予八う鳴動お止あり、就夫得一佳句、紙上代
神一笑又

瓦之熱餅、危岩、誰掀大塊不平、尚過播
海、遂に浪、爪、撼帆、橋、完比、都

狂詩紀實

揺詰、無生心地、銘々思付、況、胆、事、今春、御陰
始、謝、命、冬、宮、神、礼、揮、頭、寝

漢京製

又

洛中家並、善詩連、腰、強、左、官、共、手、傳、地、震
揺、罷、職、人、擡、一人前、取、二人前

八月日

意

細香史

○十月十一日、散策中、松政屋、テ、パートの圖書、賣、五、今
日、秘、史、集、(三、巻)、を、得、か、え、狂、歌、の、里、川、真、道、
の、傳、を、考、す、所、有、ん、も、予、の、未、知、ら、ず、所、有、ん、も、予、の、未、知、ら、ず、
何、れ、を、考、す、大、正、五、年、一、回、文、研、究、会、の、為、行、す、所、有、ん、も、
或、ハ、予、の、聞、得、し、一、回、刊、行、分、り、幾、分、其、の、出、版、を、考、
す、海、内、の、聞、得、し、軍、記、ハ、凡、を、收、め、り、余、ハ、海、内、の、聞、

生んばい酒位の手跡を過る夫後北条を統率して
は洲の兵とせんといひ、婚約を切ら、北条中興の
辰武繼あり、春日山の記あり、近位中記あり、川中崎
五戦にあり、然るもいざいざに記あり、関も史務概の
り信ら兵法の手とる、軍団の讀むといひ、或いは
の材料といふ也

○山陽が死す、古前主治、石元瑞、可早と片身とい
稱す、平政の終りに

谷神降氣、以是門才子、是亦自母愛計壽の
一端也、故人嗚念、神深領可、終下侯

とあり、自ら故人と云、決死、歴代、此の可早、い、テ、
の事、い、木崎、志、の、住、極、い、山陽、い、い、い、い、
テ

ーブルを摸して愛用したとある。これに就て思ひ出すの
當つて、茶山、四文、隨筆、を、後、人、の、記、き、
移子、テ、ー、ブル、を、供、さ、ん、甚、に、閉、口、し、と、自、白、の、記、す、
が、あ、る、い、山、陽、の、い、し、と、異、つ、て、ハ、イ、カ、ウ、テ、テ、ー、ブル、を、
愛、用、し、た、と、思、ひ、を、殺、す、た、

山陽のテーブルは、當時京都を、珍しく、あり、た、が、有、極、
志、息、也、が、長、物、の、嫁、さ、う、時、嫁、具、と、い、ふ、所、
中、が、あ、る、と、山、陽、の、遺、物、と、い、ふ、所、也、
日、志、速、新、油、し、た、と、い、ふ、ま、は、五、年、正、月、廿、日、
内、有、十、郎、各、
衛、一、長、也、常、盤、井、津、原、移、川、二、条、
死、の、由、州、に、見、
て、あ、る、日、年、正、月、廿、日、音、の、人、に、死、て、い、た、
所、金、を、
愛、用、し、た、と、い、ふ、事、も、
亦、新、油、し、た、と、い、ふ、事、も、
此、の、内、也、
靜、倚、と、い、ふ

人が春曉支人が山陽門人があつて降坂さん北有柳川名の
息のひきま。

○山陽の茶山の康成を極けしり此癖も晩年の志きり茶
山の概略を伺ひ、卜居のお伝をみやつて居る。三本木の卜居
は伝歌の支こへるおおもしろい。茶山の皮肉を
し、まゝを替へんと、折角物事しものつゝを、戒し
や、まゝのあつたが、空の気休め云ふれ、違ひい
父の春あゝ透符身の序を茶山に執筆を頼んで、自
分の名をさかかくてゐると云ふれ、の無理さういことだ
が、あつたまゝの文政五年五月丁酉の茶山史のむや、左
の如くあつた。

前略)と序候人名、春成教の如く、被係の如く、

標記

二叔并小生さし所在、署下四五、左、一、が、
生不殺能能先生下、天下後世、七、若、ん、こ、
小生、其、有、茶、山、御、許、容、
有、

茶山の序に春成と生、今予予成とある、茶山が
此の語を入る後、かへれ、まゝある。

○山陽の名意、然、有、茶、山、御、許、容、
奪、能、の、手、紙、の、上、か、る、元、も、物、浪、の、ま、ま、あ、る、此、情、を、
此、の、若、山、陽、の、婦、を、
か、成、り、ま、金、の、入、手、ま、マ、コ、キ、山、陽、が、ヤ、ウ、キ、
み、ま、い、れ、手、紙、七、存、し、あ、る、全、体、此、情、入、屋、の、ま、ま、の、
未、所、記、り、ま、あ、る、中、間、は、春、葉、が、入、在、し、山、陽、が、西、金、を、

持つて其幅を取り去るとそのと春思が底(きつたは末の春
 琴の柄を又照つた中と委しく書きたたの如くある
 那の生(山陽)被冬三十五有持春を、座上を
 劫奪可ぬと改僕、既三六に筆ひも、休回亦花が
 中洲(仲敷)を入ると、漸やくおぼえて(成、既三
 二) 雨後(貴家)と控交するのおぼ敷長今(末を有)
 中無理を、あての遊長、扱に無後方、せんか
 其後(秋)持物(山陽)の金子、小石、初うにおぼ
 此の返眼をうると幅は、獨まると幅は、眼幅の一とあるこ
 とか、即ち山陽七巻、てねねめをつけ柄を、入物する、ことある
 此と、後日山陽、休回、秋人の映字、れく、い、ことか
 山陽、お、向、ま、て、あ、る。

横京製

○木崎の書、新選山陽、お、向、集、才、五、篇、の、目、録、の、扱、の
 あり、長、高、の、書、の、余、の、所、為、に、あ、つ、た、又、改、い、年、一、正、月、ハ
 日、向、中、リ、の、玉、崎、の、書、後、山、根、月、の、井、原、の、書、先、て
 ち、く、清、在、し、と、底、を、う、り、た、花、を、臨、心、山、東、の、金、中、リ、
 詠、い、れ、五、六、の、詩、が、扱、め、と、あ、り、持、味、に、つ、ぶ、り、と、山、陽
 出、向、の、代、表、的、の、と、あ、り、四、十、六、才、の、書、に、お、中、し、と、あ、る、こ
 び、ま、る、の、部、應、と、あ、り、と、自、白、し、て、あ、る、自、分、の、手、入、つ
 此、時、の、新、う、り、と、あ、り、た、花、を、お、ま、り、と、一、巻、と、し、た、か
 今、の、手、元、と、し、と、あ、り、た、花、を、お、ま、り、と、一、巻、と、し、た、か
 ○山、陽、の、桂、村、の、牛、肉、を、扱、め、と、あ、り、其、肉、の、書、を、と、あ、り、
 今、の、手、元、と、し、と、あ、り、た、花、を、お、ま、り、と、一、巻、と、し、た、か
 扱、の、心、地、と、し、と、あ、り、た、花、を、お、ま、り、と、一、巻、と、し、た、か

秋窓隨筆

日々は好日

市島 春城

禪僧は好んで「日日是好日」の語を揮毫する。多分碧巖録にある語であらうが、服膺に値する座右の銘と思ふ。人間は我儘もので、愉快の事でもなければ、その日を好日としない、病氣の日、借金取りの来た日、宿酔で頭痛のする日など、みな悪日として忌む。甚だしきは、曆を繰つて厄日とすると、それを好日でないとして排斥する。考へて見ると、實に勿體ないことで、人生僅に七十年、光陰は矢の如くで、遠慮なく過ぎ去るのに、光陰を惜しむことをせず、或日に謂はれ無いケチをつけて、空しくその日を過すなどは、冥利に背くものといはねばならぬ。別して老境にゐるものは、前途幾許もない、どんな日でも、不愉快に暮し

てはならぬ。どんな日でも、好日として樂しまねばならぬ。たとへ、不愉快のことがあり凶事があつたにしても、吉日に引直さねばならぬ。その心掛次第で、どんな日でも好日である。

× × ×

これが即ち禪の教へであつて、例へば多少の勞役に服して何事が成れば、そこに愉快の心が生ずる。勞役に服する日を悪日と心得るなどは間違つてゐる。讀書をして、多少の興を覺えれば、それだけでも好日である。何か責任を果しても、其日は好日である。酒を飲んで愉快を覺えても、親族故舊と往來して情味を覺えても、其日は好日である。禪のこの語は、人をして日々を好化せしめん

とするのであることを思ふと、確に貴い教訓である。

× × ×

自分は、或日再びこの語を案じ、樂天的の語であることを知つた。トルストイなどに、一日一善の著があるのも、毎日を好日化せんとするの業であらう。毎日善を爲すことは、事實出來ないが、日々善の語を録することは、強ちむづかしく無い。吾等もトルストイに倣はんか。或る人問うて曰く、親族や友人の不幸に會した日は好日であるまい、日支の戦鬪が日本に不利な日は好日ではあるまいと。親族友人の不幸は悲しむべきだが、自分が不幸でないことを喜ばば好日である。戦鬪が不利であつても、それが吾軍の志氣を鼓舞し、大捷を博する導機と思へば、好日であると自分は答へる。原來樂天家の胸次には屈托がなく、世間の人が憂悶することまでも、頓着せず釋然たるものがあるから、どんな日でも、好日たるを失はない。乃ち世路の風霜も、練心の境を思へばその日は好日である。世情の冷變も、忍性を養

ふものとするれば修練の日は好日である。世事の顛倒も、之を修行に資すれば好日である。病の日は清閑の日として好日とすべく、孤獨の日は深慮の日とすればこれ好日である。

× × ×

私は毎日を好日としたいと力めてゐるので一笑話がある。つい先日、郷里に校友會があるので臨んだが、百人余の出席で、未曾有の盛況であつたので、極度の喜びを演べたが、その翌日、少數の校友の宴に招かれた。この席は勝手氣儘の出來る寛いだ席で前夜よりも遙かに愉快であつたので、また滿幅の喜びを演べたがわれながらよくお世辭をいふものといふ心ひそかに笑つたが、實は毎日を好日にするの努力にほかならないのである。しかし日々を好日とするには、必ずしも多くの努力を要しない。實は好日は多く悪日は少いのである。中井擘庵は、この間のことを「とはずかたり」に左の如くいふてゐる。うれしいことは忘れやすい、心が解け緩ぶからであらう。悲しい事は忘れ難い、心結ばれて凝り固ま

此の語がてまのやいへぬまじりあはれとめいさす
○山陽のてまのやいへぬまじりあはれとめいさす
陰文でよく

佛のやいへぬ黄金と代りあはれし花中取也頼り
劍を公のいへぬへし穴のり
山陽のてまのやいへぬまじりあはれとめいさす
春のてまのやいへぬまじりあはれとめいさす
美酒を引よめいさす
○山陽のてまのやいへぬまじりあはれとめいさす
外史載のてまのやいへぬまじりあはれとめいさす
まじりあはれとめいさす

るからであらう。人はよく愛き世
の中だ、つらい世の中だと嘲つけ
れども、實は嬉しいことは多くし
て、悲しいことは少いのである。
雨降りつづくこと度々であれば、
人は誇張して年の半ばは日光を見
手などいふけれど、雨しげき年と

いへども、九十日に過ぎることは
ない。(原文を時文に改む)
苟くも冷靜に考へれば世の中は悲
しき悪日は少く、嬉しい好日が多い。
これを逆に考へ、一概に不平をいふ
のは畢竟わがまし身勝手より起るも
のである。(25)

○山陽が五十二歳天保二年二月十日門田朴直くちのや
北方前中の塩谷内務(岩陰、甲斐のすけ)と就
て左の如く書つてあるのが一寸注を添へて

ある塩谷内務と申す遠物書生のみより聖堂
よりゆききん久、私塾にあり大茂、大いゝ家
内の恩に於て、家、私道守に東去、謗仙元久
侯よりいふ、すききん久と申すは、私道守に東去、謗仙元久

標原製

四の寺、家内の大茂、勢時より、當守の書生、ゆききん
久のみ、(私塾)も、私塾(支峯三軒)杯福
庭之、静待望のて、私塾と圓元より、指圖中
極し、と不埒と評し、是れ、是れ、已むる恩而
ききん久と申すは、私塾と申すは、

塩谷内山陽の塾にあり此ことも初めし、私塾、背負、後岩陰
ハ、後岩陰、(私塾)静待望のて、私塾と圓元より、指圖中
二十とあり、私塾のて、私塾と圓元より、指圖中

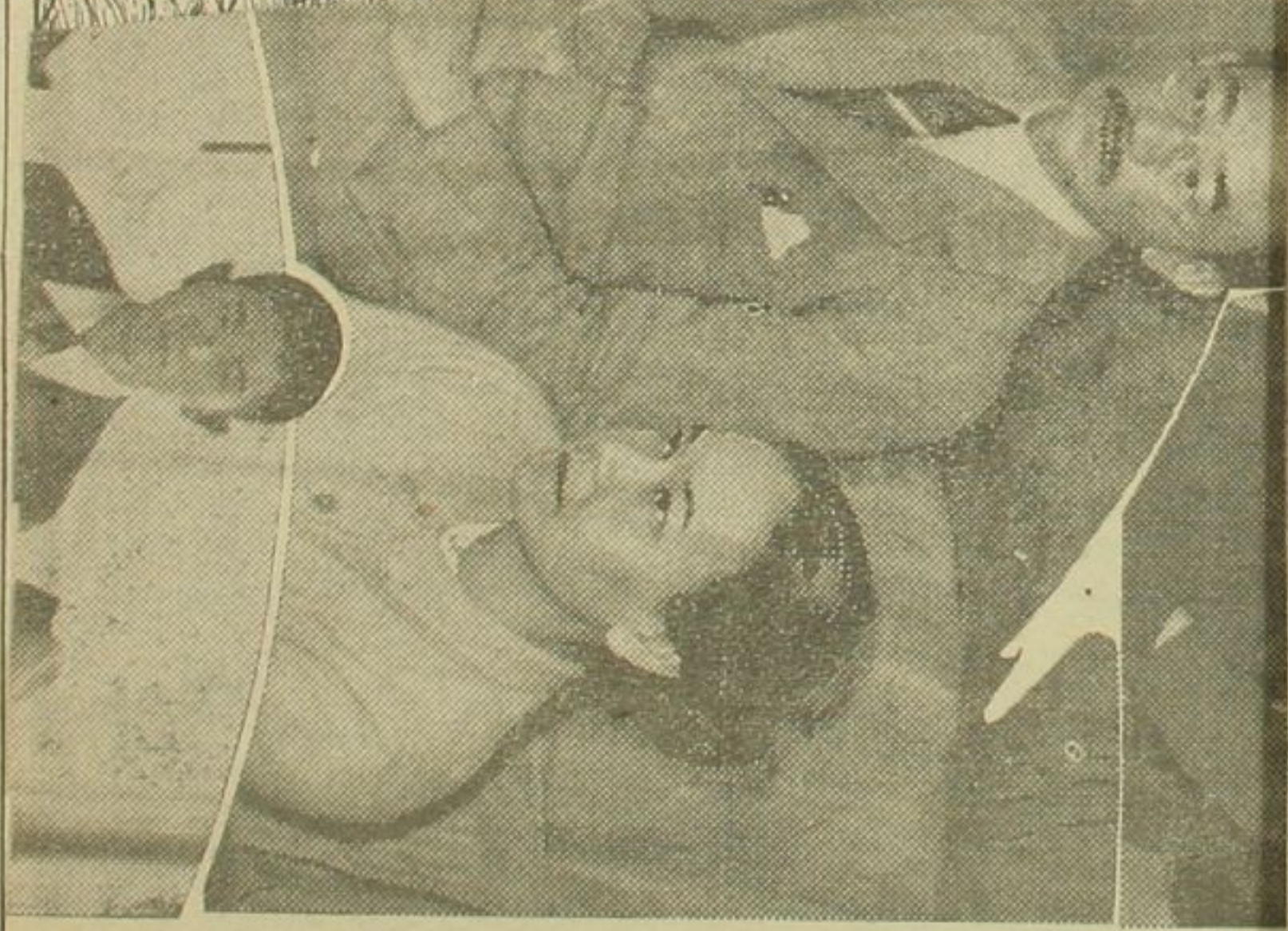
○山陽の生時より山陽の塾に入るとき、誅が、あつた、此條を
寺の碑をきく、(寺)門田朴直くちのや、進つた、此條を
江戸の深利に、山陽の塾に、私塾と圓元より、指圖中
誌を看し申し、(年)私塾と申すは、私塾と圓元より、指圖中

行ハらき杯と云ふ事、此と云ふて自分、やう文、
目力を用い、其力を詩に割き、敢て詩で名を奪ひ、
時の白詩家と鑑を連ねて馳走と思ひぬと云ふをみる
高時いろく、何かあつたと見へる、免角車人の山陽の偉
さを知らず、うらなひも無い、関西のあつた、えん丈、
あつたから、詩を割き、礼を山陽に我を折つて、
佛の城き京都の人、詩をささげ、實の詩佛に服して
ぬれ、障むかひ。

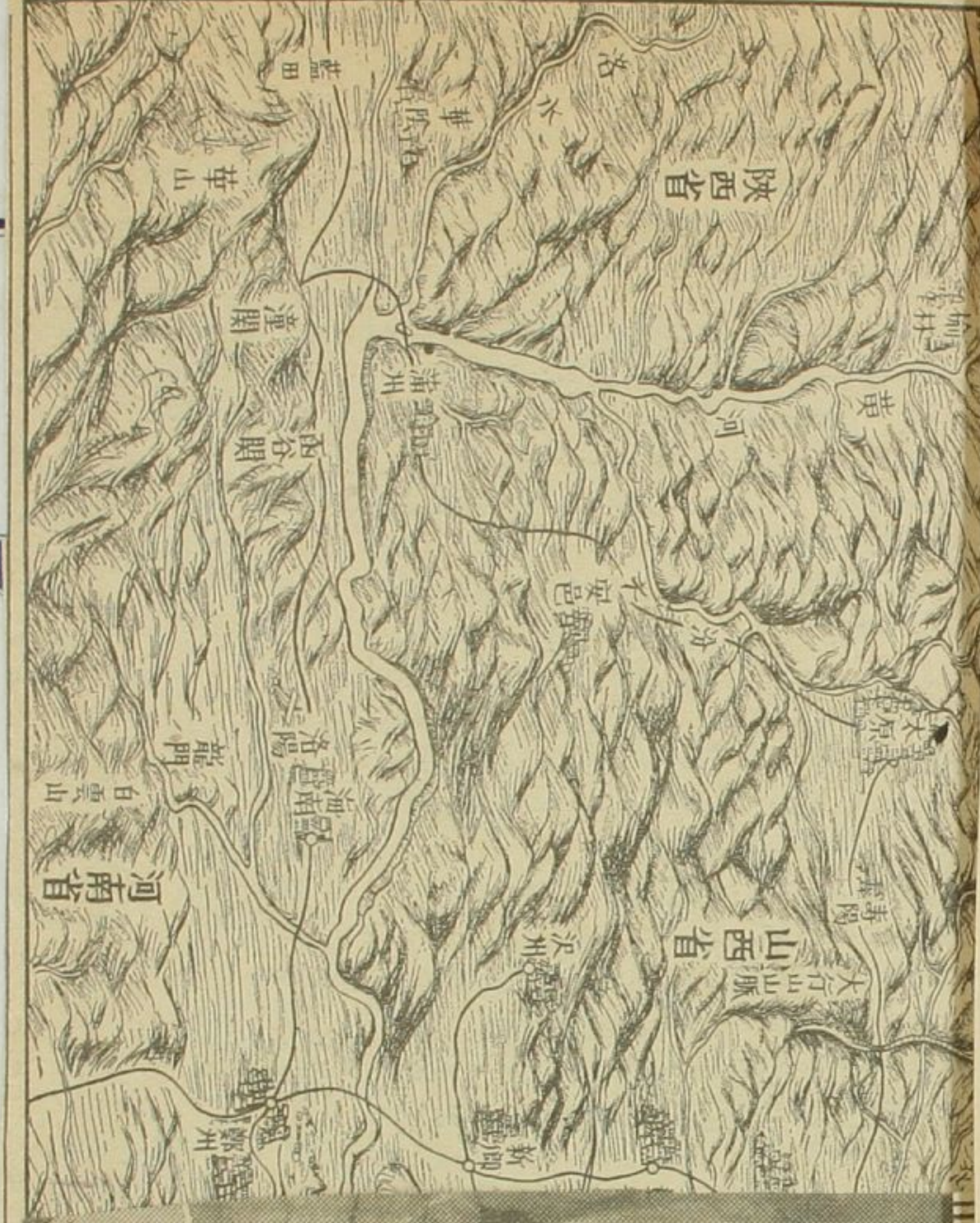
○山陽の晩年、江戸の道心として終る果て、うらなひ、
何故かあつた、阿の其年、報へたからと解してぬれ、
うらなひ、江戸の出入り、一の書、唐が、
関にみる、山陽の江戸、よん、是れ、
標

山陽の晩年、江戸の道心として終る果て、うらなひ、
標三年三月（北前古算計り前）江戸の一日、
云、左の如く、言ふてぬ。

東遊の手巻、被申候、自北方止出ると申せし、上
るんば、
是等七失
此片、
許有、
何も、
○本、
て、
一、



一等兵は九月午後、頭部任務に
 長から常用委任状を授け、
 長から常用委任状を授け、
 長から常用委任状を授け、
 長から常用委任状を授け、



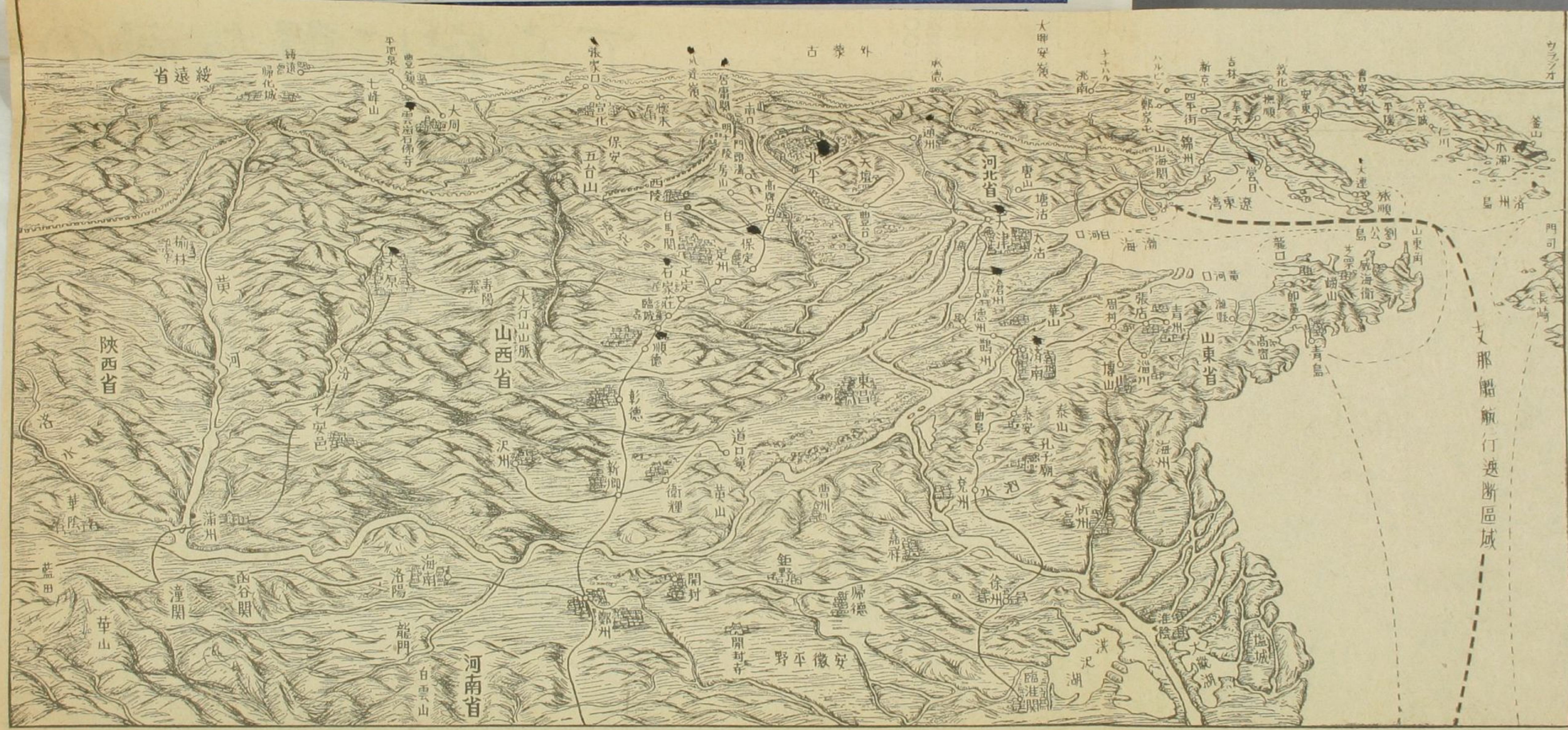
敵猛 して宿に翼を神の

（二二〇）
 派員發
 北の無敵を
 日隊は空通手も足

諸君

あつてもおぼろげ
 昔の相乗陰謀を細く見ると書案も漸く終る事あり
 が、日と敵報とを讀み、緊要は速く、一刻も心身、地
 緩らざる、疑いとつゝ、亦おぼろげの之を讀むる事、
 臥して山陽の予、簡集を讀み、大概の山陽書所、
 ハ〇、閑讀を纏、居る、往々初め、讀むものあり、書簡
 二、四つ、山陽の神、言行、初め、知る事、又、
 或人と百通を讀む、して、よも、又、ノートも
 作る、こと、以上の如し、（十月十三日）

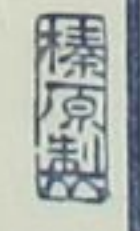
八〇 關漢七種 姑子 往 日 初 時 漢 心 十 日 於 書 河
二 日 之 山 路 自 海 行 二 初 時 智 市 交 十 時
或 十 百 里 之 遠 一 二 日 之 時 又 八 十 七
作 二 三 日 之 時 一 (十 月 十 三 日)



○珠珀燭とて印譜二種を得、一ハ仙傳印譜あり三
雲仙傳の刻す所、書名仙傳名人快心と云ふ
天保十五年三月僅ハ二十四部を上梓すとある
此印譜余の初め見し所多。

刻者の傳とある所ハ三雲仙傳ハ京都花本天
皇御製其茶流の秘事を以つて帝の名を世
に馳す。

此印譜四冊種豆松青の稱あり所々を首卷、茶
具十二を庄印に擬し二卷ハ十二支を公和印
に擬し才三卷ハ人身の要部を題し又起
現紙刀をぬめ四卷ハ起現紙刀の残念を叙す
巻末ハ佗山の石と題し起現紙刀の印影をぬめ



他の印譜ハ主生石の印譜あり昭和三年の春行
に傳ふ此人の傳り出ると仙傳のハ人々一時海内極
ぶと云ふ云々を公に傳へて公の命を奉りて百餘の
印を作し公曰く山陽と石と余ハ日本の正病人也
と仙傳ハ此人の投て見を後世恐るべしと云く一が
果して出た蓋し春あり、此印譜の一半ハ門人印并ハ
文淵社家の印とぬめ。

○石の印譜の宗ハ昭徳寺の法一持法を得た
石華生道を行くと云ふ、道の直中を通り歩致り
定まりて、豫則が往ハ更々徑をすを帯りし
曲り角ハ是とて直角に曲かり、時々直角を誤り
家邊のかんけいも家に入らず、引返らん直角に曲り

平井日七家武と云々、んが家に入らざりて云々或
時去入の魚屋入り、来り家猫宿、魚を奪人、と云々
屋敷皇石を拾ひ、猫を撃つ、猫を撃つ、猫を撃つ、猫を撃つ、
笑つて致して魚高を答ぬ、唯、云々、扱、云々、石を煮所
へ獲ると、魚高百方を石を扱、漸やく得て、命の如
く、と、水石の道を行く、身、武、云々、庭上
の石を、拾ひ、基、岩の布、石と一般、比、留、る、家、刻、の
法、と、来、る、表、刻、家、に、往、り、山、新、ま、る、ま、る、是、ん、又
一例とす

〇又、柳屋を頼ま、二十枚板の絹紙、王権、刻、は
同一の法を、二、三、と、く、く、と、殿、の、自、分、の、い、つ、も、語、を、選
ぶ、に、り、の、頭、を、炊、い、す、と、い、ふ、御、厨、中、に、印、語、や、雜



む、と、執、り、指、心、心、今、も、も、四、五、の、法、を、ゆ、れ、記、憶、と
候、ま、る、と、い、ふ、と、云、々、と、い、ふ、

書、方、の、振、家、考

相、共、の、考、を、及、存

席、政、起、程、考、人、の、存、在、考

人、非、有、品、不、能、食

一、笑、人、間、今、古

撫、已、愧、前、賢

心、事、一、杯、中

松、星、夜、涼

一、為、花、雨

茂、杉、清、水

雲、煙、供、養

半忙半閑人

快日明窓

一枕臥羞風

日々是好日

不知有何思酒作人

無事小社仙

坐喫山空

夕陽山外村舍

思入玄

記脈細故非方賢

鴻志

河仙

撫石

坐井仰天

村情山趣

掃塵

濟美

習靜

清耳

自在居

樹德

○師里の友人より某好校の故よりと語る上海に望

宇の敵の計りあるて善通の爆発のハ、到底破像
 一とみの心算中、いかにして特別の大爆烈爆を用
 ひることとした。此の爆烈を積む事、大爆撃機十人
 位七機東の出来る大機が、大の使用するにともない珍重
 秘蔵のこもるべきに、いかにして之れを使ふべきに
 なるかと、爆発の強弱の強弱の強弱の強弱、一個の價
 八萬圓と懸て一機を爆したゆゑ、さき漫りて使ふ可
 らざるもの、其の爆力の大ききこと、想像が出来ぬ。尚
 且此五人の隊の所、極く長城の戦入軍軍の公衆
 無いらぬ此等、乾燥をいかに、四十の島、七運搬
 の機名、途中敵中、二思つて存者の、度全殺のさ
 糧食の敵の、途中、仰ぐ、長城戦、ハ、故人の如き

其難事ありれば公事なからざるが段んが如き失敗の
ありはと云ふも可成り也
十月十五日

かゞと現るる也

- 1 彼輩^①人々を殺しをりて^②要せざる^③庸医と支那人^④の
- 2 多ク^⑤先精^⑥亦大運動と彼^⑦尤も適切と感^⑧し^⑨る^⑩浪節
- 3 鷹山^⑪殿公の物^⑫餘^⑬日^⑭興^⑮産^⑯策^⑰が^⑱ある^⑲也
- 4 前^⑳向^㉑上海^㉒戦^㉓陣^㉔致^㉕と^㉖傷^㉗く^㉘る^㉙馬^㉚山^㉛某^㉜方面^㉝の^㉞将^㉟軍^㊱
- 5 として^㊲現^㊳ん^㊴收^㊵進^㊶の時^㊷銀^㊸行^㊹の^㊺貯^㊻蓄^㊼中^㊽を^㊾奪^㊿つ[㋀]て[㋁]ある[㋂]枝[㋃]ん[㋄]の[㋅]盜[㋆]將[㋇]也
- 6 支那の[㋈]勝[㋉]地[㋊]の[㋋]平[㋌]和[㋍]の[㋎]後[㋏]我[㋐]戰[㋑]地[㋒]として[㋓]有[㋔]名[㋕]の[㋖]地[㋗]と[㋘]す[㋙]
- 7 吾[㋚]邦[㋛]人[㋜]を[㋝]して[㋞]俄[㋟]回[㋠]る[㋡]故[㋢]り[㋣]と[㋤]す[㋥]る[㋦]也

標記

- 1 好^①者^②と^③後^④及^⑤好^⑥法^⑦を^⑧後^⑨き^⑩ぬ^⑪る^⑫を^⑬行^⑭ひ^⑮ぬ^⑯人^⑰に^⑱振^⑲す^⑳
- 2 此^㉑の^㉒是^㉓れ^㉔日^㉕の^㉖好^㉗者^㉘と^㉙す^㉚る^㉛所^㉜以^㉝
- 3 州^㉞に^㉟ビ^㊱ス^㊲と^㊳す^㊴る^㊵法^㊶社^㊷合^㊸の^㊹預^㊺す^㊻に^㊼用^㊽ひ^㊾ん^㊿往[㋀]る[㋁]高[㋂]安[㋃]の[㋄]利[㋅]同[㋆]
- 4 此[㋇]の[㋈]法[㋉]と[㋊]す[㋋]る[㋌]に[㋍]ハ[㋎]ビ[㋏]ス[㋐]の[㋑]法[㋒]と[㋓]す[㋔]る[㋕]也[㋖]胃[㋗]法[㋘]す[㋙]る[㋚]也[㋛]出[㋜]征[㋝]
- 5 此[㋞]の[㋟]報[㋠]す[㋡]る[㋢]也[㋣]を[㋤]用[㋥]ひ[㋦]ぬ[㋧]也[㋨]
- 6 此[㋩]の[㋪]報[㋫]す[㋬]る[㋭]也[㋮]の[㋯]勝[㋰]と[㋱]洗[㋲]く[㋳]報[㋴]す[㋵]無[㋶]き[㋷]敗[㋸]と[㋹]す[㋺]る[㋻]也[㋼]
- 7 此[㋽]の[㋾]報[㋿]す^㊀る^㊁也^㊂を^㊃想^㊄ひ^㊅ぬ^㊆可^㊇し^㊈
- 8 街^㊉頭[㊊]に[㊋]立[㊌]つ[㊍]て[㊎]千[㊏]人[㊐]針[㊑]と[㊒]洗[㊓]ふ[㊔]る[㊕]平[㊖]法[㊗]婦[㊘]人[㊙]と[㊚]す[㊛]る[㊜]一[㊝]人[㊞]の[㊟]身[㊠]
- 9 此[㊡]の[㊢]報[㊣]す[㊤]る[㊥]也[㊦]の[㊧]報[㊨]す[㊩]る[㊪]也[㊫]の[㊬]愛[㊭]兒[㊮]証[㊯]金[㊰]に^㊱上^㊲ら^㊳
- 10 人^㊴と^㊵す^㊶る^㊷也^㊸を^㊹最^㊺も^㊻速^㊼に^㊽催^㊾す^㊿也[㋀]
- 11 軍[㋁]回[㋂]時[㋃]の[㋄]日[㋅]去[㋆]考[㋇]楚[㋈]印[㋉]して[㋊]古[㋋]法[㋌]字[㋍]書[㋎]勝[㋏]の[㋐]長[㋑]法[㋒]人[㋓]を[㋔]
- 12 催[㋕]す[㋖]也[㋗]故[㋘]安[㋙]田[㋚]推[㋛]國[㋜]の[㋝]志[㋞]を[㋟]休[㋠]して[㋡]す[㋢]る[㋣]也[㋤]古[㋥]法[㋦]研[㋧]究[㋨]の[㋩]大[㋪]

冊子を此際と登刊し乍ら一回の表に出づ。想ふは活字の兵の
かし但し文化の兵也。平心の兵也。此際此辰既望時宜
こ通ていふと云ふを得んや

若僧蟹を起すも漢に云く。看江校行有美時。老人の英
語を賛する語と云ふんや

支那戦場の上、若將士の骨を埋めし名を埋めず。支那若
他日我將士の若を以て呼ぶ。いふも多かきん

米大統領の言を二三も。若將士火中の栗を拾ふ。英
人。性も爆発の危険あり

我四の元と信義を支那の教のりや。又高つて道徳を
英國の教のりや。而して今や彼等。信義道徳
の貴國。訓誨のりや。最平本國の持合を云ふ

横濱製

14 内閣の十本議を置。衆智を集める。一々。奉回一致と策
す。但し。取頭多くして。再も山上す。と。思ふ。可
也。

15 支那の古語に。鈎と盜む者。罪や。ん。國を盜む。と。清。民。の
封せらる。支那の往々國を盜ん。他國の賂ふ。而して。回人
平。と。支那。と。以て。罪。せず。日。清。戦。争。の。終。局。三。回。と
國土を盜し。如き。將。が。回。を。赤。化。と。委。し。而。安。難。を
免。ん。事。と。か。し。皆。貴。國。の。事。と。云。ふ。

16 支那の抗日を以て大義名分と為す。支那の或や彼等の大義名分
の東洋の平和を破る。と。云。ふ。事。も。又。校。捨。回。の。漁
人の利を。會。其。ある。よ。ある。こと。も。校。等。の。行。為。天。向。つ。て
喧。す。と。般。風。亡。也。其。頭。上。に。落。ち。来。ん。



路末のソリータス



藤原製

17
 其が 将士の平和を得る為身を犠牲にして惜まざれば
 惜しむ平和を見らるゝるゝ陣歿すことと古より
 太平元是將軍殺、不行將軍見太平と云ん
 英雄と武士の面目自らも本物見らるゝか、悲しい
 かな。

川瀬一馬氏古活字版之研究出版記念
諸家鑑藏 古活字本展観會

會期 昭和十二年十月廿一日、廿二日御招待日
廿三日より廿五日まで
會場 東京・日本橋 高島屋美術部サロン

主催 安田文庫 川瀬一馬氏

助 贊
石井光雄先生
市島謙吉先生
大島雅太郎先生
徳富猪一郎先生
松井簡治先生
三村清三郎先生

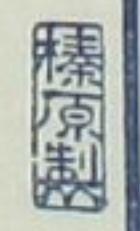
本展覽會は、安田文庫の川瀬一馬氏が、故安田善次郎氏護持のもとに、數年來、鋭意研究印行中の「古活字版之研究」出版完成の記念として催さるゝものであります。

○ある種園の一両氏が二言及し迫つたり、亦めてあるがれを
三羽集りて古活字本と川瀬一馬とを研究せしめし
偏集したる物が出来たりとを併せて江湖ニ示し、あるの
重と魁めんとしとあるは、立河、すなわち、美術界は
こゝ陳列を行ふは、あのいふある家の名は、此等といふ
是れなりや、然るに、柄あるの各々聞て、いふこゝと、自ら氣
つき改めし、あつた、左に記す、規向が、是等
あり、責任を携へやり方をし、
ある古活字版ハ、八分、あるの者、
あるも、其作、加つてある、あるの、
あるの、
あるの、
あるの、

集まれば体念がまけたるまゝが出来る。同じ年に出た本は
種々の異字のりがある。先づ何れか一本、跋の有無を
以て辨別を考へて、ついで一頁を有し且つ方丈の上は味を
ふことせむ。

大体古活字本とまゝ、文祿の役と朝鮮の役と活字と將來し
まゝと、教諭の出朱、各寺院か思ひく、活字版佛をも
出度し、一時の旺盛を極め、此女の隆盛のさまを一室の
かたき、由つて見ることか出朱のり、真に仕合せぬ、あつた
冊物、物とまゝとよ。陳列回りの内、その心きせり、その
ころころ、そのころ、そのころ、唯、富目の二三を奉
けり。

伏見版 六箱 二冊 寛文四年刊 阿波文庫蔵



こゝが最古活字の四箱本に傳はる。當時の模倣は
至極、其の刊行を及ぶ、此書は終り、活字版の
跋がある。

直江版 文選 寛文十二年刊 三十一冊

此の古の初版は直江自身、四箱本のまゝ、米澤為
吉の印記がある。ついで、

五山版 五味禪

五味禪の中の十牛圖の扮入のり、そのころ、
末期の少くとも、別版の十牛圖がある。此
身分、そのころ、そのころ、

地方版 般若心經秘鏡 一帖
永正四年 柳後 蒲原 七巻、そのころ、於て、

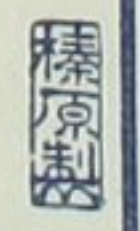
此書原の何寺のよふ不詳かある

尼子敏の法蓮(孝任)の巻

この本は二十二年、尼子任久が二十部招つたところ
見ると各巻に古方形の任久の印が刺さって
ある。●見ると惟一と云ふところ、常に余の所為
であるが、今の保政潤次が所為と云うところ

伏見宮家 鳳象抄 二冊 平田園と伝

廣長法皇の伏見宮家の朝のありさること
つてもおれが境内の又たの名家の御行、意を打
出されま既を用ひ、巻尾に宮家御殿とお録し
た由の加茂清茂の手書があるのを、初めに見れば
ある、よりの多く教諭と誤認せんとも



春秋経傳集解 長古十七年以前刊 十五冊

本書は葉の付いたもの●松花堂の昭乗の印がある吉
田望殿の書入かたつとも福山藩迄監田宅か書入とし
てローマ字のサインがある。

拾芥抄 三冊 長古中刊 三巻

長古殿の異版があるが、此の書中の、ぬめり日本回
圖の校圖として最も古きといふところ

此日喫茶客の四人書と云ふも、能清中り余の左の如く所感
を語つた

支那書畫の展覧会も疎つて法字本の展覧会分の
ありのぬめりコントラストがあるが、余の法字も軍隊
にある。越後の大寺の大將のよきよき、その次の字の禪

豊公の相輝は位々威武を外面に輝かせたところも、どんなに
回差を構へたか、實に甚だおもしろい。活字も將來に
これか思ふ。日本の文化を進めようとする者、其れは
相違なく、活字の組合せをいかに好むか、出まるといふことか、
いかに活字の思ひを、初めの面白く、今之を試み、勅版
まじり出た。きも活字も、其れを種々の本を出版し
た。んが、何れも、勅版の効用を促すこととも、つれづれ、活
版の専ら、んが、勅版の不用を、活版の一點、んが、
進め進め、んが、んが、活版の、活版の、んが、
其の版の体裁が、んが、んが、んが、んが、んが、
唯、版を、んが、んが、んが、んが、んが、
の流行に刺激を、んが、んが、んが、んが、んが、

藤原製

果つても、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
の進長の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
ハ、活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
●の、活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
勅版が、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
の、活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
作、活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
古活字も、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
活字も、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
つ、活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
く、活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、
活字の、其れを、んが、んが、んが、んが、んが、

活版の押し比例が重く、その一例は寛永行幸給巻にあり、又
寛永に出版せられた書物活字の揮給、数個の木版を
組合せて給を組立て、(善も)流版と唱へてゐる。或
ハ活字と懸版と混合してゐる。或ハ楷行草の文字
を交へるものもあつて、人をも乱版と云ふ。此が、皆を切
辨ち、活字のおもむきも存するものもある。懸版は、
他の書を彫刻するから乱雑を免かぬが、随分一時活版
本を底本として版下としてソツクリ彫刻したこともある。因に
書物の活字本と懸版本とを比較して見ると一息に
おとしい。

(十月廿二日記)

藤原製

の探検おもしろい。小菟もやうなれが、まん龍溪
石に就てとまらぬ。日年、此の龍溪石を日本在来の
もの研に比し、も優劣を評してゐる。左に大畠を物
出する。

今日龍溪石と呼ぶものは、もつ以前或ハ高遠石、鉛谷
石と呼んば、又横川石、竹ノ澤石、元龍石、伊那
石と稱するものといふ。

この龍溪石は、辰野の所から奥へ里餘りところ、
穴倉山を中心として一里四方の河に敷在埋没
したるもの、中野、大横川、小横川の流域に
川崎、伊那市の三ヶ村を流るる。今日ま
探掘せん所は、穴倉山の南北を流す。

此の碓村の志見の故と云うのことは、其の沿革の就
て此の志見の故と云う所の據りと

長門縣所屬の町村誌中「三里村誌」の項に

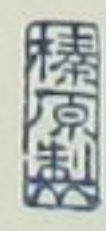
明治十年五月十日

碓石 六十畝

硯 二千丁

志見二十八年前

とあると云ふ、この三里村と云ふのは現在の川崎打と
底野町とを合せて三里村と稱ふことがあつたが、三
里村の取りも直ぐに川崎村のこととあると云ふのは
ふ。而して二十八年前と云ふのは、天保三年（紀元二五
一〇年）とあること



町村誌中「伊那富村誌」の項に

明治元戊辰年穴倉山と碓石出づ

一ヶ年出高百五十畝

とある、今日同村古志に就いて訊ねると、明治十三年
頃より三十四年頃迄碓石工として門戸を構へた
者

伊那富村今村 十九戸

宮所 十三戸

小横川 三戸

唐木沢 四戸

川崎打上崎 十三戸

河戸 九戸

小野村 雨澤 四戸

といふよふなつたとき

龍溪石と他石との比較に就ての如く、その如きものあり

石色は穴倉山の太平畑が一着黒く、その砥汁はま

かび墨汁のやうな、また他の諸坑の砥汁も黒く、

あつたが太平畑のまんやうに淡色をいふ

この龍溪石の代表的なものを(墨)といふ他の砥石と

比較すると、その優劣、質性、下墨、發墨、やの

法、粒の粗いところ、色をいふ、寒さ、私のおも

国の飲物の龍尾石に比して、軟かき、近年

より輸入するの羅紋石に比して下墨、發墨、優

れをいふ、又本邦産出の砥石と比較をいふ

標原製

法、龍溪石、柔美寺石より軟かき

高嶺の虎斑石より硬く、粒子は細密である

玄昌石、若田石の如き枯燥の感なく、且板層が

肉眼で見えらるることいふ

小久慈、雨畑とも積に軟かき、肌理は更な細緻

で且潤いである

昔の標溪石、朝野の滑原石に比し、質性、

凡のよきところ、優れである

以上のやうに私に見てゐる故に、龍溪石は粘板岩

の法、砥石の中、稀なものの優れ、品質を其物

と見るべきものと候いである

(十月廿二日録)

〇書物後撰社から通判一二を送つても此中一は河内道造の女
 婿飯塚友成あり。道兼腰佩状があつたので、早送り
 送した。飯塚は今腰佩に任してあつたか、此の書名がある。和歌
 ついで。道造は朝七二三命を讀んゆ中二、飯塚が娘を
 生んゆ時の事に出てある。道造は命名を頼んゆら、道造
 八州の事と命は飯塚に置いと。男女どちらが先か書ある
 名はと、みづからやまきと改め、道造は朝後をいれ所
 直是七日云は、飯塚は柳とを語つたはと古句を
 とをさかして鬼貫の句に、「この塚に柳をくくもあつたを
 リ」と書するをえて、美を典故うへんと古人のとあるが、(古)
 道の古き昔つくた句に、柳一本植えとくこの塚なるうへ
 しく、とあると、

種原製

高は松井原屋子に朝七ゆる塚園かあると、語へた一は、句に
 松井は自較りに飯塚と語り合つて、任んじあれた。そこが柳
 塚の首く、いり、道造の考とて、つくたの、飯塚のあつた、その
 以ほゆの家、後年、飯塚の妻があつた、とて、みるに、此は朝
 早く造言状の送達を多々、美を氣味をうへ、手うへれたの、
 飯塚の末葉の妻、あつた、とて、

〇車馬、おめとちの、飯塚の、三條男に、加茂女と云
 ふ、この、河津屋とて、あつた、とて、

柗も成経寺あり、女子の出、この、カキの、河津、
 背か出ると、

古志郎の地名ある、又桂おと、この、浦瀬女とて、あつた、
 男の子と、杉の木、育んた、の、新屋、この、飯塚を、おと、

かきと皮肉をちよとあつてあつて人もあつて

東海の内、アズキトキと云ふ土俗がある。夏と云ふと海
の岸の男ののんぼがあるのを呼ぶ。北の海、海岸の砂利
渡りのい、ガリと云ふ言から来たよふであつて

北國の山、修をマタヤシと云ふのを根、癒ふ解さるが、定ハ
股、深、か、マタ、待つて、股がある、と云ふのである、股の
杖と云ふ意。

西、秋、低、さ、の、婿、礼、の、古、例、に、形、支、解、祝、賀、の、村、人、と、迎、入、る、時、に
笑、い、份、を、増、す、こ、と、が、例、であつたと云ふ。

の、我、回、頭、の、代、に、支、解、の、形、を、取、り、増、す、り、開、港、の、長、崎、の、
ふ、い、あ、つ、て、荷、く、し、高、安、と、云、ふ、言、は、れ、る、是、れ、北、地、に、来
る、例、が、も、多、く、あ、る、故、に、利、の、あ、る、高、人、の、い、ふ、支、解

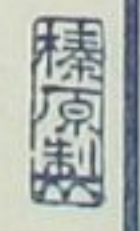
横京製

趣味の文人墨客も多し。支那流の行と云ふ
か、あ、る、支、解、の、支、店、も、さ、あ、る、親、の、あ、る、こ、と、云、來、つ、て、定
二、角、支、解、の、流、入、り、氣、持、び、愉、快、と、い、ふ、山、陽、の、井、田、の、
関、り、化、漢、文、者、も、多、く、あ、る、お、人、は、勿、論、外、回、興、味、の、よ、
少、く、あ、る、が、井、田、が、あ、る、と、い、ふ、お、人、は、勿、論、外、回、興、味、の、よ、
分、が、あ、る、と、い、ふ、所、は、北、地、の、山、陽、の、井、田、の、
又、由、り、と、い、ふ、こ、と、が、あ、る、山、陽、の、残、り、に、お、人、の、
の、北、行、を、見、る、お、人、時、代、に、大、き、く、あ、る、時、代、に、お、人、の、
目、を、ま、か、せ、お、人、の、目、を、ま、か、せ、お、人、の、
の、代、に、既、に、お、人、の、目、を、ま、か、せ、お、人、の、
信、木、節、の、故、跡、を、討、つ、て、お、人、の、目、を、ま、か、せ、お、人、の、
行、の、遺、蹟、を、探、つ、て、お、人、の、目、を、ま、か、せ、お、人、の、

山陽

他郷の友ニ深切な酒橋によつて、愉快な食餌を口にする。自公
の友人も、酒が大好きである。

保く市河三喜から又先代米庵系に寛政が書ゆかたに
際のことと考証し、不著を定めて見れば、是を後記の
面より感し、此に米庵の書ゆかたを、其父の寛政の
先記がたつた。米庵の長ゆかたは、行動の至らぬもの
未とある文人等、又つた位、其に一反の漫筆こそき
るらんが、寛政の一年有餘の長所を、殊々あめり
奉行物や成徳の幕府、米庵の書ゆかたの検使
そのとめれば、かゝるらん、内容がある、市河家より、其に
ゆかし家と、その書簡が三十通、十あるて、是を報して
る、又、史料を、此の、米庵の書ゆかた、全く、寛



高の北方面の行跡、此が、初めに、知り得るの、ことである。

寛政が、中仙道を行く、九月七日、七月二十五
日、江戸に、中仙道を行く、九月七日、七月二十五
十一年九月二十三日、書ゆかた、約一ヶ年、五、五、五、
行の、物、寛政の、人、寛政の、娘、行儀、おろ、物、
二、寛政の、河、寛政の、書、骨、後、
あ、寛政の、寛政の、後、内、長、
此、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、
勤、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、
寛、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、
し、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、
人、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、寛政の、

主務のたよりうらたきと云ふ品物檢使の役得の口振り出し物を
手入ぬりこととあるに、おちまはるが、身行かおちまの檢使と
故味もあらうに、寛政の餘りすも、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

家、之、を、と、り、手、紙、に、便、り、口、外、に、う、ら、め、と、江、島、に、て、み、ま、る。
其、以、三、本、堂、法、帖、が、知、名、船、載、と、ん、文、墨、を、人、に、こ、ん、を、と、獲、入、
と、養、き、と、身、を、定、算、に、し、る。若、唐、七、十、五、き、り、と、聖、人、に、か、あ、り、時、三、十、金、に、
三、の、倍、に、寛、政、の、廿、二、日、を、得、る、の、を、大、令、因、り、往、向、の、便、に、江、
島、に、と、ま、り、こ、の、三、入、れ、紙、に、か、定、算、に、地、帖、に、勾、勤、本、に、
本、物、の、利、産、得、を、う、ら、め、を、い、ふ、こ、と、を、寛、政、自、身、七、十、五、き、り、と、
あ、る、此、帖、を、お、う、と、し、紙、に、き、書、紙、類、の、多、く、寛、政、の、廿、二、日、
由、り、こ、の、三、本、堂、法、帖、の、便、を、遊、り、て、寛、政、の、廿、二、日、と、も、

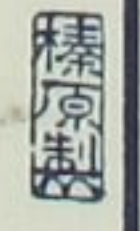
寛政

寛政の集められたると思ふ品物を、行きの御務に、手入ぬりすることハ
又も、手紙に、え、く、お、う、か、他、に、又、房、の、類、も、七、行、の、跡、の、の、よ、
び、も、ゆ、定、り、上、敷、家、の、出、産、も、買、取、り、た、もの、も、あ、つ、た、り、し、が、
定、り、お、う、口、外、の、出、行、の、七、日、の、汗、を、而、向、わ、つ、た、が、つ、ら、か、つ、た、と、
自、白、し、地、程、趣、味、感、に、閉、口、し、て、見、え、る、此、帖、を、或、る、程、が、
ま、も、満、す、ん、と、行、七、相、南、地、解、し、こ、う、つ、た、と、想、像、さ、ん、じ、う、
ある。

種々の品から、江文の品の、あ、一、寸、記、解、し、難、い、よ、う、象、汗、に、
ある。只、江、島、の、初、め、を、酒、見、し、た。未、の、本、像、と、汗、を、拭、み、と、見、く、
こ、う、か、何、ん、の、用、に、供、さ、す、よ、う、か、天、州、海、行、の、時、の、即、ち、寛、政、の、
尚、寺、等、類、が、此、の、度、に、送、り、と、ある。或、は、此、の、時、度、を、送、り、す、る、よ、
う、と、此、の、品、を、懸、印、し、て、み、ま、る、現、在、南、山、の、本、堂、か、つ、の、江、

きんをとも相事の...
めと長ぬの家福寺...
七又市...
十月廿四日

日秋霖連日...
抄録二日を曼し...
誦八千を収...
採之...
つて限...
ぬある...
こんと...
得べし...
予青春時代抄録...
十月廿四日



瘡...
大正十三年...
抄録の時之れ...
し...
...
...
...

○自...
る...
日...
知人...
を始...
し...
久...

森屋良実書家

伊豆守中口上

安田 一日上 安田善次守始子

荒木十歎 画家

高村真夫 洋画家

横山大観 日本画

山村耕花

安田靫彦

野村山洋 漢

下村敏山 漢

小島鳥水 文芸者

服部耕五 篆刻家

柿瀬 恂

香取秀真 鑄金書家

今田市原

高村光雲 佛師

田中智學 宗教学

高嶋米峰 口

常盤大定 口

山本常清 西洋音楽

秋原英一 口上

井口基成 口上



伊原敏郎 文芸者

西村文則

前田曜山 小説家

法橋轍二 漢学者

後藤桐大甲

去澤初桓也

川瀬一馬

竹内尉

白鳥省吾

高島昌三

和田英雄 漢

河色武次郎

山岡義大 漢学者

山川建 山川健治

星野 錫 実業家

山中権化 雜学通

和田純 弁士

伴 純 弁士

神部敬三 書家

小田安子 小説家

宮武外骨 漢学者

大賀一郎 漢学者

難波利平 漢学者

星野清敏 詩人

田之北坡 詩人

上村賣劍 詩人

久しく政海を離れて政海に交りあふる皆曰文に属し、以上人名中
政治界の人を無し、

○淵に乘りて古人の句を採りて八千句を得随つて得ん心懸つて
解一通り日一冊成る名の中心算程と云ふ、可
採授して得る詩句二三今心のこゝろを

- 一 選堂笑貯加餐客客吾君羞為七米人
- 一 曉来何物敲門至而共詩人共為七
- 一 今朝有酒今朝醉明日愁來明日愁
- 一 劉伶先埋阮生天日見人間酒人少
- 一 人不難於違衆而難於違己
- 一 莫笑山人背梁硬荷風攜月送殘生

一 芭蕉葉上無愁雨只是時人聽新陽

一 當初六道茅長短燒了方知地不平

此等の思想皆吾人の有る所にして之れと云ふは現世の
難し 平凡の思想と云ふ由り美化するに實ある所以

○軍陣中の言談を流す通に兵士の報する所の如くは「よく」とも「
よく」が大敵の結束の致す味方も誰かの遺骨やら介のれよと
うらやまややくびあるも誰かが歎歎れかに生れつるものよ
皆を執死と見るものよいかも、是れ骨と云ふも誰れとも
いふに、いろくも骨をたたり合ひて誰れのもよみきこ
とが実味あると相違なき。地雷はと罹つて或る人の心
やんれ悔なきと見今けのつく笑も、一隊の高級の武

友と云ふも大伴將監を以て云ふ。泥をすぬくはなう。血の流る
ておろすもさと。都が後り遺骸の補綴のつらさのこまかたも
あつた。

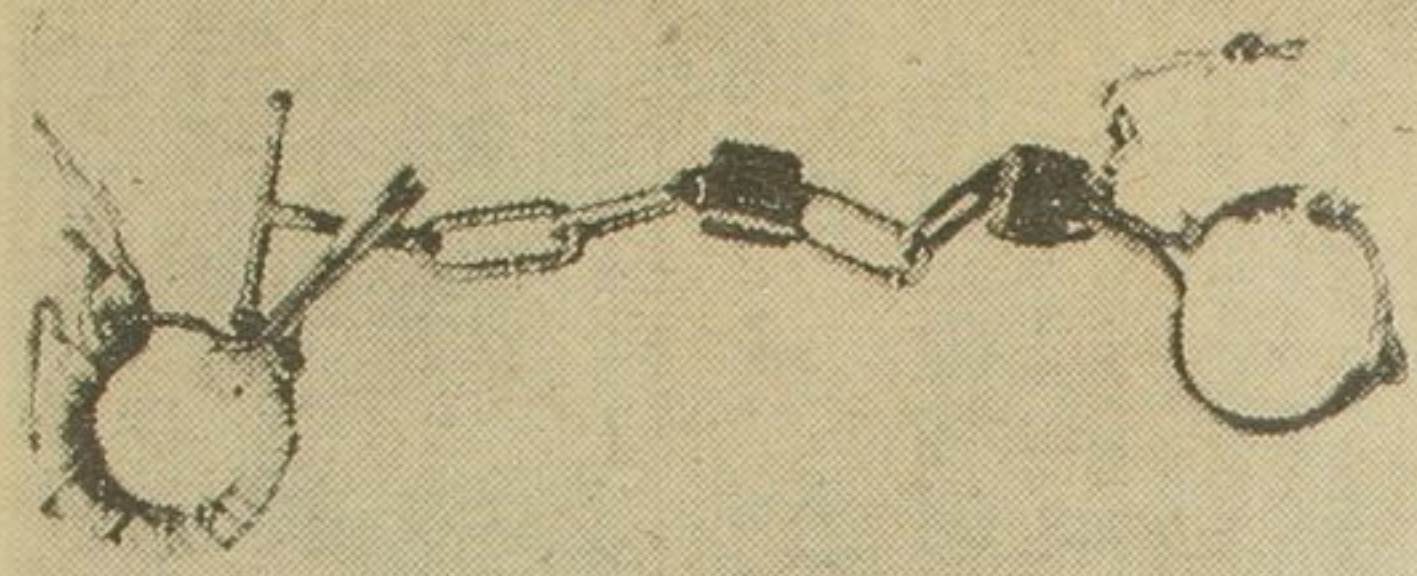
毎く産産の献品のゆゑ千人針の銀紙だと云ふよあつた
の。後の世も人のことかぢぬらひあつた。千人針の銀紙
よけの送行なら。千人のせよか粘とこめて一針の縫ふ本ぢ
り。銀紙の裏行機を造る原料と云ふ。ジニク、パ、ゴ、ル、デ
ニ、ト、其、他、の、物、本、の、防、湿、用、の、紙、也、也。此、外、に、産、付、の
浮、山、も、送、ら、ん、る、の、ゆゑ、人、情、の、已、み、難、い、を、以、て、昔、も、今、も、夏、に、な
い。野、向、袋、と、云、ふ、の、今、日、冬、デ、バ、ー、ト、も、な、ら、ん、と、云、ふ、ん、と、み、る、
此、の、代、り、申、上、の、公、用、の、鏡、法、や、薬、子、や、手、帳、雜、紙、萬、年、
筆、紙、中、産、手、紙、を、入、れ、て、な、ら、ぬ、烟、草、が、な、ら、ん、と、云、ふ、

る紙や紙の物や、折る紙も、後、また、さういふ、入、ら、ん、こ、と、を、
つ、と、ら、ん、が、更、に、便、を、除、く、為、め、ブ、リ、キ、製、の、よ、お、物、の、出、来、も、
の、と、を、い、て、バ、ー、ト、も、見、た。薬、子、も、も、も、リ、キ、が、入、り、し、り、
て、後、また、さうい、ち、も、道、高、の、よ、お、水、砂、糖、が、あ、る。這、と、雲、を、
ま、向、の、び、直、の、序、を、入、れ、た、今、も、リ、キ、が、バ、ー、ト、も、
一、個、七、八、山、も、な、ら、ぬ。多、敷、の、も、も、あ、つ、た、よ、と、云、ふ、
兵、と、思、つ、た、も、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
四、ヶ、所、も、あ、る。其、中、に、紙、が、入、り、あ、る、か、ら、尿、の、も、或、は
は、く、か、い、ん、ら、い、の、或、は、茶、葉、の、も、一、層、代、り、に、
ま、い、だ、ヤ、ハ、整、理、を、居、る、が、香、の、が、い、ま、い、ま、い、ま、い、
こ、と、な、ら、ぬ、ガ、エ、子、を、や、り、ま、汗、臭、の、の、の、の、
二、滴、の、香、の、の、の、の、清、涼、劑、と、云、い、ん、と、み、る。デ、バ、ー、ト、も、

この歴史的な日清戦争の... 戦況の... 戦況の... 戦況の... 戦況の...

○大場鎮も皇軍の占領... 戦況の... 戦況の... 戦況の... 戦況の...

足枷で退却防止 津浦線遼州方面に於ける支那兵の死物狂ひの抵抗も道理 九月二十一日 我長野部隊の正面たる八合莊附近敵陣地に退却せる足枷が



この写真だ、是はトナカ或は銃眼を設けた家屋に於て死守のため足に縛りつけられ一掃を頑強に結んで退却させない様にしたもので人道を無視せる悪態振りには全く呆然たる外はない (寫眞はその足枷)

○百戦以來敵の初死者... 戦況の... 戦況の... 戦況の... 戦況の... 戦況の...

✕

〇三三萬四〇〇〇
 ありはる
 うしはる
 しはる
 おわらる
 のふはる

海上・北支 敵の死傷四十二萬 我戦死僅かに九千

表發省軍陸 見概害損我彼

陸軍省では廿七日午後四時、北支戦況見解を左の通り發表した

津浦線	十月廿日迄	一一、二七〇	我軍戦死者	十月廿四日迄	四、四六七
京漢線	十月廿五日迄	約二五、〇〇〇	敵遺棄死體	十月廿四日迄	九、六四〇
山西	十月廿日迄	推定 七、〇〇〇	我軍遺棄品	十月廿四日迄	五、一七三
綏遠	十月廿日迄	約四四、二七〇	野砲四、山砲四、重機十二、輕機八三、自動車二七、迫撃砲二五、車用自動車五二	十月廿四日迄	九、六四〇
上海	十月廿三日迄	六一、七〇〇	多數ある見込なるも詳かならず	十月廿四日迄	五、一七三
合計		一〇五、九七〇			九、六四〇

【備考】支那軍死傷者を合計するときは北支方面で約十七萬五千、上海方面で約廿五萬、總計四十二萬五千と推定せらる

(イ)南京政府の排日教育徹底せる爲謀れる抗日意識頗る旺盛にしてその敵對行爲また頑強なること

(ロ)幹部は「懲辱なる日本軍に捕はるゝ時は必ず殺さる」とと盛に宣傳し之がよく一般に徹底しあること

(ハ)支那軍第一線の後方には督戦隊と稱する怪態なる部隊を配置し、絶えず第一線を監視し退却又は投降の徴候を認むる時は直に之を射殺すること(支那軍第一線と督戦隊との間に猛烈なる交戦をなしたる例枚舉に遑あらず)

(ニ)上海方面における戦局は近接戦を惹起するため降服するの暇なきこと

二、我が軍は支那軍を敵とするも支那一般民衆に危害を及ぼさざることに對しては作戦上の不便を忍びて細心の注意を拂ひあるは事實の明證する所なり、かつ上海戦線には戦陣の性質上一般民衆在らざりしこと明かにして北支方面においても退却する支那軍が彼等に加へたる危害以外敵遺棄死體中に混入計上せられぬの虞なし

三、別表は十月廿三日までの死傷の比較統計であるが廿三日以後の大場鎮突破以後の敵に與へたる損害は未だ不明であるが、陣地戦は元來突破後敵に大なる損害を與へるものであるから廿三日以後の敵の損害は更に莫大に上るであらう

十月廿日の東京新聞

して強いる者に同情するといふことは、これはあるかも知れませぬ。しかしながら支那に同情するといふこと——没義道なる支那、人を排斥し、人を侮辱し、人に抵抗することを本願とし、それを國のモットーとしてゐる國に同情するといふことは、それが人道主義的の同情でありまして、もし戦争を長引かすといふ結果を來たしましたならば、平和を愛するといふ考の下に、却つて實は平和を日一日と延ばして行くといふ結果を來すものといはなければなりません。大馬鹿者の考であります。今御挨拶をなすつた方のお言葉の如く、日本は必ず勝つ、しかも正義の戦だから勝つといふ尊い旗印のために一國の呼吸をつゞけて行きたいと思ふのであります。

事變下我が財政經濟の基本的問題

ひるがへつて各地を歩きまして、いろ／＼の御方の意見を聞いて見ますといふと、公債問題、増税問題、北支問題といふやうな具體的な問題の前に、もう一つ大きな問題が問題となつてゐるのではないかと、いふやうなことが窺はれるのであります。それは何か。日本の經濟力はどれだけあるのか。支那が「まいつた」といふまでやるといふが、蒋介石は戦は一世紀も續くであらうといつた、宜しい、一世紀繋ぎませう。第七十二議會の勅語によりまして國民の行くべき途は決つてゐます。この勅語の御精神に基いて軍は動くべく、この勅語の御精神に基いて銃後の固めはいたさなければなりません。しかし國民の經濟力はどんな程度のものであるか。ある御方の意見を聞けば、なあとたいしたことはない、大丈夫だ——とかう申します。他の御方の御説を聞けば何となく不安を感じられてゐるやうです。果して日本の經濟力はどんな程度にあるのか。樂觀してもよいか。悲觀する状態か、どの程度の力があつて、この長期抵抗を覺悟したでせうか。これがまづ第一に決めなければならぬ問題であります。そのことが決まらない中は公債の問題、増税の問題、凡てが解決されないものであります。第二に、この事變を遂行して行く方策としては後でお話申上げるやうに、いろ／＼財界に對しまして註文をしてゐます。こちら向いて頂きたい、あちら向いて頂きたい——つまり統制であります。しかるに、學界といはず、財界といはず、今まで行はれた議論は、自由主義に執着した

ところの経済論と、統制主義を強化して行くといふ経済論と二つありました。それが今度の事變に際して臨時的、一時的ではあるけれども、今まで試みられなかつた程の大きな變革をもたらす十一の法律が、第七十二議會に現はれたのであります。そこでこの戦時財政經濟對策に對しまして、自由主義派の人たちは、こんなことをして統制して行つたら、この先どうなるだらうかといふやうな不安をもつてゐられるやうであります。しかるに、他の一派の方々はこんな統制でどうするのだ、範圍も狭ければ、統制の力も弱い——といふやうな意見であります。私はつきつめていへば、事變に對する財政經濟問題は、第一には、日本の經濟力、第二には、自由主義と統制主義とを噛み合はしたところの、今回の方策の是非にあるだらうと思ふのであります。

日本の經濟力と事變費

まづ第一から申し上げます。日本の經濟力を述べますには、今回の事變をどれだけの費用でやつて行つてゐるかといふことから見て行かなければなりません。第七十一議

會において決められた事變の費用は五億七百萬圓であります。七十二議會において決められた事變の費用は二十億二千二百萬圓であります。合計二十五億二千九百萬圓といふのが今回の事變費であります。この二十五億二千九百萬圓を日清戦争の費用くらべてみればどうなるか。御承知のこととも思ひますが、日清戦争の費用は二億圓でありました。したがつて、今回の事變費二十五億二千九百萬圓は、日清戦争戦費二億圓の十二倍となほ一億二千九百萬圓残ります。すなはち、十二倍以上の費用であります。日露戦争の費用は幾らであつたか。これには二つ見方があります。すなはち、直接の戦費と、それに陸海軍兩省以外の各省で使つた費用まで入れたものとの二つであります。直接の戦費は十五億八百萬圓であります。各省の費用まで入れたものは十九億八千四百萬圓であります。よく學校の講義などにおきまして日清戦争は二億圓、日露戦争はその一桁上つた二十億圓と申しますのは、十九億八千四百萬圓を少し大まかにいつた場合のことです。今回の事變費二十五億二千九百萬圓といふのは直接の戦費でありまして、外務省その他の費用は入つてゐませぬ。したがつて、日露戦争の

費用についても直接戦費と比較するのが正しいのであります。さうすると、日露戦争の直接戦費は十五億八百萬圓でありましたから、今回の事變費二十五億圓二千九百萬圓はこれよりもなほ十億圓餘り多いといふことになります。日清戦争の十二倍餘、日露戦争の十億圓餘多い額——これが今回の事變費の大づかみな姿であります。非常に大きな額であるともみられます。しかも戦争の如何によつてはホルの試合の如く、プラスAとならないとも限りません。どうしてかやうに費用が増したか。一つには戦争といふものが大掛りになつたといふことであります。もう一つは所謂科學戰であるといふことであります。日清戦争には草鞋を履いて行きました。日露戦争には二百三高地の戦の跡など見れば、實に日清戦争と格段の違ひがあるやうに思はれるのであります。飛行機やタンクはありませんでした。今、日清戦争は、空に飛行機、地上にタンクといふやうに、未だ會て見ざるころの形になつてゐます。世界戦争の時よりも進んで居ります。大河内正敏博士が大正五年の十月に日本工業俱樂部で御演説なすつたことがあります。そのときかういふことを申されてゐます。すなはち、その前年

の大正四年のソンスの戦におきまして、イギリスは一千万發の砲彈を撃つたが、大小彈取り混ぜて平均して見ると、安く見ても日本のお金にして一個四十圓に當るといつてゐます。したがつて、一千万發ではソンスの戦一つだけで四億圓の砲彈を撃つたといはなければなりません。今日はそれに輪をかけてゐます。戦が大掛りであり、科學戰であるといふ上に、日清、日露戦争當時とくらべますと、物の値段が騰つてゐます。日露戦争のときを基準にして見ますと、日本銀行の卸賣物價指數によりますれば、二・二七倍といふことになりました。したがつて十九億八千四百萬圓といふ廣い意味の日露戦争の費用を今日の物價に引き直して見ると、四十五億圓見當になります。さういふやうにこれらの戦争の時よりも戦争の費用が多額になつて來たといふことは、物價あるひは科學戰、あるひは戦が大掛りになつて來たといふことを見なければならぬのであります。

日清・日露戦役當時の國民の覺悟

それにして日清戦争の時に、その當時の國民があれだけのことをいたしました。今日から考へまして、その當時

は、先程御挨拶なすつたお方の言葉にもあつたかと思ひますが、支那といふものを見縫つてゐたといふことが窺はれます。當時は支那人のことをチャンコロといひました。それ程だらしがなかつたのであります。それが支那に對する侮辱的の言葉として使はれたことがあります。しかしながら、日清戦争のときの日本國民の氣持といへば大變なことであります。明治天皇は廣島に大本營をお進めなさいました。議會も廣島で開かれたのであります。皆さん方ももし今日廣島の大本營の跡を御覽になりましたならば、これ程のことであつたかと思はれる數々の話があります。大本營は二階建の非常に粗末な家でありました。少しも塗つてありません。この部屋の四分の一にも及ばないやうなお部屋でせう。そのお部屋の壁に一本の竹が掛けられてゐます。荒竹です。これは、明治天皇の衣紋竹であります。しかも、毎日同じ御洋服を看遊ばされるために、あちこち縫ひて來ます。侍従は新しい御洋服をと申上げて、御寝み遊ばされるときに『明日までに繕つて置け』と仰せられて御下渡しなされたといふことであります。そのときの日本は、國民の間から金の音がして來る、指環が出て來る、

といふやうに元寇の亂以後の支那に對する非常な緊張した態度でありました。日本は日清戦争によつて世界に『日本あり』といふ印象を與へたものが、更に日露戦争によつてヨーロッパ人であるロシアを倒しました。それによつて世界に『日本あり』といふのみならず、世界の強國の一つに列したといふのが日露戦争の結果であります。

日露戦争當時と現在の經濟力

かくの如く、今日の日本は日清戦争、日露戦争當時とくらべまして、だん／＼強くなつて來ました。そこでその當時の經濟力と今日のそれとをくらべて見たらどうなつておませうか。例へていへば、日清戦争當時の日本の經濟力はまだ幼年時代でありました。また日露戦争當時のそれは青年時代でありました。今日の日本はすべてにおいて大人の時代に入つてゐます。假に經濟力を働く力といふものから見て行つたならば、日清戦争は餘りに隔つてゐますから、日露戦争前の經濟力と今回の事變の起る前の經濟力とをくらべて見たならば、どうなるでございませうか。明治三十六年と昭和十一年とをくらべたらどうなるでございませう

は九億二千百萬圓でありました。しかるに、昨年、昭和十一年は百七十三億八千七百萬圓、すなはち、明治三十六年當時のその十八・八八倍といふ數字になります。この拂込資本金と日露戦争戦費の比例を今日に持つて行きましたならば、今日は三百七十三億八千二百萬圓の戦費を出し得る力があるのではないかとひ得るのであります。手形の交換高は、明治三十六年には三十五億九千四百萬圓でありました。それが昨年は六百九十八億五千六百萬圓になつてゐます。すなはち、十九・四四倍となつてゐます。貿易はどうか。恐らく夢のやうな進歩の跡を現はすといつてよいでせう。明治三十六年の貿易額は六億六百萬圓ありました。

か。働く經濟力とは何ぞや。あるひは預金の力、あるひは取引のための小切手が一定の時、一定の場所において整理されるところの手形交換高はどうであるか。日本銀行の發行する兌換券の額はどうか。貿易の額はどうか。あるひは國の財政を示す豫算なり決算なりはどうか。これらと比較して見ませう。明治三十六年における日本の銀行預金および郵便貯金の額は八億九百萬圓でありました。この力でもつて日露戦争をやつたのであります。十九億八千四百萬圓の戦費を出したのであります。しかるに、昨年、すなはち昭和十一年の銀行預金および郵便貯金は百七十四億二百萬圓になつてゐます。八億九百萬圓が百七十四億圓になつてゐます。よく桁違ひといふことを申しますが、これは桁々違ひであります。すなはち、二十一倍半になります。この比例をもつて行きましたならば、當時の預金百七十四億圓の二十一倍半は四百二十六億五千七百萬圓といふ額になるのであります。事業の發達した形を眺めるとしましたならば、會社の資本金をみるのが適當でせう。それも公稱資本ではいけません。拂込金額は幾らであるか、それをみなくてはなりません。明治三十六年にはそ

ところが今日の日本の貿易は棉花の輸入一つだけ見ても昨年は八億五千萬圓でありました。明治三十六年の六億六百萬圓は輸出入合計です。昨年の棉花一つだけの輸入にも及ばなかつたのであります。日本銀行から出てゐる兌換券は明治三十六年には二億三千二百萬圓でした。それが昨年は十八億六千五百萬圓であります。さらに、もう一つ國の財政はどうであるか。明治三十六年におけるわが國の決算

は二億四千九百萬圓でありました。今日では一つの自治團體である東京市の豫算が三億を超してゐます。當時日本の國全體の一般會計の決算が二億四千五百萬圓でした。如何に小さかつたかお分りになります。たゞ今申しました六つの數字——すなはち、銀行預金、郵便貯金、會社の拂込

資本金、手形交換高、貿易高、兌換券發行高、財政といふ六つの數字をあつめ、これらを平均しまして、昭和十一年は明治三十六年にくらべてどの位力が殖えたかといふことを見ますと、十四・三三倍になつてゐるといふ數字が出て來ます。これは嚴格に申せば、いろ／＼の議論もせられませうが、とにかくこゝでは算術平均方法を採りまして、十四・三三倍といふ數字を出したのであります。そこで明治三十六年の經濟力が戦費十九億八千四百萬圓を出したものとしますれば、現在十四・三三倍になつた經濟力は二百八十三億八千七百萬圓の戦費を出し得る力があるといひ得るのであります。私はこれだけ使へとか使ふとかいふのではございません。たゞ日本の財政が弱い／＼といふことを支那がヨーロッパやアメリカに悪宣傳をしてゐるのです。さういふことも下地となつて歐米の人達があゝいふことをい

つてゐます。故に私はこの點を口を酸くしていろ／＼な方面から日本の經濟力は大人時代になつた。そんな支那に見溢られるやうな經濟力ではないといふことを申上げるのであります。

國民所得より見た戦費支辨力

もう一つ動く經濟力より落着いた經濟力ともいふべき國民所得はどうであるかと申しますと、明治三十六年の國民所得は十億六千五百萬圓でありました。この十億六千五百萬圓の國民所得が十九億八千四百萬圓の日露戦費を出したものと見ますならば、今日の所得はどうか。最近のものとしては昭和九年迄のものしか出一ゝみせぬ。それは幾らになつてゐるかといふと、百十二億四千七百萬圓であります。十億六千五百萬圓の國民所得が十九億八千四百萬圓の日露戦費を償つたとすれば、同じ關係になつて同じ關係において百十二億四千七百萬圓の國民所得は、百萬圓の戦費を償ひ得るといふ數字が出て來ます。もう一遍申上げます。私が動く經濟力といつた六つの項目から比較して見ると二百八十三億圓の戦費を出し得られる筈になります。國民所得

からいひますれば二百九億圓の戦費を出す力があるといふことになります。もちろん日露戦争が一年半掛りますから一年に割當て、幾らになるかといふ場合には、これを一・五で割ればよいわけでありませう。どちらにいたしましたも日本の經濟力は充分戦費を償ひ得る力を持つてゐるといつて差支へないのであります。

また、戦時經濟、戦時財政を見る場合に一番引合に出されるものは世界大戦であります。當時の参戰國の國民の所得と、戦費との關係はどうなつてゐるか。それ／＼の國の當時の國民所得と戦費との比率をわが國の現在にあてはめてみると、わが國の現在の國民所得はどれだけの戦費を償ひ得るか。イギリスが世界大戦に用ひた戦費は三年四ヶ月の間に七十四億六千三百萬圓であります。一磅は今日では十七圓幾らになつてゐますが、その當時は大體十圓見當とみられます。でありますから圓に直せば七百四十六億圓といふことになります。これに對して毎年の所得はどの位であつたかと申しますと、當時のイギリスの國民所得年額は二十億磅であります。即ち圓に換算して二百億圓であります。この國民の所得によつて、この戦費を出し得たも

のとするならば、それと同じ關係におきまして。今日の日本の國民所得は——イギリス人が耐へ得た程度の忍耐、辛棒を行つたならば——四百十九億五千萬圓の戦費を償ひ得るといふことになります。フランスは千四百八十二億八千九百萬圓の戦費を使つたのであります。これはイギリスより二箇月多いのであります。フランスの國民の所得はその當時一年に三百七十億圓といはれてゐます。この毎年の國民所得が戦費の總額千四百八十二億圓を償つたものとすれば、日本の現在の所得は、その割合で申しますと四百五十一億圓を償ひ得ることになります。ドイツは千三百九十三億四千二百萬馬克の戦費を費しましたが、その國民所得は一年に付き四百億馬克であります。その同じ關係で日本の國民所得はどれだけの戦費を償ひ得るかといへば三百九十一億四千萬圓となります。その他、アメリカ、イタリー全部較べて見ますと、大體におきまして四百億圓といふやうな數字が出て來ます。けれどもこれは三年四月あり當てると、百二、三十億圓の力をもつてゐるといふことになりませう。符節と合したやうに日露戦争との比較も、世

界戦争との比較も、相共に日本の経済力は餘裕綽々であるといふことが分るのであります。私が日本の経済力を、日清戦争時代を幼年、日露戦争時代を青年とし、今は大人の時代となつたといふのは、これを指すものでありまして、日本の経済力は立派に耐へ得る力があると申上げて何にも差支ないと思ひます。

満洲國關係經費も考慮を要す

けれども問題をこゝで切り上げることは出来ません。といふのは、日清戦争、日露戦争は支那を倒せばよかつた。ロシアを倒せばよかつた、それに全力をあげて行つたのであります。しかるに、今日の日本の経済力は大人となつた足場はちやんとしたけれども、する仕事はふえてゐます。たゞ今御挨拶をなすつた方のお言葉にも満洲國との關係をお引合に出されましたが、その通りです。私たちは現に支那事變費を負担して行く以外に満洲事變費も出して行かなければなりません。今日現に國の豫算に満洲事件費といふものがあります。満洲國の治安を維持する、満洲國の産業を發達せしめる、満洲國を育て上げて行くといふ關係にお

いて國民の力に俟たなくてはならないのであります。しかし一歩進んでは彼の足らざるところを我を以て補ひ、私の足らざるところを彼を以て補ふ——いはゆる日滿經濟一體として行く政策の下に今日は立つてゐるのであります。したがつて支那事變費を賄ひながら、満洲事件費も整へなくてはならない、否、日滿經濟一體としての政策のためにも吾々はこゝに力を盡して行かなければならないのであります。日清、日露戦争當時よりもなすべき仕事はふえてゐるのであります。

豫算に現れた非常時局相

さらに、過去數年來非常時といはれたのは何であるか。それは如何なる結果に現れたかと申しますならば、國防の充實といふことにおいて豫算面に現はれてゐるのであります。御存じのやうに、過去におきましてはわが國の國防計畫は制限されて來ました。縮小されました。せめてヨーロッパ諸國の持つてゐる位の軍備を持ちたいといふので、大正十年の計畫が出来てゐましたものが制限され縮小されました。しかるに、満洲事變が起るとともに、これではいけ

○上海の心臓部と云いんとある大場鎮其他の要所が其が
よびつて帰して上海が吾らの手裡にゆくと云ふをよしのめを
る。九ヶ箇の海軍の思國にこしてある間、吾方にお見えし
る海軍を蒙つた。ウリの日宣候をもちも定の上候と
す。方かにはい。外四の軍中専門家が、軍中
戦術をえて教習せらるるころが、決せんまゝにお世談
しあつた。彼等も佳地を換つてきた。心臓を定めた
くしめ、海軍のあり。当然今度の戦術は、海軍の
よびつた。世界の戦史と特異なきよびつた。敵は戦時
の昔河原のやうく、相当訓練をほしたる。今日の
こと四年前から遊視して別な戦術のあり。トーチカ、ソリ
アールの遊撃隊をもち、死の要塞の如き、堅壁を築

種

いてゐる。彼等が日本を打ぬと自惚んたる無理がある。と理
解せん。また、只の堅固の要塞は、難い。ソリ
と敵前に入り、大砲を飛行機で送り、トーチカを粉
塵し、戦ふ。大砲も勝我軍の手際を目的とす。又、ハ
外四の軍中専門家の教習するもの無理ある。この
ある。併し彼等の觀察は、恐らく皮相に徹底してゐる。か
ある。衆寡を敵とす。と云ふの、軍中の遊撃隊は、今度の
かく、五ヶ箇の戦術を取つてゐる。吾甲が敵も、三倍の兵數
を擁する。好む。といふ。敵の十分の一も、是れ
兵も、以て敵を壓してゐる。●、衆寡敵をす
と云ふ原則を、彼等が、先づ、教習してゐる。
科学的な新軍械の操縦が、如何に巧めか、飛行機の向

ふ所敵の多く大砲の照準は不慮にすさく命中を謀ら
いことも彼等の欺誑する所である。兵糧を以て幾日も不
眠不休の戦闘を続けしめることなど、欧米人の創意企及
し得ざる所である。亦彼等の戦術を極しめたる所は、遠く
を以て上は皆と彼等の戦術は、傍ら目撃する所であるが、
また文を以てし、皇軍海軍と其の皮相の觀察は、如何
何とて敵の空軍を要塞的のトリーチカや壘に誘ひ、督
軍の足も傳へて退去を許さん、強制の下に敵前線
にあることと比較すれば、皇軍の強さの鈍眼も知る譯
が、此の軍中研究家が往々身因するのには、吾皇軍の特
士の精神の多き、燦爛大砲の機（き）難い望遠鏡を板くの
ハ此の精神の多き、我を行械の精銳なる所以七技術の如く

此の精神が伴つてゐる。彼等出征の時辛くも四難
を犠牲とするのを名譽とする。誰れも出征する時、生還
を期するもの無しの出征は、後述するよふか、自から恥辱
と、或は自刃するものすくある。父兄の恩愛を絶つて生還
を欲するものも、戦死を以て名譽とし、一家三人五人
の壯丁を以て、まんが全滅し、夫を哀あつたとき、寧ろ
妻を誘ひて死ぬる。殉国の精神は、戦後、漲つてゐるか
ら、戦場であるところの一回を報つて、他念なく陣歿し、
歸んかぬ、天皇陛下を萬歳を叫び、日條を對して、踏
回神社で思ふところの別を告げしめる。此の戦死の精神は
どの民族にも四難を過へば、此のよふか、各種民族の
皆、合の回家を拒んで、起り得ざる精神である。日本の回家は、

一系の天子を戴く家族的國家であつて、四維を思つて國家
保護の氣念が自然に統一せん、政黨もよく個人主義もな
く、平生相懸りの不和のこともなから、友を合致して一とする。出征將
士の銳意も、斯の統一がある。今の徴兵制度は國民皆兵の
制度であつても、必ずしも封建武士の血統を愛せしめよひの
かたい同中日本のはたをうけた武士道の教訓は國民を令せ支
配しよめいざとるものも、えんが現はるのひある。卑怯未練を死
しよも、肩廣の武士道の教訓あり、大義名人の爲め一
死を輕んずるも武士道からである、之を大和魂と言ふてゐるが
えんが被野頭心の精神も、心を踏んぢ、何れも七踏んぢ、千
萬人と云ふ吾ん性くとも、精神である。此精神は日本の四
柱や神傳の宗教や武士道とも複雑な根源から發生し

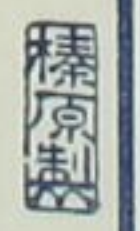


此の他種人のあつても得るべきであらう。

我の國は一系の皇室を戴く世界無比の國体、此の爲め維新
の革命も亦も法滿の横暴を排して決つた。皇室の精神も、
強弱と云ふも死ぶるが、
かまも敢て難すも、
領土の天地が變つて、世界の
兵を目標のこころをうけて、
思想も這入つて来たが、
我の短所を補つて、世界
の一等七もつた、
大切な海軍も、
我が家族制度も隣保國體も、
雖も念ふも、
を掃く入て来た一世紀のも及ばぬが、日本の國體も、

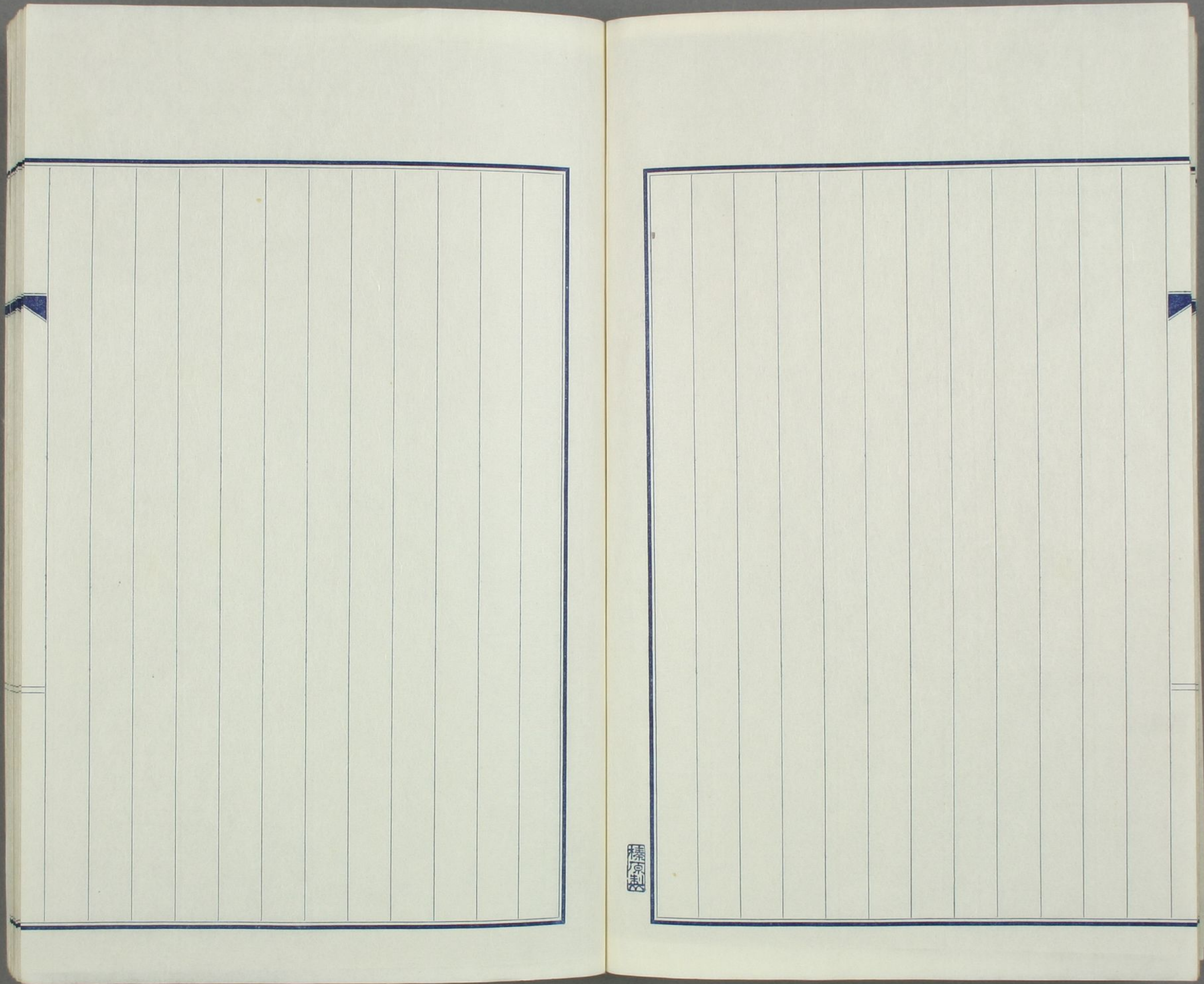
直に大敵を打ちつゝ現状であるから、こんな外人の勢が盛んになる
ことであるが、凡そ此等の根柢をなくすも極りず、唯此敵情
又打つる将士の強さを賞賛するのの皮相の觀察を、彼等
うして深く我國民性と國情を極められ、彼等の恐ろしく
驚倒して天下の世界の覇権を完極握るといふ我々の心
あると絶叫するであらう。

十月二十九日



大久保湖南詩集序 初稿

一七序二〇九



標原

〇身延報す 十一月三日記

一安田文庫と古活字本の研究并附圖二冊を贈る
此、えんり安田の平生前編著を川瀬一馬に托し、其用
惜しきを出版したるもので、本文は「新刊」を附圖とる意
の趣大なるもの、活字本と考証したるもの、其前編の
にあり、安田の蔵本の外論又所を著する古活字本
と歴史的な考証し、版と洋とを極めしむる安田
の生前七八公通り印刷に附るといふは、終る
成りたることあり、其世界にのみあり、も遺稿
にあり

尚ほ安田家より一月忌に降して、養子(の遺物)を
贈るに、而も印杖もあつた。即ち遺物を予

藤原

の期待の通り、長い交りであるが、乾歎の格
二取扱ひのことも感懐する

一御へ長字松雨(乾歎)が久方振返り来り、山と
大久保湘南の遺稿を給へて出版せんとするに
序を書けりともふか、直りも送し、母と云ふ、湘南
と、自分お前(の交り)あり、五年か余の君の鶏空
正歌と此の時、湘南も其の久、希政三河屋に余
が五年を松歎の折、湘南も来り、約あり、五年
と、余といふ、妹の大久保、種の二感懐、可なり、直
が、身痛し、余の松歎の時、日休と、予へん、直
ふこと、四十年前の文を、追憶し、直り、序
を書きた

一加賀世平漢(臺三ら)が尤大の風呂敷(袋)に四五個を
 白粉車に積んで訪い来た。何とも思ふと余が去
 年文り筆をこき拂ひ此鶴助雜文か加賀初
 二歸りたりの改裝して四十冊計り入製を本し余
 の題名を求めたる為めあつた。此考は往りの断
 片(空位)と云ふを集めて張りの紙に綴りて
 巻果に力を加へた。よれば、幸ひある人の手
 留し五冊の教正記をえられたるを喜んじ、去る
 命にうきと存すことなかり、予は直ちに筆
 を走らせ、加賀の目前に四十冊を考へし
 也。

標
 本
 印

一 仰土閣東研究会の臨海子音集を出すの事
 あり

を徴して来たから一文を考へた。子音集、就この二
 絶筆の載せられたるものもあつた。あきつたことある
 から、是等も七加のものに注論をも添へたが、前
 七のしつともの重積もある。子音が世を去つて既
 二七年と行つた。

世界戦史上に輝く 敵前卅米の砲撃

手で壕を掘る死闘

「蘇州河畔防楯の下に て一日平栗特派員發」

蘇州河の敵前渡河戦は日露戦役時
遼江渡河および歐洲大戦にもかつ
てない物凄いのであつた。市街
地の敵前渡河はすべてにわれに不
利なのだ。敵は河岸に屏風をたて
た如き堅固な建物を利用して要所々
々に土壘を築く重砲隊を張
り、コンクリート製の無数の銃眼
をあけ、或は屋上高く迫撃砲をの

せてつるべ射ちを構へてゐるの
だ、この
物凄 い陣地に突貫するわ
が部隊將士の決死の勇は租界付近
の壁に上つて観戦しつゝあるイ
タリ、英國、露國等の各國將兵
を驚かせしめたものだ。記者は露
蘇部隊突撃に従軍し、文字通り將
士の決死死闘を目の通りみた。夜
中とはいへ余りに近迫してゐるの
で、話し聲一つしても向ふ岸の敵

陣地から機関銃で狙はれるのでみ
な息を殺す、つるはしを用ひず、
すべて手で壕を掘りコンクリート
壁にかくれて砲身位置をきめた。
それから砲口を覗かせる穴をコン
クリート壁にあけるため圓形でこ
つ／＼二時間余かかつて廿一日午
前三時四十分銃眼が開いた。砲撃
開始の聲と共に卅メートル川向ふ
のコンクリート

この近迫砲撃に破片が土壘とも
にはね返つて砲手一團土壘を浴び
る物凄さ、観測機をもたず砲身を
覗かせるの直接照準射撃は、思ひ
三尺余の敵側コンクリート壁はも
ろくも次々に崩れ六十一發で二百
五十米の長さの壁を倒し午前六時
歩兵の突撃路は完成した。敵前卅
米に進んでの砲射撃は未だ世界
戦史上にもないのだ。

の口又の戦報のテテールをよく讀むと、其いろく敵防楯
かたき、蘇州敵のやうと強固な射を冒し、橋を築き、
敵かまを穿つる上流を、空艇を下して、敵を打ち破つた。
二兵の死、決死的に、終結を由義、つとめ、たゞ、悲嘆
の事である。夫は蘇州河畔の戦、敵の砲を打ち、敵の
こへ、接近の事、日新、強を破る、敵の砲を打ち、敵の
か出来ず、手で掘る、手、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、
此が、砲口を覗かせる穴をコンクリート壁にあける、
用ひし二時間余かかつて廿一日午、敵前三十米の
接近し、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、
つ、(たの)切腹を覚悟、皇軍の進撃、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、
敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、
敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、敵の砲を打ち、

標準製



架橋の暇に我工兵隊代つたり友軍歩兵を渡す海上戦線にて
 本社特派員撮影—大毎電送

嗚呼の盡忠

嗚呼の盡忠、敵の軍と通じし電信が吾軍の
 支かんと、皇軍が支那語心より可減の返答を與つて敵を欺
 き、敵の是を信しし自分も味方か来ると念中へ迎へると
 日本軍の欠庭へ、是を迎へて、敵の滑銃を打ち、
 (巻末に掲げたる味方にかはるるの所、又却て見よ)

浴め

○温浴の本末更樂的のよき若し、温泉の用を供せんは
古より洋畫に浴桶を杖を度して杯盤とて此圖がある。此
の御座るは、此の御座るは、浴してある國である。日本
も七つと浴を馳走の用を供せん。但し浴桶は酒を飲ま
る。うらやまし。温浴の更樂的のよき若し、自然に酒を飲
め下に行かん。クレラウは、浴中である。青年は、倫
れ、情んが、臥内と伴ひ、聖朝刑教に事か、侍くん。乾
帝、外西洋人を納め、龍に挑んむ。庭いさひの、トルコ
風呂を築いて漸や目的を達しと云はん。日本でもお湯殿
は、徳田房の代理とつとめ、よき、狩中や大名に、侍
ま。このことが、給く、婦人の裸体を見る。好色家の
最大趣味ともいふべし。浴桶が即ち婦人の肉体と露す

標原製

所である。温泉の温浴は、早く林業で、市中である。温浴は、料
理店などの浴桶の温浴を妨げない。好色子の婦人の裸体と人
とを温浴にあふ、外人も、日本婦人の裸体と人
かり、或る時代の初年頃、自人の目撃し、此の木橋の
某料理店の浴桶を三回り外人が、妓と共、浴桶を、
あふ、余等と目と掩、浴桶は、
大政の洋畫家のアトリー、モテルセが、全裸に、
見える方が、氣者、ルーマニア女子の酒席、
裸に躍り、唯、念一杯、
裸に、酒席、
か、自分の兄、
浴桶を、
浴桶を、
浴桶を、

酒席をいへるの殺伐の氣がする。又此の浴場をいへるの
が自然の情味もある。自分も若かりし頃塩原の湯の旅館
に浴場をある時名前の女儀と夫と其母が浴してゐた事
も浴したことがある。あ時の女生輩は此女も憧憬して下
らん事と云ふん。自分も女を捨捨しと君等も言ひあひ
女も仰きえてまぢらひの。俺んも女を同浴したるが身体と
女も羨望の如く羨望の如く羨望の如く羨望の如く羨望の如く
此女も浴した時、一行三日遊流の女僧がゐた。美人の浴場を在
るの正僧又て教へて遊けりて、何か口をさし、淫文を誦し、あ
とで聞け、あんな邪心を拂え、為りの誦經を罪をうせ、あ
と云ふ事。
果止の記述に浴した時、多数の男女が入り交つて浴場の狭隘を

標原

あつた。船を相摩すともさふべき難道があつた。鬼
舟に乗る婦人の羞恥が決してあつた。情味は無い。又娘も素
●幼少の素人が人前を堅くするものが餘款がある。あつた
素人が七或る年輩を越へた人前を懐く。人前を懐く。秘
の極所を忘る。濃味のあつた。空や色消し。感座
を穿つた感がある。但し素人の中年増む。美人の評判ある
婦人と偶然同浴した時、快感を覚へた。全宵室の如く、
七体格からうらうらと。裸体の引入れぬ。塩原や函根の如く
●浴場をいへる。裸女の親業物人が多く、裸体の極限を
あつた。さうと云ふ。妙り望満。肥太と云ふ女も感心出来ぬ。
塩原の旅館に浴した時、相方の地位の夫人がゐた。さうい
る肥満の体格が、臍腹部が垂れ下つて、秘部が見え、個々の肥

女の醜美の衣服を著しきもの判し出されよふある世評いさふ
醜と知れど、最れび元と醜美と判しきい難きあるもの醜を
つよよと粉粧をつとめ且つ巧みなるものあるもの、是れ不
ふかき。唯此全裸体で見ても、真の美醜を、いさふもの
の如きもの、骨格やら皮肉やら、内へきや、手曲是やら、若
の鈎合やらを、見るに、いさふもの、實の美醜を、いさ
画家が裸体美人を、描くも、此故に、日本我邦の裸体婦人
の淫穢たるけん、夫と見ることか出来ぬ。凡そ壯麗な女と裸
体とを、見ると、夫と感する、此故に、夫の美人の裸体と
するの、甚と其美と感する、^目日本我邦の美人とある所が、悉く
露の、よふもの、ある。浴女と、いさふもの、實のいさふもの、
遠慮なく、^{裸体}婦人といふもの、から、其の地、後の生れ、^{裸体}の、
全体を、いさふもの、あるもの、ある。

淫態があるもの、浴女の女を、其美を、^{裸体}するもの、
淫世ゆが、浴女とも、いさふもの、此故に、人拘画と、
いさふもの、春畫と、甚と淫め、^{裸体}の、^{裸体}の、
全部を、いさふもの、あるもの、ある。

の二階に、茶業と供するもの、女のもの、^{裸体}の、
室に、女湯と見おするもの、^{裸体}の、^{裸体}の、
わた美人の、^{裸体}の、^{裸体}の、
また、^{裸体}の、^{裸体}の、
入浴するものと、^{裸体}の、^{裸体}の、
手び、^{裸体}の、^{裸体}の、
湯も、^{裸体}の、^{裸体}の、

女湯の、^{裸体}の、^{裸体}の、^{裸体}の、

湯の女歩き有様の横紋の堂々たるものが色気か無い。同
一塩原の自分が入つてみる浴槽の跡も浴槽が落ちて、床を配
くと浴槽の坪は張るも肥大漢があつて其の多毛も
髪は比が男は何ん利し並ぬ好意心に駆らんか浴を出て
て、湯桶を又るとそんが危懼であつた。更に一筋を喚ぶこと
がある。

押枝と目浴して格別風味がない。唯此志をかけても目的を達し
ぬい故を控して同浴することゝハ、風味がある。その露出してんた身
体を見ることより少くとも好意心を満足せしめよう足らぬ。
此の経験は稀なり。湯の女は、自分の芳原の故の對して
此の経験のあつたことを想ひ出さる。浴女と一執の風味を
覚ゆるよすが、語り中、朝早く荒くは夜分早く浴槽が

女中の浴下と見てふんふん気が起る。右足の海解を湯
の外に連れ出したことゝも、夕暮る春朝の一秘事であつ
た。

自分もいゝ湯女のあつた頃の江戸をいゝ。但此及湯女
の二階の茶室と供する。女のあつたことを想ひ出さる。此の
室は女湯と見おろすの足き孔があつて、内々裸ぬを又
かて美人の痴漢にあつた。湯女の名残りの地方は、免れ
まゝに存してゐる。城後には、浦房附の山を、料亭
へ入浴すると、蒸気者が、客の垢をすく、肉体の
手は、磨き、ハ例と有り、みる、暮い、いとく、まき、ハ、林
湯も同じ、横紋の鏡つてゐる。

女湯の、三毛、ハ、癩漢の時々やることゝ、遂に、土産、電の、数、

悪意のふきを出した。近年の言美枝を推して女湯に誘ふこと
を遂に裸女を言すしよふあつて客の悲憤を起したことがあ
り、下谷の某妓に懸想した客があつて、何んとして情を返け
んまいのか、妓の家の婢を賂めて、妓の家の風呂場へ潜り
妓の裸体を見て喜んだ痴漢もあつた。

前年湘南のある富豪の人の別荘の浴場を見た時、浴室
の隣つて暗室があつて、そこを覗き探子が一の罫を覗いてあ
るが何れも脱衣室の別荘あつたから、何人の者も不審
の思ふに、完全浴場の戸を開かんとし時、適けこむ
用事なむことか知んた。婦人の斯うスルをむしり裸
体を見らるゝことを氣にいらぬのである。

櫻原製

別府の他の温泉場も異つて、海岸の沙地の下から湧き

か湧くのか、砂を掘つて男女が体を埋める。温沙が降りてテ
を醫する效もありと云ふ。或る氣の即ち成るん此の浴室
かあるが、一種の究の素である。

最後に人の取り初めい浴場を奪はるゝ、夏の獄中の風呂か
ある、ベニカラの刑服を着せられたら、垢を脱するにあら
絹色の垢かぶるゝ敷敷してあつて湯槽の中も絹色の
湯が先ちである。ベニカウとまふまふの妙に人間の髪を染め
るもの、コンナ湯に入つても、唯れ差を深く染められ、深
のふたが流しの流るゝあつても、髪を濡く位で、流
くさやうかまひ。恐ろしく不愉快の温浴の冒険のハこん
である。

○程年老訪重印港：枕藉之匡句と摘抄之匡句と
多し其次日又曰去と觀聞之前：漏之匡句と
插録之匡句百之及人比之左之十教句と録す

春愁如髮不勝梳

世間無用是才名

天自有安排

人用財試全用火試

心田清淨道自成

三寸枯毫欲燒未思

或人不厭聞

一春常費買花錢

心逐雲帆轉隨烟笛

詩盡孤眠滋味

潭水伴孤清

多言多敗

空愁天上埋憂憂地不

花心感恨柳眼弄愁

天易无恨難酬

開情清曠

志在幽古

坦率無私

出山雲滿衣

心要常操身要常勞

病須書卷作良醫

の敬業中の閑耳目に觸れ新事と漫りて記すと此
資料は愈々幸福の二字を用ひることか流行し二幸か
幸か未か或る三福か或る雨沢樂未か或る。

あ復料地と豚肉が多々用ひん、豚のカロシツを豚カツと云
いおし此の致々太いのが、豚バラと云ふのが、豚肉のチ
ニブラで或るや、おはいのい

セある

新右の三福を合するをやつておつと、隣席を又由連人の客が赤
ん坊をつれを合するをやつておつ。男は士官くしい人と見て取つ
酒も七飲まも、氣まのな態、度々、ナカク他談がある。
當るいは、お露の細君と訣別の今合ひあるまいかと
恋係した。最後アアリスのムを喫したか、又ハ其時アア
ン、おさとりも赤ん坊の口をシヤリウ、こんでやつたのを覚えて、

標原製

が最後の意思でもあつたと思つて哀れを催した。

相対像一か死人か、此人といふものの交りもあつたか、久しく病を罹つ
てあつたが、数も問無ゆか、あつた、土佐の人が三草の岩崎家
の幕中りもあつた。お珠味の人、釣をのみ、謡曲に通じ、和歌
もも、送活があつた、蘇え集と出版したことがあつた、携へま
へき一友を失つたことを悼む。

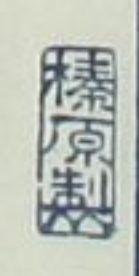
娘子関りやさい地名が、振さ難い非所が、死か、突か
か、甚毒と振さ、殿の力と一般、弱さを治す。

市街教をやり、く、就問、うい、兵家の、文、文、文、
校ける、市街教の、宣る、屋の、敵、敵、味、方、合、壁、ひ、あ、
の、市街教、う、七、倍、ま、敵、問、加、因、難、な、と、さ、
長、河、野、河、大、久、保、湘、南、の、遺、跡、を、追、う、ま、さ、ま、出、政、せ、ん、し

自分こそを懲らしめ来れりか、深しに湘南に依りて出身の待て天
才か、或る随路吟社を創主し、此人があつた政は既に四十一年
重人として

支那在任の日本人が其の使役として法人を解僱する時、主人か
ら贈るに日本産の布とて其の布國の徳を以て返還して
行くと言ふ、是れを其の邦に於て忌むる、邦産のよきを所
持し居るに、直ちに好漢として殺さんこと、
堅忍を抜き、城頭之日軍旗を樹け、而して其の心恃り、死に其
槍の如きことあり、其の思ひ斯の心境、其の心恃り、死に其
悔を以て

上田重年が殺したる(三十三)義賊を其の人、文界に二星を
失つたのを身(遺)域とす、彼の種々の重忠、四推し、又



んと十年、病を患へ、惜しむるあり、彼は軍を以て文人を以て
政治的人物とあつた。享年七十一歳とす。

日本を侵略する泥棒と叫ぶ、彼を縛りて、九回分際
ハ、繩を縛るの昔、早く發着を穿て入る。今更其等、は
何を言ふんとしてや

上海の陥つると、英四の遠から陰謀手段、皇軍の行動を妨害
し始め、其の四海漸やく、彼は激怒を起し、つゝあり、其英主
義の露を、其の日は、尚ほ遠征を待たんとす、其を懲らしめ
あるらん、其の支那を、抱つとも、東洋平和の目的(幸)難きこ
とも思ひ、其の英に對して、断るらん、其の(十月
三十日記)

落款の誤は誠實の義なり、書畫をかき終つて、自分の作なりと誠意を表して名又號を署する義なり。落は落成の落にて物事の出来上りたるを祝祭する意なり、故に名も號も無き書き捨て物を無落款といふなり。然るに世の中はをかき事の折々あるものにて、或人は無落款の山水畫を見て『是は見事な落款だ』といふ。聞く者『どこに落款があるか』と詰問すれば、其人答へば、款を落してあるから即落款だといふ。左傳の昭公七年に楚子成章華之臺、願興諸侯落之とあり、建築成功して之を祭るを落といふ。右落款の落も(祭はせぬ)ど)本は此意より来るなり。

今より十數年前或る河の橋流失後これを再架す其時に何河山橋落成式と大書せり。一人之を見て感心して曰く『漢語は簡にして要を得てゐる、此橋は昨年落ちて今年又成した、それを漢語に唯二字に約めて落成としてゐる。』とて、同行人に高聲に話してゐたり。此落も新成を祝する意より出るを知らずして、水に流れ落ちたる事とするは誤解なり。落款の款に就いて序にいふ、史記封禪書に汾陰得鼎云、無款識とあり。書畫にていはゞ無落款といふが如きものなり。さて此款識の二字を本義上分解をなせば、款とは陰文(凹入字)をいひ、識としては陽文(凸出字)をいふ、但し此陰文陽文の解に拘らず、實際詩文上に款云、銘款など用ゐて、陰陽文に拘らずいへる例多し。たとへば頤にあるヒゲを鬚といひ、頰にあるヒゲを髯といふなれど、實際二字通用せり、故に本義を知ると同時に用例をも通考すべし。

書畫骨董雜誌

第三百五十三號 昭和十二年十一月一日發行

正定府城内の古蹟

田中萬宗

北支に於ける皇軍の猛撃には難攻不落の城廓も次々と陥落して其進める所、名所舊跡は筆紙に盡せぬ多數である。今回陥落した、平漢線正定府城内には名所舊蹟が最も多い。正定府は其初め恒山と呼び眞定とも稱した古い都で、禹貢に冀州の域となり、春秋には晋に屬し、戰國には趙に屬して、戰國には東恒邑、秦に東恒縣を置き、漢に正定と呼んで常山郡に屬せしめてゐた。其都城は西に鼓山を望み、西南に滹沱河は東流して子牙河の流に合し、平漢線は城の西十數町に在りて、滹沱の鐵橋を南すれば石家莊である。實に正定は京師の輔郡、南北襟喉の衝として古來重要な鎮であつた。此城内に遺る古蹟の龍興寺は、俗に大佛寺の名を以て知られてゐる。其創建は隋の開皇六年と云ふから今から一千三百五十年前で、其當時は龍藏寺と呼んだ。唐の玄宗は開元廿六年に天下に令して開元、龍興の二寺を天下に建てしめた時に龍興寺と改め、其後貞元十一年此正定に住でゐた釋自覺と云ふ

正定府城内の古蹟

僧が示寂したが、其生前に高四十九尺の千手觀音の銅像を鑄造した。恐らく現今此龍興寺に在る大千手觀音銅像は此自覺の造つたものであらう。處が此像が後周の世宗の時、顯德二年に廢佛滅法が行はれ、千手觀音の大銅像をも毀して錢に鑄直さんとしたから、眞定の庶民は佛體を破壊されることを悲しみ、此像の分量だけの銅錢を醸出して像を救はんとしたが許されず、工匠に命じて像の頭部から胸へと壞しはじめると、俄然其工匠は暴死した。此奇怪な出來事に工匠達は懼れをなして破壊作業に従事するものが無い。世宗は何を懼れることやあると自ら足代の上に登つて髪を像の胸のあたりに打込むと、其夜世宗の胸に癰瘍ができ遂に崩じた。後周は滅びて宋の太祖國を起すに及び、此事を聞き破壞半ばの像を追鑄し、開寶四年に此像に重層の大悲閣を建てた。現在屋根は落ち縁に周壁を遺す佛香閣は即ち此開寶四年の建築で、中に一千百四十餘年前に作ら

れた四十九尺の千手観音像のさうした傳説を語る大銅像があり、建築又九百六十餘年前の佛を遺し、元の成宗大徳五年（六百三十六年前）に重修、また明の神宗萬歴四年（三百三十一年前）に再び重修し、再三の重修を蒙るが其奇構の建築は我宇治平等院を三階建にしたやうで、頗る破損してゐるけれども、閣内の壁面には塑壁を以て、文殊、普賢渡海の圖、或は摩尼殿後堂にも觀音像を中心として群像影壁がある。

又閣前には唐宋元明の碑碣林立し扉外には、金の大定二十年（七百五十七年前）に建造された白大理石の八角形舍利經幢がある。其基壇には八方天を彫出し中臺に四頭の獅子隔面に正面向に彫出し、其意匠は頗る奇抜である。其他八天支承或は蓮華座、幢上の八獸環を啣めるに華を以て之を繋ぎ、佛像又は羅漢像等の彫刻が施され、惣高は凡そ廿尺其權衡宜敷く精緻の彫飾、金代の遺物尠きに此名作を見ることは美術史上珍重すべきである。

木塔寺で知られてゐる天寧寺は、現今頗る頽廢してゐるが纒に一基の塔を遺して居る。其創建は唐の咸通の初と云ふから今から一千七十餘年前。其後、明の天啓二年に熹宗は額を賜ひ、清の世祖順治三年（二百九十一年前）に重修して居るが、塔は八角九層で約二百尺位の高さがある。下の三層が壁と料栱部造傳築で軒の極は木造で、上の六層は壁のみ傳築、料栱軒極は木造で今は荒廢して宛然破れ傘を見るやの慘狀を呈してゐるが、木造塔は山西有應州の佛宮寺八角五重塔と共に珍稀とするもので、此塔の形其上層にいたる急に遞減の度に強く美感を削減するが、屋上の相輪は鐵製（？）中央部に脹ら

終し辛辣當るべからざる力の宗教が此小禮院から起つたと思ふと其ゆかしさは譬やうもない。

此寺の創建は古く東魏の興和年中（千四百年前）と云ふが確でないのみならず、禪師は唐の咸通八年（千〇七十年前）大名府の興化寺に遷化したので、其生存中の物と覺しき一物も無い。唯だ寺域内に一基の瀟洒たる磚塔がある。此塔は清塔と呼ばれ臨濟禪師の衣鉢を藏められた八角九層の傳築で、高さは百尺餘。

金の大定二十五年（七百五十二年前）殆ど改築された五百四十九年の清の雍正十二年に又々修復したものであらう。其構造は二重の基壇上に腰料栱勾欄を構へ、三重葺蓮華の上に丸柱八角の初層有り屋上に屋蓋を八つ重ねて、軒は二手先料栱を詰組とし、二重極を造り屋根は本瓦葺である。飛檐極鼻に風鐸を吊し、屋上の相輪は複雑な露盤上に立ち輪の上に從て減縮の度強く、竿上に三箇の寶珠を貫き稍や喇嘛教形式の爪に見えるものである。

塔基壇の南側地上に鐵鐘が置かれてあるが、其鑄出銘で製作年次を明かにすると、其形の他に類例の無い奇抜さは此種の研究者の共に欣ぶ所、高さ凡四尺、口徑も四尺位、恰も兜の鉢に似て龍頭無く唯だ一つの環を附したのみで、鐘頂に八葉の蓮華を鑄出し、各瓣に『眞定府』南『無』阿彌『佛』『陀』清塔寺と鑄出し、各瓣と瓣との間に圓孔を明け、孔の周圍に太鼓鉦飾とし、肩帯の部には八方に格狭間列形の中に八卦の算木を鑄出し、腰帯には格狭間を肩帯の格狭間と對向せず交互として中に牡丹様花文を現はす。此肩帯と腰帯と

み恰も燈籠の胴に似て珍らしい。

廣惠寺は花塔寺と呼ばれ寺院は全く荒廢して痕形も無く廢墟となつてゐるけれども、又甚だ珍らしき他に類例の無い奇構の塔が一基遺つてゐる。塔は高さ凡そ百二十三十尺全部磚で其構造は全く木造塔に似て各二手先料栱を詰組とし軒には二重極を現はし、極めて上層を相窄減した三層屋上に、恰もパイナップルの實に似た彫飾を立て、朝顔花を倒に覆せた形の屋蓋を被ひ、初層の四面に六角の卓層塔を附着せしめて奇異なるプランを成してゐる。三層屋上の彫飾には、佛菩薩像の他に虎、豹、獅子、象の形あり、現今薄紅色一色に塗潰されてゐるが、其靨めは五彩を以て色どられてゐたことは所壁の剝落の下から之を窺ひ知られる。三層中には唐の貞元十一年（千四百四十二年前）に此に移せる白玉製舉高九尺の佛像二軀安置せられ、此塔の初建年次が略ぼ推測し得られ、五峯塔は印度佛陀伽耶の大塔もさりながら、此塔の多角形にして抑揚に富み建築は凍れる音楽なりとは、此塔を見て初めて其言葉が相應しく感ぜられ、また華塔の名のある所以である。高野山に建てられた瑜祇塔は恐らく此塔の思想を受けたのであらう。

臨濟寺、是亦傳塔寺と呼ばれ近代の重建になる小禮院であるけれども、恐らく創建當時とても決して大伽藍では無かつたであらう。初めから小禮院で有つた方が寺としての價値は數倍する。即ち此寺は禪宗の一派臨濟宗の祖師義玄即ち臨濟禪師の住した禮院であるからである。師の黃葉に三十棒を受け、風飄漢と叫ばれて接化された臨濟禪師が、『喝』を以て始の中間即ち池の部を約正方形の區劃を作り、頗る異様なる開敷蓮華座上に西藏式梵字を現はし、鐘口は強き波狀形とし、之に隨つて腰帯に接する幅廣の華頭形に縁をとり、其腰帯との間には鱗鳳龜龍の如き瑞禽が鑄出されてある。此自由奔放に從來の鐘の形式に囚はれず、些く蠱野のさらいは有るけれども、適勁の感を起させる。猶ほ池の部に天順四年其他の銘が鑄出されてゐて、明の中葉（四百七十七年前）の製作を明かとするものである。

開元寺の鴈塔、開元寺は舊解慧寺と呼んで東魏の興和二年の草創で、唐の玄宗の開元廿六年に開元寺と收めた。乾寧五年に重修され輪奐の美は府内に冠たるものだつたが、後次第に廢頽して今は一基の方形九重の鴈塔一基を遺すのみとなつた。鴈塔とは昔印度摩竭陀國で菩薩が僧の肉食するを導かん爲に雁に化し、空より落ちて死せし所に供香塔を建てた故事に倣つて、支那にも魏時代から唐時代の佛教の盛なりし頃、諸所に續々と建塔したもので、此塔も其一だが近年の大修繕は大改築に等しいが、此寺にはつい近年まで唐の乾元年間建つた三門が遺つてゐたけれども、大正十年自然の崩壞に坑を掘つて瓦石を埋めてしまつた。二尺角長十六尺餘石柱石梁には見ごとく阿彌陀來迎圖が陰刻されてゐたものだが、今は土中に瘞められて居る。

秋 日 耿 濤

返照入閭巷 憂來誰共語
古道少人行 秋風動禾黍

味方に掛けた電話が

意外な恐い日本軍

笑止や敵の狼狽振り

【京漢線にて特派員一日發】石山莊以南の我が軍が、敵軍の進軍は戦史にも比類ない快速振りであつたので、流石退却の速度を天に誇る支那も手の付け様なく、列車や馬で逃げやうとして味方の列車と間違つて我軍の列車に飛乗る始末でその狼狽振りには全く笑止の沙汰であつたが、その途中敵の機で珍無類の事件が持上つた。

これ〇〇〇名の突撃部隊は出發した沿線の敵兵には眼もくれず列車はその儘双脚まで走ると味方の大部隊と誤認して手を舉げつゝ近付いて来る敵兵を引きつけて置いて一瞬射撃を加へつゝこれを殲滅し

擊に依り凡そ四百の死体を遺棄して、恐くも南方に潰走せり。(二)敵軍の敵の兵力は凡そ五、六千にして、装甲列車を有しあり。(三)黄河は河市八十メートル乃至百メートルにして、適所に橋ありて、敵軍を呈するも我軍は執拗に數個の橋梁を占據した

戦報の内幕
滑り落ちるのか

一此方は双脚だが君等は何をぐづぐづして居るんだ日本軍はもう直ぐ其處へも着く筈だ早く陣路を壊して逃げて来ないと此方が全滅だ
と勢喝つて居る通譯は突撃の機で「ヨシ判つた直行くぞ」と綺麗な北京語で急進装甲列車は準備

首相、池田参議と懇談

新首相は一日正午池田参議の來邸を求め午餐を共にしながら財政經濟問題に就て意見を聴取した

樞府、藏相から財政聴取

樞密院では一日臨時本會議終了後、藏相の居残りをも求め、閣下の財政經濟政策に就て詳しく説明と

おきた腕相撲豊雄行司雲母摺大判歌麿
おひさ



東方閣
西方引
歌麿画
歌 大判 司行亟之菊撰相腕さひおたきお



歌 大判 司行扇花引首さひおたきお



歌 大判 引枕王仁たきお屋波羅

様原製

〇兄王伶一時流行、是美人の相撲行司也美人、此能り
浮世俗外人の喜ぶ風俗伶とてお拵と雖も

日清戦争當時の思出

附日露戦役従軍の事

廣瀬菊雄氏談

今回は芝居や寄席の事でも、お咄し申さうかと考へてゐたのですが、時節柄餘り呑氣らしい事も申し難いから、芝居も日清戦争時分の事、それから其頃の漫畫、封筒の戦争畫、玩具畫のやうなものを少し集めても居りますから、御覽に入れて斯う云ふやうな事でも、聊かお咄しいたませう。

日清戦争の頃、何が一等景氣が好かつたかと云へば先づ新聞の號外賣りでしたらうか。捻鉢巻に褌がけと云ふ扮装で、號外々々大勝利號外と、呼聲高く駈行く威勢の好さ。腰に提げた鈴も、今のより幾個か多かつた位で、殆んど毎日市中到る處チンチンと、羽根が生えたやうに飛ぶ新聞號外、一枚一錢に十錢銀貨一個

はおろか一圓紙幣で剩餘アいらねえは、大勝利に歡喜感激の餘りで、斯んなのは例外ですが、兎に角號外賣りは大變な景氣でありました。

それに引替へて、芝居や寄席と來ては非常な不景氣で、寄席などは場所にもよりますが、常は三百位もあつたお客が、一としきりは只た三十人ばかりと云ふ哀れな有様。名優團菊の芝居でもカラ駄目でしたが、夫の平壤で原田重吉の玄武門破りが大評判な處から、歌舞伎座でも之れを一番目狂言に脚色んで、菊五郎が原田重吉を演りました。これを御覽なさい：：：(一) 本番附を出して) 二十七年十一月一日開場で、狂名名題は「海陸連勝日章旗」これが其の新作の戦

争劇、中幕が「浮世又平」即ち吃又でした。その頃は時局を扱つた新作物ですと役名に本名は罷り成らぬと、其筋から殿しいお達しであつたさうで、原田重吉を澤田重七としてあります。

玄武門の場は花道から二十名ばかり兵隊が出て來て、舞臺の玄武門を望んで一齊射撃をやる。其中で一人前後の間隔を少し廣くして、お目通りしたのが菊五郎の澤田重七で、敵も應戦して双方バチ／＼と豆を炒るやうな音は南京火花か何かでドン／＼ヂャン／＼鳴物入りの奮闘に、日本兵の強さを見せ、結局重七が開門の大見得でしたが、二度と見る程の芝居ではありませんでした。團十郎も海軍の將校か何かで出ましたが、今はその印象さへ残つてゐない位です。その時見て置いて好かつたのは中幕で、團十郎の又平に菊五郎の女房おとく、孰ちも實に天下一品でした。それでも世間の不景氣から大入りとは行かなかつたやうでした。その頃は一體に物が安かつたので、歌

舞伎座見物をして、何程もかゝらなかつたものです。此の畫本番附にもある通りに、場代が一等で四圓五十錢、土間が二圓五十錢、之が四人づめですから實にお安いもので、一等でも一人分が一圓十二錢五厘で、食事をした上に、往復俵に乗つても僅か二圓もあれば結構と云ふ次第、今から四十三年前の事で、それから時代は大正を経て昭和の今日になつたとは云へ、歌舞伎の觀劇料も以前とは大變な差ひ、世の中も變れば變るものぢやありませんか。

其後明治二十九年でしたか、玄武門の勇士原田重吉が、興行師の口車に乗つて名も知れない旅廻りの壯士役者に加はり東京にも遣つて來ましたが、之れが其時のもので：：(一) 一枚刷りの畫を取出し) 福榮座とあるが、それは淺草七軒町で、後の開盛座です。今度は本物の原田重吉が舞臺に立つて、玄武門の功名手柄を見せたのですが、芝居にも何にも成つてはゐないマア見世物です。氣の毒にも興行師の食ひ物になつた譯で、金鶏勳章の軍人が壯士役者の仲間入りと云ふので、甚だ

不評判、興行師が思つた程の入りは無かつたと云ふことです。

兎に角日清戦争時分一としきり、原田重吉の評判は大したもので、：：(其當時賣出した封筒數種を取出して) 斯うして封筒にまでも、玄武門で支那兵を斬倒した圖を描き、上部に原田重吉平壤開門と書いてあります。其他の封筒は旅順攻の圖、凱旋門と支那兵降伏の圖、凱旋祝ひ滿艦飾軍艦の圖、京城に於ける各國使臣會議で、大島公使對袁世凱の圖等で、斯うして今も保存して居りますが、他にもいろいろのものがありました。

それから、錦畫もいろいろ澤山出來まして、想ふに二十種も三十種もありましたらう。昨今所謂時局の反映で、市中到る處古い繪双紙類の販賣店には、その時分の畫が店頭に掲げてありますから、無論何方も御承知でありませうが、二枚続き、三枚続きの中々見事な繪がありませう。私の今持つてゐるのは漫畫錦畫ですが：：(一) 二枚一組の彩色刷漫畫を出し) 此の通り人形屋見立の二枚一組で、右の一

枚は武者人形の店ですが、軒の紺暖簾のマークは山形に勝の字で、店頭の一方に低く掲げた白暖簾には真中に「日本人形有利出し」右側に「大勉強一戦も引なし」左側に「山海町ニテ日本屋勝兵衛」と書き、人形陳列棚の前には番頭が三人ゐて、支那人の客を對手に、「清國人なぞにまけてやつてたまるものか」「なかくし(ひ)けない」支那人は「あなたそんな我まん云はないで、まけてくれるよろしい」と云ふ文句。見物人にも夫れ夫れ文句があるが、その中にも一人の大工の文句は「清國やばあんなにまけて、よつほど大こくばしらがゆるんでゐるか、今につぶれるだらう」は面白いぢやありませんか。

左りの一枚は雛人形の店で、雛を東京訛りではシナと云ふから、雛を支那にきかせたものです。軒暖簾は紫色で商標の圓の中にまけの二字はまるまけと云ふ趣向。白い暖簾の真中には「しな人行大反敗所」、右側に「大まけ仕候」、左側に「山海町ニテ清國屋弱平」人形陳列棚の前に三人の番頭が、軍人のお客に平蹲踞

「まけにまけました」おまけ申し
ます。皆おし(ひ)きとりをねがひます。
まけました「いらつしやい」お客「そ
のしな吾がおもつ所にまけんか」陳列棚
の横に立つてゐる主人「そう皆まけては
こまるじやないか」人の番頭「まける
つもりはございませんが、よんどころな
くまけました」見物の商人、女子供も夫
れれ文句入りで、畫工は誰ですか有名
な人ではありませんが、一寸面白く出来
て居ります。

× ×

子供の遊戯も戦争ごつこが大流行り
で、鐵砲サーベルなど玩具の武器は云ふ
までもなく、其他いろいろありました
何んでも日本大勝利で、弱い支那と極
つて居り、三つ四つの幼児でも、チャン
坊主と云はれるとペソをかく。然る
に小さな子供にも、遣れば喜ぶ畫紙の
やうなものも、いろ／＼さまざまで、私
も一枚持つて居りますが……(と示され
たのは蠟半紙四つ、切に新發明日清大激戦と肩
書のある赤畫)上部に奉天、北京天津の三
城門、下の右に日本の騎馬將校と二人の

兵士と大砲。左に清國の騎馬將校と二人
の兵卒とで、兵は降伏でお辭儀をしてゐ
るが、畫としては斯うした甚だ拙い圖
で、賣藥の行商人が子供に呉れるやうな
實にお粗末極まる畫紙です。處が此の畫
紙には面白い趣向があるので。それは
大砲の口から細く藥が引いてあるから、
發砲の思入で、砲口に線香のやうなもの
で火を點けると、その火が傳はつて北京
の城門へ行き、奉天や天津の城門へも行
き、其處でバチと音を發すると云ふ仕掛
ですから、砲彈命中で敵城陥落。そこで
日本大勝利萬歳と子供大喜び、これなん
ぞは鳥渡思付きの玩具畫です。

それから日露戦争の頃にも、いろ／＼
な事とお話ありますが、實は私も従軍
者の一人で、と云ふものは輜重輸卒の第
一補充であつた處から召集されましたの
で、速く戦地へまゐりましたが、それに
一度も敵にお目にかゝらないで内地に歸
つて来て、始めてロスケの顔を見たとき
ふのだから、我れながら驚いた話です。

× ×

驚いたと云へば、全然軍事教育の無い

補充の我々が、十四日召集の一日おいて
十六日に、直ぐ出發、それも可いが、日
清戦争では軍夫の行つた仕事を、今度は
我々がやらせられると云ふのでしたから
實に驚きました。産れて以來労働の経験
一つ無い奴が、俄かに軍夫の役目は逆も
遣り切れない、と云つた處で仕方が無い
から、何んの我も日本男子だ。皇國の爲
めに粉骨碎身の御奉公、此時こそ豪
うな事は云つてゐるもの、實は内々心
細く思つて居る處に、魚河岸の荒木さん
と云ふ懇意なのがたづねてくれ、お前の
やうな弱ん坊は、逆も碌な働きは出来ま
いから、せめて陣中休養の際將士慰安の
娛樂でも提供しろ。それも矢つ張り御奉
公の一つだ、と云つて餞別がはりに松旭
齋天一式の手品を傳授してくれましたの
で、成程こいつ面白いと、手品の種まで
も用意しましたが、兎に角兵隊だと云ふ
のに銃も剣も支給されないで、丸腰だか
らこれもまた驚いた。すると之れも懇意な
人から餞別として、短銃一挺貰ひまし
たから、先づ之れで少しは兵隊気分にな
りましたが、併し輜重では幅の利かない

と夥しい。

さて、愈よ出發だが、背囊なしで、其の代りに支給されたのが一本の眞田紐、そいつで荷物を背負つた態は何と云つて可いか、餘りに情けない兵隊です。處が此の兵隊仲間に、講談師の貞山も居りまして、一緒に廣島から宇品に出て、御用船土佐丸に乗りましたが、貞山は其頃から講談が本業でしたから、船中でも一席辯じましたが、私の手品は隠し藝を文字どほり、先づ無事渡海して、柳樹屯に上陸しました。

彼地は土烟と云ふのか砂埃と云ふのか何しろ甚い埃で、時によると目口を開けて居れない。それで騎兵などを見ると、皆な眼鏡を掛けて居りましたが、我々に支給されたのは蚊帳地の目隠し見たやうなものでしたから、愈よ益々情けない。それから遼陽まで行くと、早速陽加答兒で後送と云ふ始末、ですから戦地へ行つてロスケを見ず、折角持参の手品の種は持腐れとなり、遂に太夫お目通りしないで了ひました。イヤ飛んだ耻をさらけましたが、併し考へると、あの時は軍費不足で、武器其他軍需品の缺乏が思はれます。今日では軍備充實で、支給品の點から見ても、今の兵隊はマア仕合せと云はねばなりませんまい。(畢)

我邦に於ける牛肉食用の由來

久松 緑川

.....屠牛場の創設と神戸牛.....

牛肉食用は古來我邦では禁制であつた

は、之れはまた格別の慾張り婆アさんで、

のが、いつしか解禁となつて、哀れや牛の骸骨として屠所へ牽かれ行くのを見るに至つたのは、實に黒船渡來以後のこと

肉食者が追々増加して、其れが比較的

なぞと云ふのがあると、親爺忽ちカンカ

である。但し、それ以前から、我が六十餘州列藩の中にも、江州彦根藩に於てのみ、公然屠牛が行はれてゐたが、併し之れとても廣く食用と云ふのでは無く、釋典即ち孔子祭典用と、薬用とに過ぎなかつたもので、特に白牛を擇んで、その肉を味噌漬としたのであつた。

水戸烈公は此味噌漬を好まれ、年々彦根から取寄せて居られたが、藩主掃部頭直弼は元來佛法歸依の人であつたから、斷然屠牛を禁じたとあつて、其後牛肉の味噌漬分配を絶つたと云ふ説がある。だが之れは恐らく水戸彦根兩藩の反目から起つた臆説らしい。と云ふ譯は、後にも幕府の大病院では、其味噌漬を彦根から取寄せて居り、患者の外、誰れでも試食希望者は、願書を出せば賣下げて貰へたと云ふことに依つて、考へられるのである。

扱話は本筋に戻り、黒船の來航で、安政の末愈よ開港となり、神奈川續き海岸の一漁村が互市場となり、その横濱に外人居留地が設けられ、續々渡來の歐米人が日常の生活上、差當り困つたのは牛肉を得られない事で、いくら金を出すと云

つても賣つてゐる所がない。されば屠牛場を設けるの外はないが、それにしても第一に牛其のものを手に入れることが容易でない。そこで便船によつて遠く米國から、或は支那から牛を輸入することになつて、横濱に屠牛場を設け、之れによつて居留地だけの需用を充たしたが、其頃亞米利加八十五番館が其の牛肉の大々的販賣店として知られたものであつた。

それから追々と、内地産の牛をも屠り得られるやうになり、慶應年間外國の一商船が、神戸から三丹州の牛三四十頭を積込んで、横濱に入港した。所が其の肉の美味、外國産に優ること數等だと云ふ評判で、之れより神戸牛の名が起り、爾來神戸牛は内地の産牛中第一と稱せられてゐるのであるが、其の産地は上述の如く、三丹州、即ち丹波、丹後、但馬を始めとし、山陰山陽各地で、是等地方産のものにその集散地の名を冠して、神戸牛と稱するのであること、特に云ふまでもない。

邦人牛肉

販賣業の元祖……

江戸で牛肉販賣の鼻祖は、中川嘉兵衛と云ふ者で、此の人は後に北海道へ赴き

我邦の製氷に於ても元祖と呼ばれてゐるが、英國公使が高輪の東禪寺に駐在の頃の居留地から求めて来て、東禪寺へ納入した。その頃はまだ汽車も俾も無かつたのだから、江戸横濱間をテク／＼と、毎日往復は大變御苦勞な譯であつたが、併し利益も相當多であつたと云ふことである。その當時民間では、外國公使の事を俗にメノシタと云ひ（その意味不明）その他の外人官吏は領事も何も、總てをコンシユルと呼んで、其處に出入りの商人は、弗函でも搦まへたやうに思つてゐたさうである。

處が、中川嘉兵衛は常に横濱の居留地に出入して、米國から輸入の水を見もし且つ又外人から其の採取方法等の事を聞きもして、將來水販賣の有望なることを思ひ、更に此の事業に着手した處から、英公使館へ牛肉納入の營業は、之れを堀越藤吉と云ふ者へ譲ることにした。

堀越藤吉は在原郡白金村で、可成りの農家であつたが、豫て懇意にする中川嘉兵衛が右營業を有利だと云ふので、喜んで譲受けたのであるが、但し表面は都合上依然中川名義と云ふ事に、相談が纏ま

つたのである。

さて、それから程なくして、江戸は東京となり、築地にも外人居留地が出来たが、これは奥羽方面の戦争の際、負傷した諸藩の官軍兵士が、東京に送られて、大病院に收容中、與へられた牛肉によつてその美味を知り、且つ健康上にも有益な事を知り、それからして、當時の智識階級たりし武士間に、從來の牛肉嫌忌の謬見が認識せられたのも、即ち一つの原因で、當時の所謂文明開化の肉食者流の多くは、町人百姓の平民階級では無かつた。

斯う云ふ次第で、牛肉需用が増加した處から築地本願寺の裏手に英人のジョーヂュと云ふ者が、牛肉販賣店を開業したが、非常に繁昌したものであつた。

處で、政府筋でも斯る有利な事業を外人の獨占に任すべきものではない、と云ふやうな議論が起つて、築地に牛馬會社と云ふものを設け、同時に屠牛場をも設けたのであつた。けれども、之れは程なく民間營業に移してしまつた。

牛鍋の開祖

……開店の大奮み……

白金村の堀越藤吉は上述の如く中川嘉

兵衛名義で、引續き英公使館の牛肉御用を勤めてゐたが、世は明治と移り變つて肉食者も追々と増加するので、進んで營業擴張の方針を取り、東京市内の何處かに牛肉販賣店を開き、兼ねて牛鍋の飲食店をも開業したいと考へ、先づ芝から京橋邊にかけて、適當な貸家を求めたが、家主は堀越の營業を聞くと、誰れも彼れもが殆んど申合せたやうに遊面をつくつて、折角だが眞平御免と斷る。時たま慾深なものがあつて、家賃を特別に多分出すならお貸し申さうとあるが、愈よ貸す借りと云ふ段になると、町内の五人組が聞込んで、大變な抗議だ。而かも其れが口頭ばかりでない。若しも其の様な穢らはしい商賣に家を貸すなら、先づ家主の住宅から打毀してしまふぞと、實際やりかねない恐ろしい權幕に、いかな慾張りの家主でも、怖氣を震つてイヤ斷じて牛屋などに貸す事では御座りませぬと、それで直ぐ破約と来るから遣り切れない。

だが、廣い東京市中然うした處ばかりではあるまいと、堀越は尙ほ諸所方々と借家を索め歩いて、漸うと芝の露月町に一軒探し當てたが、その家主と云ふのは、之れはまた格別の慾張り婆アさんで、

高い家賃を承知で、相違なく拂ふと云ふ事なら、假令五人組が何んと云つても構はない。威嚇し人も人の家を毀すなんて、實際そんな亂暴が出来るもんぢやありませんよ、と鐵面に笑みさへ浮べて、何時でもお入りなさいと云ふ挨拶に、堀越は大に喜んで、即時借受の約を結び、早速店の造作に着手し、器具一切を整へて、牛鍋屋を始めた。之れが後に永く牛鍋の開祖と云はれる露月町の中川なのである。

それから、此の露月町の中川に續いて開店したのが、京橋の三河屋河合萬五郎、築地采女町の角屋宮川清吉、神田橋の桃林舎野口兵次等であるが、三河屋と角屋とは鍋賣り、桃林舎は肉の切賣りばかりであつた。それから追々と市中に肉屋の開店があり、後年神田淡路町に開業した中川は、堀越藤吉の養子で、清三郎と云ひ、上述の同業者及び水町久兵衛など云ふ人々と共に斯業發展の事に盡力した同業者中の功勞者だが、併し其中にも格別の功勞者は三河屋萬五郎だと云はれてゐる。

牛肉食用

……率先知名の人士……

肉食者が追々増加して、其れが比較的

智識階級の武士に多くあつたとは云へ、何しろ明治初年の事で、武士の多數は頭に何とか銀杏とやら云ふ大髷の髷を頂き腰にはまだ兩刀を横たへてゐた頃であるから、主人は肉食が希望であつても、家庭では牛肉大排斥だ。別して老人でもあらうものなら猶更の事、苟も武士たる者にして穢多非人如き賤民の……と前提つきの恐ろしいお小言が出る。殊に國學の心得でもある人だと、抑も我邦では神代以來……と大歳神が牛肉を忌嫌はせ玉ふと云ふ、講釋から始まる難かしさ。斯う云ふ風であつたから、肉食者の數は其實、高の知れたものであつたのだ。

また、町家方面は何うかと云ふに、之れもチョン髷を後生大事に保存してゐた時分で、話は少々餘談に涉るが、始めて紙幣寮を置かれて、芳川顯正が其長官で募集した三百人の職工に對して、掟として出勤の際身體検査に結髪は不便だから斷髪せよと命じた。すると其翌日、職工の八分通りは、病氣と稱して出て來なかつたと云ふ事だ。若い者すらそんな風だから、老人の舊習固守は云ふ迄もない。であるから、倅なる者にして、牛肉を喰ふなどと云ふのがあると、親爺忽ちカンカ

つても賣つてゐる所がない。されば屠牛場を設けるの外はないが、それにしても第一に牛其のものを手に入れることが客

ンで、穢らはしいと頭から畜生呼ばり、其最も甚しきに至つては、一人息子に勘當を申渡したのさへあつたと云ふ位ぬ。

で町家方面でも暫らくの間急激に肉食者の増加を見なかつた。

處が、斯うした時分に誰れが何んと云はうが、毀譽褒貶一切お構ひなしで、率先して外人同様、常に牛肉を食用とした

知名の人々は、開成所の柳川春三、之れに次いで緒方惟準、福地源一郎、宇都宮三郎等の顔觸であつたが、併し其れも始

めの内は流石に世間體を憚り、食用の牛肉は之れを自宅或は役所の方へ配達させて、牛鍋屋へは餘り行かなかつたと云ふ

話だ。また、福澤諭吉翁の如きも、その頃壯年で之れも肉食先者の一人であつ

たと云ふ事であり、また十五代將軍慶喜公は其の初め一橋家時代には大に豚肉を

好まれたと云ふので、豚一と云ふ綽名さへあつたが、後將軍在職中にも、私かに

新門辰五郎に命じて、日々二分宛の牛肉を求めさせられ、辰五郎は夫の中川の

手を経て、外人の販賣店から買入れたと云ふ話もある。但し此の辰五郎云々の話は、

事實保證の限りでないが、兎に角慶喜公の肉を食するは其の最も相違なかつた

うだ。

……支店開業に
御親兵の援助……

噓か本當か知らないが、中川や三河屋には西郷も行き、篠原も行き、福澤や緒

方などの顔も見えたと、兎に角相當な人物のお客が来るやうになつた。斯うなる

迄には固より中川でも、三河屋でも、營業改善に相當努力した事は云ふまでも

ないが、愈よ益々客待遇に注意を拂ひ、且つ又同業者相提携して、前にも述べた如

く、營業擴張に努め、他の獸肉屋をも勧誘して、牛肉兼業或は牛肉専門たらしめ

る等、大いに運動したものであつた。然うした結果顯出して、市中屈指の牛肉店と呼ばれたのは、本郷龍岡町の豐國

同切通しの江知勝、四谷の三河屋、甲斐坂の甲州屋、厩橋の富士山等であり、其

後の開店は木村莊平のいろはと云ひ、金子屋と云ひ、吉川、今文、今清、平野、米久、世界等々随分數多く牛肉屋全盛と

我邦の製氷に於ても元祖と呼ばれてゐるが、英國公使が高輪の東禪寺に駐在の頃その御用商人となり、牛肉は之れと賣

ふ事である。

……牛鍋屋は
從來の獸肉屋式……

牛肉の鍋賣りは上述の如く、芝露月町の中川が開祖であるが、猪鹿の肉鍋は既

に以前から相當盛んに行はれてゐたもので、國學者本間游清の隨筆中にも、斯う

云ふ事が書いてある。曰く、予が十歳許りの頃は猪鹿の肉を喰ふ人さへ、さのみ

多からざりしが、二十より以來四十に及ぶ頃は、上下老若、江戸人も田舎人も皆

喰ふ事になりて、冬の日極寒の時などは、肉を與へて酒を賣る家所々に出来、出入

る人群集せり。夫も初めは古へのさまなりしが、當卯年の冬は、夜中に鍋焼の肉

を賣り、諸方を賣歩く事風鈴蕎麥の如く云々とある。

游清は嘉永三年七十一歳で歿した人であるから、その二十歳から四十歳に及ぶ頃と云ふのは、寛政より文政頃に至る頃

の事であり、之れに依つて見ても、猪鹿の肉鍋賣りは、江戸最盛期の文化文政頃

から市中諸所に在つたことを知り得られるのであつて、俗に是等の獸肉店をも、

んじ屋と稱へ、麴町甲斐坂のもんじ屋の如きは、その最も有名なるものであつ

たに惜しいことであつた。

話は前に戻るが、東京は案外にも頑固な守舊家や、御幣擔ぎの没分曉漢の尠くない處で、昭和の今日すら然うなのだから、況んや明治の初年にをやで、貸家でも、牛肉屋には家主が嫌つて貸さなかつた事は既に前に述べたが、中川の主人堀越は其後復々貸家難に大閉口したのであつた。

其頃市ヶ谷の尾張屋敷(今陸軍士官學校の所在地)に、御親兵の屯營があり、露月町の中川は御親兵のお客も来るやうになつた處から、その便利を圖り、旁々營業の擴張として、市ヶ谷八幡神社附近に支店を設置すべく、適當の貸家を擇んだが、

何んと云つても家主が承諾しない。乃で其の事情を御親兵に訴へると、何しろ勇氣勃々の荒武者揃ひであるから、そいつは言語道斷ぢや、我々の肉食を妨害するとは怪しからん、ヨシ我々が談判して呉れると、大變な意氣込で、早速出かけた。すると家主は吃驚り縮み上つて、一

も二もなく承諾とあつたので、芽出度、中川の市ヶ谷支店開業となつた。そして又此の御親兵客の援助が牛肉商の發展運動に間接の力となつて、營業者の増加を

つたのである。さて、それから程なくして、江戸は東

た。尙ほ右の文中に、上下老若云々とあるが、併しながら武士は勿論、町人でも

多少身分ある者は、世間體を憚り、假令行くにしても、薬喰ひと云ふ體の好い名義を用ゐたもので、おつけ晴れて出かける者は、餘り無かつたと云ふ事である。

處で、露月町の中川以下最初の牛肉屋は、その營業振りを從來のもの、んじ屋に倣ひ、店内の模様も之れに御安直の鰻屋と蕎麥屋とをこき交ぜたやうな鹽梅式で座敷に市松の疊を敷き、客と客との間は

衝立の境と云ふ風で、甚だお粗末なものであり、それからお値段は、牛鍋が三百文、生肉一斤が二朱と二百五十文から四百文位の、尤も上肉は三朱、ローズは一分、ヒレが一分二朱と云ふのだから、是れ亦甚だ御安直で、而かも風味が頗る佳

い。鰻なんぞよりも餘つ程割方だと云つて來た客は、澤山あつたと云ふものゝ、其れは殆んど、折助や車力など下級の労働者ばかりであつたと細い。

併し、やがて世間の様子が變つて、武士の顔もチラホラ見える、文明開化の散髮頭も見えるやうになり、後に新聞記者の藤田茂吉が中川の二階で、牛鍋大盡氣取り、少年組の隊長として盛んに氣焔を促す一原因ともなり、殊に政府筋でも前述の如く屠牛場を設け、肉食を奨励したと云ふやうな事もあつた處から、その頃開店牛肉屋では公然と、「官許牛肉」或は「御養生牛肉」と書いた旗を出したり、看板をかけたりましたもので、厩橋の富士山の店頭には明治の末迄も官許の文字ある看板が残つてゐた。

尙ほいろ／＼な話もあるが、其は追て復た述べることにし、本稿は以上として擱筆する。(畢)

立志學舎試問條目抄

【世界國畫】
支那ノ國稱、地勢ノ大略ヲ示セ
上海ト香港トノ説話ヲ聞ク
支那古今ノ大勢ヲ説明セ
其英國ノ兵ヲ被リシ始末ヲ談レ
印度ノ地勢、其區別ハ如何
(カルコッタ)ノ位置ヲ説キ英國ノ亞細亞諸國ニ横行スル本源ニ及ヘ

* * *
民權自由運動の學問的基礎が相當確りしたものであつた事はこの單篇からも察せられる。



春霜疊百草雷雨起篔簹竿 子治

子治

竹石圖 瞿子治筆

新井御川治の碑篆額
 有は石のありし大田ぬん代筆楠瀬河



八大方寸を要するこの刻定白に似ひるもの

標原製

字の類畧の碑大高押

